界を指して居るのである。

第三　日本が世界の中心なり。

それにつきても一體『世界の中心』はどこかと申すことを考へて見ねばならぬ。ただ漠然と中心などと申すことは決してありませぬ。各人の動かない生活を爲して居る所を中心として始めて世界が極まつて來るのである。古神道の立場から申せば、天皇を奉じ隨神道に遵ひ眞面目を旨として存在し來つた所に世界の中心が在る。即ち一生懸命で鐵砲でも打つときと同じ樣に、各人の眞面目の立場が世界の中心で、餘は其の周圍になる。それを除いて世界の中心がどこに在るかと云つても、決して求むる事は出來ませぬ。故に地球で考へれば地球が世界の中心である。其の外にどこが中心かと云つて求めた所でそれは分からない話である。又此の地球上の生活であるなら、我我より見れば勿論日本が其の生活の中心である。然るにそれを考へずに、或は支那が世界の中心であらうとか歐羅巴が世界の中心であらうとか考へるのは間違である。自分に眞面目を有つて居れば、其の立場たる自分の處が中心となる。若しも眞面目を有つて居らねば中心とはならぬが、眞面目を有つて居つて其の眼から見れば、自分の立つて居る所が世界の中心に相違無いのである。さう云ふ見地から或は世界全體の名稱を採りて此の日本及び其の內部の名稱となし、又は古神道の中心となる所のものを取り、それを世界全體の名稱にして居るものが澤山在つて『大八島國』と申すのもただ澤山在る島の集まりだけを謂ふのでなくして、實は現實世界全體の名稱であると見るべきものであらうと思ひます。

第四　古神道の神神は世界の神神なり。

延喜式の祈年祭の祝詞の中には天照大御神は有らゆる世界の神樣におはしまし、天皇は其の天照大御神の御光に依つて有らゆる世界を支配し給ふ精神が見えて居ります。其の祝詞は延喜の時代に昔から傳はつて來た祝詞を書き表はしたものでありますが、是に由つても、昔から雄大の考を有つて居つたことが分ります。ただ後世になつて勝手の事を言ふ譯でなく、昔から斯かる精神で言傳へて來たのであります。其の言表はし方は哲理的ではありませぬが、反つて雄大なのである。印度などは哲理的の想像を逞うして居るが日本は實

際在るものを取つて言表はして居ります。

第二項　神人を生む

そこで國を御生みになつて後に更に準備としての神神を御生みになります。『既に國を生み竟へて更に神を生みます』と古事記にもあります。さて澤山の神神を御生みになりますが、火の神を御生みになつてより後に至り古神道の信念が漸く花咲いて來るのであります。其の火の神を御生みになるまでの間に御生みになつた神神は澤山あられますが、是等の神神中で神代本紀にお現はれになり活働せらるる御方は少うございますから單に御名に依つて其の御性質を想像し得るに止まる御方も多多あります。從つて昔から此の神神の解釋については大いに區區になつて居るのみならず、本居先生の如き立派な學者の說でさへも承服し難い所があります。

茲に御注意致して置きたい事は古事記等の如きものを解釋するには自分に確證に基く覺信が無い以上は、濫りに其の記載を否定すべきものでない。確實なる證據があつて斯う云ふ譯であると斷言が出來る場合は兎に角、自分に覺信が無いのに『これは重復して居るとか、間違であるとか申すこと』は慎まねばならぬと存じます。

第一　前段の物素の神神。

先づ初に　大事忍男神より　速秋津日子神、速秋津比賣神まで十柱の神に就ては、本居先生はこれは重複して居り、他の所のものが亂れてここに重り入つて來たものであらうと仰有つて居ります。私は此の說には贊成が出來ませぬ本居先生の御說は一般に結構と思ひまするが、ここだけは贊成が出來ぬのであります。私はこれは重複したものでなからうと考へます。一番初めに御生みになつた　大事忍男神についても本居先生はこれは　事解之男命のことであらう。即ち　伊邪那岐　伊邪那美の神がこれから先は共共に事を爲さらぬとお誓ひになり、一心同體の關係が斷絶した時に生れた　大事忍男神であると仰有つて居ります。けれども私はさうでないと思つて居る。既に國をお生みになり、これより神人を生み、總攬者をお生みにならねばならぬから、愈々これからが

大事であると申す眞面目の考から　大事忍男神を御生みになつたのであらうと思ふ。それから數數の物素の神神を生んで追追大切なる諸神を生む準備をなさる。先づ岩石(此の中には金も含んで居る)に關係の有る神を生み、次に水に關係の有る神をお生みなさる。

(一)岩石に關係の有る神には　石土毘古神　石巢比賣神、又斷岩絶壁のやうな處に關係有る　大戸日別神或は瀑布が高い處からえらい勢にてどつと落ちて來るやうな　天之吹男神(これは大祓の祝詞の中にある　氣吹戸神に當るならん)それから　大屋毘古神(これは瀑布の下に在る瀑壺とか淵とか云ふやうな處に關係ある神)次に雲や霧に關係有る　風木津別之忍男神などを御生みになつたのであります。(二)次に水に關係有る神としては　海神又は　大綿津見神、次に　水戸神御名は　速秋津日子神、次に　速秋津比賣神などを、御生みになりました。此の最後の　水戸神は御二柱であります、此の御二柱の神が河と海とに因りて、持ち別けて、又色色の神神を御生みになります。

此の次に風の神、御名は　志那都比古神を御生みになり(風は疾く走るものである)(『志』とは『氣息』のこと　『那』は長いと云ふことであり又『都』は助辭であります)。次に木の神を御生みになつた。木神は風神に緣が近く(木は靜にぢつとして居る所へ疾風が來て動かして行く)此の神の御名は　久久能智神と申します。次に山の神野神を御生みになつた。山は動かずして天を衝いて居り、野は平らかにして地面について居る。此の山神は　大山津見神と申し　野神は　鹿屋野比賣神或は　野椎神と申します。さうして　大山津見神と　野椎神との二神が山野に因りて持ち別けて、又色色の神を御生みになつて居ります。

之を纒めて申せば、石神　水神　風神　木神　山神　野神と有らゆる方面の物素の神神を御生みになつたのである。けれども此の頃にはまだ善いとか惡いとか穢れて居るとか淨いとか申すやうなことが定まつて居らぬ時であります、是等は皆中性の神であります。善でもなく惡でもなく佛敎の術語で申せば無記の神であります。是等の神神が善いとか惡いとか云ふことの定ま

つたのは、伊邪那岐命が禊を爲された時からであつて、禊を爲された後に是等の神神にまで善惡の關係が溯り及んで來るのであります。まだ其の前には中性の神て在られたのてあります。

斯くの如くに　伊邪那岐　伊邪那美の二神が協同なされまして、有らゆる中性無記の神を御生みなされた後に、　鳥之石楠船神亦の名　天之鳥船を御生みになつたが、これは御名の如く船に緣故の有る神に相違ない。既に海を拵へ山を拵へ種種のものが出來た所て、又船の神を御生みになり、次に　大宜都比賣神を御生みになつたが、これは五穀を生ぜしむる神てある。

細かい所は日本書紀と古事記とは少し宛色色に矛盾して居ります、けれども、日本書紀の方は漢文て書かうと骨を折つた爲めに、自から支那流にかぶれて居る所が多多ありまして、一寸素人考てをかしいと思ふやうな所は省いてあるやうなこともあります。古事記の方が昔からの事をより忠實に傳へて居るやうに考へられ、而かも統一して傳へられてあるやうてある。故に重もに古事記に依つてお話する次第てある。

第二　後段の物素の神神。

伊邪那岐　伊邪那美の神は遂に御協同になつて　火神を御生みになつたが、これは　火之夜藝速男神と申し、亦の御名を　火之炫毘古神亦の名を　火之迦具土神と申すので、何れも火の炫いて居る勢について御名を附けたのである。所が　火之迦具土神を御生みになつた結果、伊邪那美神は火傷をなされ、それより御病氣となり御苦しみになつたのであるが、其の御苦しみの中より色色の神神が御生れになつて居る。前と違つて、此の時は御苦しみになつた時であります、ますから、活き活きした神が御生れになりました。即ち吐氣より御生れになつた神は　金山毘古神次に　金山毘賣神金を生ずる金山の神次に屎に成りました。る神は　波邇夜須毘古神次に　波邇夜須毘賣神物を生ずる力ある土(埴)の神次に尿より成りました。彌都波能賣神特別に物を造る所の水の神又其の活き活きした土(埴)や、活き活きした水と相待つて出來た神は　和久產巢日神てあります。『和久』は物が湧く意味にも聞えるが、本居先生は『稚』の意味であると申して居られます。此の神は五穀を生ずる神て、其の御子が　豐宇氣毘

賣神である。和久産巣日神の精髓を受けて生成を掌る、食物の大神として、雄略天皇以來伊勢の外宮にお祀り申してあります。

大宜都比賣神も五穀食物の神でありますが、此の神も亦古事記に依ると、一遍苦痛を受け自分を犧牲とせられて、其の後に始めて立派なる五穀の神となるのである。即ち　須佐之男命が　大宜都比賣に食物を乞ひ給ひしとき、此の比賣神が鼻口等より種種の美味物を取り出てて進ぜられた。須佐之男神は其の態を伺ひて、穢汚物進ると思して、此の　比賣神を御殺しになつた。所が其の跡から五穀や蠶が生じ、それを　神産靈神が御採りになつて永遠に五穀等の種になされたと申し傳へて居ります。豐宇氣毘賣神も前述の如く　伊邪那美命が御苦しみになつた結果、活きた土や活きた水が生じ、其の上に大成せられた精髓であらせられます、決して樂樂とお生れになつたのでない。

此の　豐宇氣毘賣神は　天照大御神と並べて伊勢外宮に御祀り申して在り、新年祭にも先づ　豐宇氣毘賣神の御祭りをして、翌日　皇大神宮を御祭りすることになつて居ります。然しここで申し置くべきことは、此の神は　伊邪那岐

伊邪那美神の御二柱の共同の創設作用に依つて生れ給ふたのではあるが、火神を生んだ爲め病を起し　伊邪那美神の御苦しみの結果生れたのであります から、伊邪那岐神の元素の方は餘程遠ざかつて　伊邪那美神の元素が勝つて居られます。從つて、古神道に於ては此の神の取扱はる穀物や財寶を輕蔑せざるにも拘らず、之は情實事情と密接の關係あるものである。古神道では神に合一し其の表現者として食べることは結構であると認めて居り、衣食の神も大切なる大神として御祀り申して居りますが、衣食の爲には根之國に引き込まれる恐れがあります。所が例へば　建御雷神は之と正反對に　伊邪那岐神の方の元素の勝つて居る神で特に高天原に屬し武勇の神として高天原の理想を實現することに御盡力になつて居る。武勇の方はどちらかと云へば誤つても理想の家來となるが、財物は誤ると根之國の方に導かれる恐れがあります。

尚ほ一寸申して置きますが、屎から神が出來尿から神が出來たと申すのは不思議に思はるる御方もありませうが、まだ根之國に行かれぬ前には、淨いとか穢れとか申すことは、世の中に起つて來ないのである。今日こそ穢れとか淨いと

か云ふ事實がはつきり定まつて居るから不潔のもののやうに思ふが、世界が未だ成立しない前であるから、淨穢を超越して居るのである。神代の　伊邪那岐命の禊前の事を見て直ちに穢いとか淨いとか考へるのは餘り人間らしく考へ過ぎる誤であります。建速須佐之男神が　大宜都比賣神の仕業を見て穢いと思し召したこと等は勿論禊後のことであります。

（以上第六講）

神代本紀の終末までを略説す

今日は、此の度多數の方方が卒業せられまする都合によりて、古神道の餘りの部分を極めて簡單に申述べ了らうと思ひます。然し次回よりは又元に復し、詳しく其の續きを申上げます。

第一段　諸冉二神の產靈各論

第一　豐宇氣毘賣及　建御雷之男神を生む

前回には、古神道の認めて居る所の三つの世界のことを述べ、然る後に伊邪那岐　伊邪那美命が此の世界を御確定になることを申上げたのであります。此の二柱の神は初めに國をお生みになり、次に色色の神神をお生みになりました。最初にお生まれになつた神は、別に善の神とも惡の神とも申し上げることの出來ぬ中性的の性質を有つて居らせらるる物素の神で、佛教の語で云へば、地水火風に關する色色の元素の神樣であり、又支那の五行の信仰に當てて申せば、木火土金水に關する種種の神樣であり、最後にお生まれになつた神が　火之迦具土神であります。此の神をお生みになつた結果　伊邪那美命は火傷を爲されてお苦しみになり、其のお苦しみの中より又數數の神樣がお生れになりました。其の中の最も精髓たる神樣は　和久產巢日神と申し上げ、物の內に入つて之をどしどし成長せしむる勢力を有つておゐでになる神で、此の神の御子を　豐宇氣毘賣神と申して、伊勢の外宮にお祀りしてある。豐宇氣毘賣神は特に　伊邪那美命の方に近い緣故の有る神であられます。從つて　豐宇氣毘賣神のお掌りになる所の穀物であるとか經濟とかいふものは神聖のものであるけれども、尙ほ

極めて根之國の方に近い關係を有つて居るものであつて、ややもすると、それから穢れを生ずることにもなつて來る。五穀の神には　食持神　大宜都比賣神もあらせられまするが、豐宇氣毘賣神が最も貴い神となつて居ります。又　宇迦之魂と申す神も、五穀をお掌りになる神でありまして、平田篤胤先生は　豐宇氣毘賣神と同じ神であると申して居られます。宇迦之魂神は通俗に御稻荷樣と申して居る神で、京都の稻荷神社を始め諸方の同じ名のお社にお祀りしてあります。

伊邪那美命は　火之迦具土神をお生みになつた結果お病に罹られましたが遂に神避りました。伊邪那岐命は御一心となつて天地を經營せられつつある大切なる妹の命の神避りましたるを悲み給ひ、これは仇子である と仰せられて、十拳劍を拔き、御子　迦具土神をお斬りになりました。愛宕神社は此の　火之迦具土神をお祀り申してある。伊邪那岐命が　迦具土神をお斬りになると、其の血が側に在つた石に迸り着きて、色色な神がお出來になつた(斯う云ふことは自然科學的にお考へになつてはなりませぬ、信仰をお伽噺の樣に言ひ表はしたものであるから其の背後の信念を捕捉せねばなりませぬ)。其の神神は澤山あるが、其の精髓は　建御雷之男神であられまして、これは常陸の鹿島神宮にお祀り申してある。又　伊波比主神をお祀り申してある下總香取神宮も　建御雷之男神の御靈をお祀り申してある譯である。此の神は　伊邪那岐命が　火之迦具土神をお斬りになつた時に、迦具土神の血からお出來になつた神である、そこで高天原の方に永遠に御存在になつておゐでになる　伊邪那岐命とは密接の關係の有らせられる神で『理想實現に必要なる武勇』の神であられます。後に天孫御降臨の時高天原の理想を豐葦原に實現せられし時並に　神武天皇が此の國を建てられし時神代の理想信念により之を日本に實現せられし時に當つて最も大切なりし武勇の神であらせられます。

前から古神道では產靈と申すことをやかましく云ひ、物を打崩すのではなくして、どこまでも物を造つて行くことを精神として居る、と申すことをお話して置きましたが、火之迦具土神の如く破壞的の神でも結局は產靈

の働きを行はることになつて居る。他を害ひ自らをも損はれたけれども、結局は此の犧牲に依つて尙ほ大切なる武勇の神即　建御雷之男神の如き御方を生ぜしめたのである。古事記に依ると　火之迦具土神のお殺されになりました御身からも、色色の神がお生れになつて居ます。之を他の宗教などに較べて見ると、他では火は破壞的のものとなつて居る(中には例外もありますけれども)從つて西洋邊りでは「といふ」即鬼といへば火を持つて歩いて居り、火を道具として物を破壞し、着物なども火の色をした赤い着物を着て居り、それが物を破壞するしるしである。所が古神道に於ては火之迦具土神の如き御方ですら、ただ單純に物を破壞遊ばすのみではなくして結局は物を創設し產靈の働きをお行ひになるといふので、火產巢日神と申上げて居る次第である。それより後にも『火』と申すことが現はれて居る時には、いつも其の中から勇猛の者が生れ出て來て居る。神武天皇の御祖父に當る　日子穗穗手見命は、亦の御名を　火遠理命と申上げますが、此の神は　御妣神が御產の時に產室に火を着けてお產みになりました、其の火を征服し終られつつお生れになつた神であります。又　日本武尊は東夷征伐の時に賊の方に野に火を着けられたが、其の火の中で燒殺されることなく、更に光明赫灼たる御方として顯はれられた次第である。尙ほそれに似た事が　大國主神にもあります。大國主神が根之國に行かれて　建速須佐之男命により色々とお試めしに遇はれたときに、火を着けられて燒殺されやうとなされたけれども、到頭それにお打勝ちになつたのを見て　須佐之男命が讃嘆なされて是ならば大丈夫であると、仰せられたと申すことが出て居ります。故に火は單純に物を打破するばかりでなく、產靈の働きを行ひ、其の中から一切の武勇、天下國家を經營する所の大きな武勇が生れることになつた次第である。

第二　根之國の確定

さて斯の如くにして、伊邪那美命は到頭根之國に罷られましたので、伊邪那岐命は其の跡を追ふて往かれました。其の理由は單純にただ性愛

により戀しいといふのではなく、天神の命を以て天下を造り天下を經營する最中であつて、未だ總攬者も確定せず、此の世界も出來上らぬ中である。から、御連合が根之國に往かれては困ると思し召された爲である。所が根之國に往つて御覽になると、伊邪那美命は實に恐しい姿をして居られ、其の御身に　八雷神が鳴り轟いて居つた。雷は眼に見えず耳に聞えぬかと思ふと、突然大きな音をして鳴り轟き、ぴかぴかと烈しく光る。さうかと思ふと忽ち光も音も無くなつてしまふ。さう云ふ潛在的の力を有つて居る雷神であるから根之國に居るのは適當である。之を御覽になつた　伊邪那岐命は、これでは仕方がないとお諦めになり、御退却になつて、他の世界にお還りになつた次第である。古神道に於ては退却と云ふことは滅多に無く、此の外には　建御名方神が　建御雷神と武勇競べをして、負けて信濃國に逃げて往かるる時に退却と云ふことがある。それも高天原の神には到底及ばないといふので退却せられたのであつて、退却と云ふことは是れ以外にはありませぬ

伊邪那岐命が逃げ還られしとき、根之國と他の世界との界を確定せられ、そこに界の神をお置きになり、是より後は根之國より其の外の世界に　伊邪那美命を迎へぬことをお誓ひになり、伊邪那美命も、最早あなたの世界には參りませぬとお誓ひ遊ばされたのである。伊邪那美神の如く公明正大の御心を以て愛に依つて　伊邪那岐神と一心同體として御行動なさるお方であつても、一度根之國に往かれて根之國の御飯を召し上つた以上は、再び以前の御形體を以て此の中國にお還りになることが出來ぬことに、永遠に御確定になつた譯であります。故に其の後は、我我が一遍根之國に往きて根之國の竈の飯を食ふときは、元の形で還つて來ることが出來ぬことになりました。そこで、此の大きな世界の中で、根之國とさうでない國との界だけは確定致しました。さうして　伊邪那美命は黃泉津大神として根之國を支配しておゐでになり、伊邪那岐命は根之國からお還りになつて、非常に恐しいものや穢いものを根之國で御覽遊ばしたこと故それをお祓ひになる爲めに禊を爲された。是ぞ世界の愈〻完成する要件である。

第三　禊祓の確定と世界の完成

禊に似たることは他の宗教にもあつて、佛教では『灌頂』と申すものがあり、基督教では『洗禮』と云ふものがありますが、特に古神道に於ては禊が極めて重要なる地位を占めて居り、禊が神代本紀を生ぜしむる要件であり、萬我の本來神たる所以を主觀的に實現する始めとなつて居ります。禊に依つて穢を被ふ努力は終始大切である。今日に於ても國民全體擧つて、『普遍的性質を有する祓ひ』を年に二度(六月三十日と十二月三十一日と)致しまして、之を大祓と申して居る。これは我我が知り又は知らずして犯して居つた所の種種の罪惡とか、身に着いた色色の穢れ即ち自分の心持からでなく外から偶然に着いた穢れを祓ふので、其の大祓の祝詞はなかなか大切なものであります。これは哲學上から申しても宗教上から見ましても大切なる事であります。

さて　伊邪那岐命が禊を爲されますると、夫よりお出來になつた神神が多多あられます、先づ御身に着いて居つた品物をお棄てになると、其の品物から色色の神がお出來になりますが、次に根之國の穢れの御身體に着きて居た穢をお淨めになる時にお生れになつた神が更に大切の神である。

先づ　八十禍津日神　大禍津日神の二柱の　禍津日神がお生れになつた。これは根之國の元素を採りて、罪や、禍や、穢を、此の世界に撒布せらるる神樣であります。根之國から持つて來られた所の情實に依つて、種種の災害を此の世界に生ぜしむる神である。伊邪那岐神は斯かる神樣がお生れになつたのを見て、又更に禊に依つて　神直毘神　大直毘神をお生みになりました。これは罪禍を直す神である。禍や穢は、皆根之國に在る潛在的の事柄が理想を離れて現はれて來るのであります、其の現はれて來るものを轉じて、それに依つて善を生ぜしむる神樣が　直毘神である。

一體　伊邪那岐命が根之國に往かれたには、深い意味が有ります。古神道に於ては、根之國は認むることの出來ぬ國として排斥致しませぬ。根之國の要素がいつも此の世界に於て色色の働きを爲す力を供給して居る次

第てある。初めには　伊邪那岐　伊邪那美の神が極く卑近の意味に於て共同して澤山の神をお生みになつたのてありますが、其の後にも永遠に伊邪那美命は根之國に止まられ　伊邪那岐命は高天原に居られ、大きな意味で矢張り共同してゐらせらるる次第てあります。但し元のやうに直接に手近に御二柱が並んで御行動になる譯でなくして、卑近の意味て申せば互に懸隔せる世界に居らるるために、其の間を結びつける澤山の神神をお生みになつた譯て、其の聯絡の上から根の國の元素が穢れとして現はれて來たときには、其の穢れは　禍津日神が宰つて居り、又之を轉じて善とするといふ所て、直毘神がお生れになつて居る。我我の日常の行動に於てもただ絶對に善と云ふことはありませぬ。向上を見當として惡となる材料を轉ずる所に善がある。恰も絶對に歩くと云ふことが無いと同じく、絶對には善はない。歩くは進みながら轉倒せざる所に在り善は向上しつつ惡を轉ずる所に在る。

尙ほ進んて　綿津見神をお生みになり、又　筒之男神をお生みになる。

綿津見神は中性的のただ物質や元素を意味する神てはなくして、海の中に總ての物が流れて行くときには、どんな穢れた物も皆潔くなつてしまふ通り、物を潔くする所の神てある。海がある爲に陸と陸とが隔てられて向ふに往くことが出來ぬ譯てあるが、併し亦海が在る爲に、之を轉ずるときは反つて交通が容易く出來る。さう云ふ風に總てを轉じて善を生ぜしむる神が　綿津見神である。果せるかな此の神は　火遠理命の御難澁を轉じて豐葦原中國の經營の彼岸にお渡し申すこととなつた。又　筒之男命は御名だけについて詮索致しても其の御質はよく分りませぬが、其の御事蹟を段段調べて見ると、これは水先案内の神て、攝津等の住吉神社の御祭神（墨江大神）は　筒之男命てある。水は元交通を妨ぐるものなるも、之を轉じ之を利用するときは、益〻交通が容易となるのてあるが、此の水に依る交通を宰つて居らるる神樣が　筒之男命てあられます。

斯の如くにして根之國の要素を　伊邪那岐命が自らお持歸りになつて之を世の中に振りまかれた次第て、それが爲に禍の神も出來、又之を轉じて

善とする神もお生れになつたのである。そこで古神道の大精神はどう云ふ所に在るかと申すと、潜在的の要素を排斥せずして、努力に依つて之を轉じて明淨正直を生ぜしむることを徹頭徹尾主眼として居る。けれども、だ、だ漠然とさういふ事が出來るのでなくして、直毘神に信賴し大きな努力を以てしなければならぬと申す所で、努力が極めて大切になつて居る次第である。

さて段段と禊を爲されたので御身が淨まつて穢れが殆ど無くなつたのであるが、最後に左の御目をお洗ひになると、天照大御神がお生れになり右の御目をお洗ひになると、月讀命がお生れになり、御鼻をお洗ひになると、建速須佐之男命がお生れになつたのである。目は光つて居る處たるのみならず眼によりて光も在るので、ここからは日神月神がお生れになり、鼻は氣息を絶えず呼吸し活躍して居る處であつて、目に比すれば穢れも多く且つ荒い處であるから、比較的に根之國に近い御性質を有つておゐでになる　須佐之男命がお生れになつた譯で、俗にも鼻息が荒いなどと申

第四圖　高天原　豐葦原及根之國ノ諸要神ヲ略示ス

しますが、鼻に關係ある此の神は荒魂の神であります。

此の時　伊邪那岐命が大にお喜びになりまして『吾は御子生み生みて生みの終に三柱の貴子得たり』と仰せられた。先づこれで世界が出來上つた。今までは漸く龍を畫き了られただけてあつたが、ここに於て見事に其の眼睛を點ぜられたのであります。そこで　天照大御神をして高天原の主宰者と爲され、月讀命をして　天照大御神を助けて高天原を知しめさせ給ひ、須佐之男命をして豐葦原中國を治めしめらるやう御命令爲された。斯くして三界が始めて確定致したのである。而かも其の三界がどう云ふ風になつて居るかは、古事記の神代本紀に於て精密に定まつて參る次第である。

第二段　神代本紀と產靈

第一　豐葦原中國に於ける　天孫御降臨の準備

第一　建速須佐之男神。

豐葦原中國はなかなか風波の荒い處であつて、ただ安安として居られる所でない。そこで荒魂（あらみたま）に富んでいらせらるる　建速須佐之男命を主宰者と爲されたのである。須佐之男命は愛に依つて一心同體となられた　伊邪那岐　伊邪那美の神の御系統を引いておゐでになる神である。（伊邪那岐命が御一柱で禊を爲された時に生れられた神でありますから、伊邪那美命は御關係が無いやうに思ふのは誤りであります。伊邪那岐命が、伊邪那美命を追ひ往かれて其の御姿を御覽になつた結果、根之國から着いて來た汚垢をお洗ひになつたとき、鼻からお生れになつた神であるから、矢張り　伊邪那美命の御子になつて居る。從つて　須佐之男命は　伊邪那美命のことを御妣（はは）と呼んでおゐでになる次第であります。やはり　伊邪那岐　伊邪那美の神の愛に依つて一心同體となつた所の御性質を承けて居られますから、根柢に於ては和魂（にぎみたま）を具へておゐでになるが、それを發揚せられず、主として荒魂（あらみたま）に依つて御行動なされた神である。

和魂（にぎみたま）とは何であるかと申すと、これは色色に申しますけれども、產靈と申すことを我我の心持の方から見たものである。又荒魂（あらみたま）とは何ぞと申しまするに、『和魂と結びついて居る荒魂』は努力奮鬪であつて武勇を意味することになるが、和魂を離るるときは破壞的の荒い心持になつてしまふ。所が　須佐之男命は、本來有つていらせらるる和魂を御發揚にならずしてただ荒魂のみを以て國土を經營せられた爲によく治まらず、八拳鬚（やつかひげ）胸前（むなさき）に至るまで頰を膨らして哭き給ひ青山を枯山と泣き枯らし、河海を悉く泣き乾すといふやうなえらい荒び方をなされた。從つて此の國に居るものは皆其の眞似をして、散散の有樣となり、青青と成育して行くものが、皆眞赤に枯れて勢ひが無くなつてしまふといふ有樣であつた。そこで　伊邪那岐命が其の御行動をお咎めになつた所が、自分はこんな處には居りたくない、妣（はは）の在ます根之堅洲國に罷らんと思つて哭くと仰有つた。そこで　伊邪那岐命がお怒り遊ばして、それならば根之國に罷り往けと申され、追放せられたのである。

所が　須佐之男命にも全く和魂が存せざる譯でなく、根柢に於ては和魂を有つて居られますから、御姉神　天照大御神の處へ御暇乞に參らるる御心で高天原に往かれました。さうして高天原に於ては、種種立派な事をも爲されたけれども、亦散散荒魂をお振廻はしになつた爲に、高天原からも追放せられて根之國に往かるることとなり、其の途中豐葦原中國にお立寄りになつた。然しながら此の時には高天原に往つて　天照大御神に接觸なされた結果、和魂を御發揚になるやうになられ、最早前とは餘程御性質が異なり大に御心が輝いて來られました。前には心平らかなるを得ずして、暴れられましたけれども、今度は其の御行動に依り種種なる創設作用が行はれ、御自分が創設なさる積りでなくして爲されたことでも創設作用となつて居る。例へば　大氣都比賣神、大宜津比賣神をお殺しになつた結果蠶が出來、五穀の種が生じたから、神產靈神が之を取つて世界に於て永遠に有用なる種となされたのである。又　櫛名田比賣をお見初めになり、それより圓滿なる一家をお拵へになつたのを見ても、愛が御心の中に動いて來たことが分かる。けれども一家を立つるにも、豐葦原中國はなかなか風波の荒い處であるから容易く出來る譯でなく、先づ武勇を振つて八俣大蛇を退治し、然る後一家を興さるることを要した。須賀の宮を作られし時、立騰る雲を御覽遊ばして、『彌雲起つ出雲彌重垣夫妻隱みに彌重垣造る其の彌重垣を』と歌はれました。此御歌には、我我の溫い同情、溫い共同生活に彼の雲までが同情し一心となつて垣となり保護して呉れる、と申さるる意味が籠つて居る。斯樣に和魂の心持の一部分が働いて來られた所で、御子孫として　大國主神もお生れになつたのであります。又　神大市比賣と娶ひまして　宇迦之御魂をもお生みになつたのである。さうして、八俣大蛇を退治せられた時に天叢雲劍(草薙劍)を得て　天照大御神に御獻上になりました。ことは(熱田神宮に奉祀してあるのが此の劍である)將來　天照大御神の御系統の御方が此の劍をお持ちになつて、其の武勇に依つて、豐葦原中國を永遠にお治めになるといふ、一つの伏線になつて居る次第であります。

第二　大國主神。

須佐之男命は終に根之國に行かれ、根之國の神となつて在はしますのであるが　大國主神はどういふ御方であらせらるるかといへば　大穴牟遲神と申上ぐる通り功名の高き神であり、又　八千矛神とも申し武勇に秀でた神であられまして、御幼少の頃から努力奮闘については殆んど何れの神神にも劣らない神である。初めは詰らぬ事に努力奮闘され、詰らぬ事で多くの御兄弟からお苛められになつて、幾たびか死し、幾たびか　神產靈神の產靈の御力に依つて復活し和魂を授附せられ又根之國にも行かれ　須佐之男命にもお逢ひ申し色色の試驗を受けられて、それに及弟遊はされたのである。さうして根之國に在ます　須佐之男命から、『汝神は豐葦原中國を經營して其の主人となれ』といふ御命令を受けられ中國（なかつくに）に還られて其の授けられた方針に依つて天下を經營なされた次第である。

そこで根之國といふ世界の性質も愈〻確定したのである、これまでの所では、根之國はただ穢れて居る眞暗な處とばかり思はれて居つたが、其の穢れて居る暗い根之國でさへも、實は豐葦原中國の經營平定の助けとなることを性質とする世界で　須佐之男命も先に立つてそれを御心配になつておいでになることが分つた次第であります。根の國は中國の善美を妨害する世界ではなく或は中國の穢れを根の國に引き受けて、中國に於ける禍を消滅せしめ、或は中國に善美を實現し、其の經營を完成する爲めに絶えず必要なる元素を送つて居る所である。

古事記を離れて考へて見ても大世界に在る潛在的の存在といふものはただ邪魔物として在るのではありませぬ。それは即ち我我が神聖なる所の國家生活を益〻實現する材料となるのであります。

さて　大國主命は根之國からお還りになりました。根之國の御飯を召上らなかつたから、お還りになることがお出來になつたものと見て宜しからうと思ひます。所が愈〻中國を御經營になるについても、初めは荒魂に依つて御經營になられた。和魂の方は其の大切なる極致の處を離れて、ただ男女の性愛などについて多く用ゐられて居る。大國主命程男女の性愛などにつき色色複雜の關係の有る神はありませぬ。それは古神道の理想で

ないことは勿論である。是も　大國主神が高天原系の神にあらせられず須佐之男命系の神樣なるが故であり、又永遠に豐葦原中國の御支配者とおなり遊ばすことが出來なかつた所以である。天下をお治めになる初めには荒魂を主とせられましたが、それではよく成功遊ばさなかつた。そこで神產靈神は、其の御子の　少名毘古那神をお降し遊ばされて、大國主神と共同して國土を經營せしめられたのである。少名毘古那神は　神產靈神の直接の御子となつて居られるが、其は人間のやうな關係に於ての御子と思つてはならぬので、信仰上の意味に於ての御子である。即ち最も高い產靈といふことを、其の本質としておゐでになる神であつて、和魂に富んで居る神であられます。其の和魂に富んで居らるる神が、荒魂系にして荒魂に富んでいらるる　大國主神と共同して國をお治めになつたのであります。

大國主神は亦の御名を　葦原色許男神と申し上げて、なかなか大きく立派なる身體を有せられた神でありませうが、少名毘古那神は至つて小さく、蛾の皮を着て衣服となし、「あけび」の船に乘つて來られた位で、又ば產靈神の手の俣より漏れ墮ちてどこへ行かれたか分らなかつたと申す程の小さい神であります。此の神樣が　大國主神と共同して國土をお治めになつた爲に、よく治つて來たのである。和魂は形體の大小には依らぬもので、ただ品質にある。大國主神の如き神さへも、單に荒魂のみに依つては國土の御經營が出來ぬので、少名毘古那神の和魂の力を借りて始めて經營がお出來なされた譯である。所が　少名毘古那神が淡路島に往かれて稻子の如く麥稈を這ひ上られ尖の方へ往かれし所、彈かれてどこかの國へ飛んで往つてしまはれました(これも信仰の心持を以て見なければなりませぬ心持を言ひ現はす手段として假にさう言傳へて居るのである)。大國主神は、漸く國土が治まりかかつて來た所で、少名毘古那神がどこへか往つてしまはれたものでありますから大分お困りになり、其の後は色色の御行動が思ふやうにいかなかつた。そこで大に心配して居られると、海を光らして寄り來る神があつて、「お前は何を心配して居るか」と尋ねられたので「私はどうも思ふやうに國が治まらぬので、それを心配して居ります」と答へられ

ると。「そんな心配をすることはない、それよりは我を祀つて我の命令通りに行動すれば直ぐに治まる」と仰られたので、大國主神が驚いて「さう仰有るはどなたであるか」と問はれると「我は汝の和魂である」と仰有つたのである。由つて早速御自分の和魂をお祀り申して、「大和の大神神社は　大國主神の和魂をお祀り申してある」其の和魂の御命令に依つて國土を經營せられた所が始めて經營が完成したのである。つまり、少名毘古那神は和魂を主にして、故らに御身を小さく見せたのである、併し此の和魂は、大國主神の外から持つて來て取り付けたものであるから、眞に國土を經營する力とはならぬ、どうしても御自分の內部の和魂を發揚しなければ、國土經營は出來ぬと申す精神であります。夫故に、少名毘古那神を淡路島で麥稈の尖から彈き飛ばしてしまつて、更に　大國主神御自身の內部に存する和魂を現はし來らしめたのである。

第二　高天原に於ける　天孫御降臨の準備

そこで高天原の方ではどうかと申すと　天照大御神は和魂の神であるが、荒魂も具へていらせられ、之を太陽に模らへて　日神とも申して居る。溫帶地にありては太陽は物を害したり人を苦しめたりするものでなく、惠み育てるやうな力を有つて居るが、亦物を害したり人を苦しめたりする荒魂の方面も有つて居る。併し其の荒魂の方は從たる方面で和魂が主であります。天照大御神は果して女の御先祖であるかどうか知りませぬけれども、女神と申すことになつて居ります。それには色色の歷史上の理由もありませうが產靈と申すことが主となつて居るからであります。西洋では神樣を通常白髮頭の皺の寄つた怖さうな風に畫きます、希臘の最高の神の「ジュピテル」なども、氣高くして威嚴あると共にこわい顏の御方と考へられて居る。古神道では產靈といふことが主になつて居り、どこまでも和魂の淵源となり、活き活きとしていらせらることが根柢になつて居りますから、神神中の最も中心となる大切な神樣は永遠にお若い優しい神で、老いて白髮になられるといふやうなことはないわけであります。そこで　天照

大御神は之を若い女神として記憶し來つた次第である。天照大御神が荒魂をも有つていらせらるることは　神功皇后の三韓征伐などに著しく顯はれて居る。併しどこまでも和魂を主にして居られたので、荒魂は從てある。

所が、須佐之男命が高天原にお暇乞に參上られた時に、自分は清明心を以てお暇乞に來たのであると申上げたので、それならば互に誓ひをして子を生まうといふことになり、それより共同して御子を生まることになつたのである。勿論これも決して生理的の意味ではありません、信仰の眼を以て考へなければ眞髓が分りませぬ。

そこで、天安河原を眞中に置き兩岸に相對立せられ、互にお誓ひになり、(情慾等は此の高天原には少しも無く、全く之を超越して居る)先づ　天照大御神が、須佐之男命の佩して居らせられた十拳劍を乞ひ取り、三段にお折りになつて齧んでお吹きになると、それからして三柱の女神がお生れになり。又　須佐之男命が、天照大御神の左の御角髮に纏て居らるる五百津御統の珠(五百津御統の珠は萬世一系を意味して居る)をお取りになつて、齧みてお吹きになると、其の狹霧の中から　正勝吾勝勝速日天之忍穗耳命がお生れ遊ばしました。尙ほ其の後に、天照大御神の御身に着けた珠から、四柱の神がお生れになります。之を合せて兩部神道では　八王子權現と謂つてお祀り申して居る。所で、天照大御神が仰せらるるには、此の　天之忍穗耳命は、我が纏へる五百津御統の珠より生れた子故、自分の正しい御子であり、御自分の正しい御延長てある、と仰せられました。天之忍穗耳命は天照大御神の和魂が主となつてお生れ遊ばしたるが、又　須佐之男命の荒魂をも有つて居られます。何となれば、天照大御神と　須佐之男命の双方の性質が結晶してお出來になつた神であるからであります。殊に　須佐之男命が後に天叢雲劍を　天照大御神に奉つた所を見ても、高天原にも荒魂は在るが、其の荒魂は常に和魂を以て運用する荒魂であると申すことが明確となつた譯である。

然るに、之に續き　須佐之男命は高天原に於て亂暴を爲され、初の中は

天照大御神も寬容していらせられましたが、餘りに甚しきに及び、遂に　日神は天の石屋戸にお隱れになつた。そこで高天原が暗くなつたばかりでなく、中國までも眞暗になつてしまひ、ここに始めて　天照大御神がどういふ御地位に在らるる神樣かと申すことが明確になつた譯である。高天原が明るいと思つたのは、　天照大御神の御存在に依つて明るいのであるし、それが爲め豐葦原中國が暗くなつた所から見ると　天照大御神は高天原をお治めになるのみならず世界全體をお治めになつていらせらるることが分り、根之國の要素は高天原の精神に依つて打勝たなければ清いもの明るいものとして豐葦原に出ることが出來ぬのであるから、高天原の支配の下にあることは勿論である。して見ると云ふと天の石屋戸にお隱れになつたことに依つて、天照大御神は全世界の有らゆる方面の主宰者で在らせらることが明確になつた次第であります。言葉を換へて申せば、此の信仰を言ひ表はすが爲めに斯樣なる天石屋戸隱れとして永遠に記憶し來たつたものである。

そこで、八百萬神が天の安河原に神集ひに集ひて御相談を爲され、八意思兼神をしてどういふやうにしたら宜しからうと申すことを考へしめられたのである。（八意思兼神は　高皇產靈神の御子となつて居るが、これも生理上からではなく信念の上から解釋せねばなりませぬ。此の神は產靈を本質として、四方八方有らゆる方面の事を兼ね思ひ一方に偏らぬ所の眞空中道の神である。一體智慧といふものは、物を造り又物を破るものである。近頃のやうな實證論的の智慧であるといふと、智慧の有る者が必しも物を創設するのでなく、智慧の有る爲に物を損ひ物を惡くする傾きが有る。所が古神道で認めまする智慧といふものは　高皇產靈神の直接の御子八意思兼神に依り統べ括られて居り、產靈を本質として居る所の智慧であると申す譯で、產靈といふ事と離れぬのである）。即ち　八意思兼神の考へた所に依つて色色の儀式を行ふことになりましたが其の儀式も永遠に古神道の儀式を支配して居り、今日の神葬祭などの儀式にも、殆どそつくり其の形式が用ひられて居る。又其の時に集まつた神は皆それぞれ深い意味

を有つておいてになる神神であられます。

さて多くの神神が集まられ、眞面目になつて　天照大御神がお顯はれになるやうに祈つて居られ、天之宇受賣命が神人自他合一の平らかな心持になつてお神樂を爲され、總ての神が皆調和を得て、八百萬神の咲ひが『たゞ一つの大きな咲ひ』となつて高天原が搖れるばかりであつた。（天之宇受賣命より今日俗に謂ふ『おかめ』が轉化して出て來り、今は通俗の所謂福の神（實は神には非ず）となつて居る。西洋の福の神（實は神には非ず）「ビリケン」といふ玩弄物は、私は、日本人の顏に似せて作つたものであると思ふが、此頃は何でも西洋から入つて來たものを珍重する風があり「ビリケン」などを珍重して居る。けれども日本では「おかめ」福助といふ所謂福の神の一對があつて、お互に仲宜く揃つて共同圓滿の意を顯はして居る。天之宇受賣命は調和の神樣でありまして、宮中の八神殿にお祀り申してある　大宮賣神である。大殿祭の祝詞には　天之宇受賣命の御性質や御働きが立派に書いてあります）八百萬神の咲ひが『大きな（普遍的の義、聲の高さに非ず、一咲ひ』になつたものであるから、天照大御神が不思議に思し召されて『自分がここに隱れた爲に高天原も葦原中國も皆暗くなつてさぞ困るであらうと思ふのに、何故　天之宇受賣は樂しげに舞ひ亦八百萬神は咲ふのであるぞ』と仰有つて天石屋戸を細目に開けて御覽になつた。其の時に

天宇受賣命が『汝が命に益りて貴き神坐すが故に歡喜咲衆ぶ』と言はれた。（八百萬神が斯の如く調和をして居るのも、これ迄　天照大御神が輝いておゐでになつた御德に依り　天照大御神の和魂が八百萬神の中に入つて其の中に輝いて居るに外ならぬのである）そこで　天照大御神がこれはをかしいと思はれて顏を少しお出しになると、天兒屋命（春日神社に祀る）と　布刀玉命（阿波神社に祀る）が鏡を指し出されて、天照大御神を見せ奉つたのである。（ここに內外合一と申すことが立派に出來た譯である）これは愈〻奇しいと思し召されて、尙ほ少し外に御身をお出しになると、天手力男神が御手を取つてお引出し申し、布刀玉命が其の後に注連繩を引き渡し奉り『ここより內になほ還り入りましそ』と申上げたのである。それ

より後は年の始に注連縄を張つて不退轉の心を勵ますことになつて居り、又其の時の如く眞賢木(松)を門に立てて、長へに益々明かに　日神の御德の輝くことを祈つて努力奮鬪する次第であります。

第三　天孫御降臨の完成

第一　天孫御降臨につきての談判。

其の後豐葦原中國も經營が完成しましたから　天照大御神は御子　天之忍穗耳命を御降しになつて高天原の理想國を豐葦原に實現せしめ、中つ國の主人となさるる思召であつた。一體　大國主神は、最後には御自分の和魂を主にして御行動になつたが、元元　須佐之男命の御系統であられますから、荒魂の方の系統に屬して居る御方であり、又　須佐之男命は根之國に追放せられた神で、豐葦原中國を永遠にお治めになるべき神でない。故に其の御子孫である　大國主神も永遠に豐葦原中國をお治めになるべき神であらせられぬ。そこで　天照大御神は御子を降臨せしめやうと爲されたのであるが、それも中中容易の事でなく。又容易ならぬ所に値打がある。天照大御神は始終　高皇產靈神と一體となられ、八意思兼神をして思はしめて御行動になつたのである。高天原の理想を現國に實現するには大なる努力を要し、尋常一樣の手續では纏らず。眞面目の心を以て、利害を離れ、情實に引かれぬことを要し、大義名分に根據せる堅き決心を要する次第で、眞面目にして勇氣が無くては出來ぬと申すことを示す爲に古事記や日本書紀には色色の事が書いてある。所で愈々利害を離れ、情實に引かれず、建御雷神が布都御魂と云ふ劍を持ちて高天原からお降りになつて、なかなか危い業を爲された。武は自分を害ふか他を害ふか分らないもので、元元建御雷神は自分を害ひ他を害はれし　火神から生れ出でられた神であるから布都御魂と云ふ劍を逆さに浪の穗に突き立て、其の切尖に踞(足座)をかいて　大國主神と談判され、此の中國を　天孫に奉れと迫られたやうな譯である。大國主神も此の位の勇氣の有る神に對しては、此の國を返上し奉ると答へても宜いと思はれたが、獨斷を爲されずに(古神道は獨斷を戒めて

居る御子　事代主神と相談して貰ひたい。其の返答次第で自分には拒まぬと申されたので、更に　事代主神と御相談になると。勿論此の國は天つ神の御子に奉る所存でござる其の證據は此の通りであると言はれつつ、釣をして居られたが、其の船を蹈傾けて根之國に往かれてしまつた。事代主神は大義名分に明かな神樣として宮中に於かれても神殿に御祭り申してある。そこで此の事を　大國主神に御報告になると、それではもう一應我が子　建御名方神に相談して貰ひたいと對へて居らるる所へ、　建御名方神がやつて來られて『誰ぞ我が國に來て密密斯く物言ふ、然らば力競べせむ』と言はれて　建御雷神と力競べをなさることとなつた。これにも深い意味がある。此の豐葦原中國はただ和魂や道理のみに依つて治めやうとしても治まらぬので、武勇が無くては駄目である。而かも其の武勇は一通りの武勇ではいかぬと云ふ所から、力競べを遊ばすことになつたのであるが、遂に　建御雷神が勝たれ、中つ國を愈々　天孫に奉ることとなり、　大國主神は自分は根之國に往つて居つて永遠に　天孫の御系統の守護となる、

古神道の建築につきては卷末を參照すべし。

自分は此の事を一旦お誓ひ申した以上は決して違はぬことを保證すると申されて、お誓ひを立てられたのである。されば　大國主神の荒魂よりも建御雷神の荒魂の方が大きく又　建御雷神の荒魂よりも之を統括せらる。　天照大御神の荒魂の方が大きい譯である。然し　天照大御神の御正系の和魂は此の荒魂よりも更に更に優れて尊いのであります。『ヽヽヽヽ底つ石根に宮柱太知り、高天原に氷木高知り云云』と云ふことがありますが、これにも深き意味があるので、土臺が堅固に地に立ち尙高く天に聳えて居る家の建方などは深い理想を有つて居る。家の建方なども日本と西洋などと較べてお話すると信念上餘程面白い現象があると考へますが唯今は之を省きます。

第二　天孫御降臨の段。

ここに一段落がつきまして　建御雷神が此の事を御報告になり、愈々　日の御子か天降らるることになりましたが、此の御子の御意見を採納せられ日の神は　天孫　邇邇藝命を降臨せしめらるることとなりました。其の

時にも前に天石屋戸に　天照大御神がお隱れになつた時の形式を其の儘見得る心地がする。　先づ天石屋戸の前に於て首腦としてお働きになり、又平生親しく　天照大御神にお仕へ申して居つた貴い神神を大勢召され、尙ほ天石屋戸の時に使はれた御鏡、五百津御統の珠、並に　須佐之男命が奉られた天叢雲劍を副へて　天孫の御降臨を命ぜられたのである。　此の御降臨の時の行列には弓や刀が大切なものになつて居るが盾と云ふものはありませぬ。　古來日本では弓矢を尊重して居りまして、刀は斬るもの、矛は突くもの、弓矢は追ふものであつて、何れも進んで爲すの意味を有つて居ります。　後に支那と交通してより儀式などに盾を用ふることになりましたが大昔は盾といふものは主要の具としては用ひませぬ。（無いことは無いが、極めて粗末のものであつた）又日本では『弓矢の家に生れる』などと云つて譽れとして居るが、西洋では『盾に生れる』と言つて居り、紋を盾の上に書いて居る位で、西洋では盾を大切にして居りまして、盾に關係の有る語が澤山ある。　之に由つても日本と西洋とは其の根本に於て異つた所のあることが分る。

此の時の行列の儀式は　猨田毘古神がお待受け申して居り、之に對して、天之宇受賣命が柔よく剛に調和して、其間の聯絡がうまく付いたのであります。　故に其の後にも神社の祭禮のときには、猨田毘古神や　天之宇受賣命や　天孫御降臨の時の御道具を行列に加へて居り、年年歲歲の神事に際して、高天原から　天孫が御降臨になつた精神を忘れずに反省して居る譯である。

第四　天孫御降臨後の永遠の本を確立す

第一　天孫と山の神神。

斯くして御降臨の後　邇邇藝命は先づ　大山津見神の方面と御共同になつたのである。　邇邇藝命は大變立派な姫神を御覽になつて、吾は汝と結婚しようと思ふがどうだと尋ねられると、自分には直にお答が出來ませぬ父の　大山津見神より御返事致しましようと申上げた。　それから後は豐

葦原中國に於ては、正式の結婚については、女は自分の意思を以てせず、父の意思を以てすると云ふことが極まつたのである。そこで　大山津見神は喜んで　天孫の命に從ひましたけれども、其の時、此の神には二人の女があり、姉を　石長比賣といひ、妹を　木之花佐久夜毘賣と申しまして、石長比賣はお名の如く石の樣な醜き顏をして居られた、之をお召しになれば　天皇の御壽命は石の如く堅く長かるべし、若し　木之花佐久夜毘賣の方をお留めになつて　石長比賣を返しなされたならば、天皇の御壽命は木の花の散るが如くに短かかるべしと誓約ひて貢進りしに、邇邇藝能命は　木之花佐久夜毘賣のみを留め給ひしかば、今に至るまで　天皇の御壽命が長くあらせられぬのであると言傳へられて居る。天津日嗣即ち總攬表現普遍人としての　天皇の御壽命が天壤と窮り無きことは、日の神が『葦原千五百秋之瑞穗國是吾子孫可王之地也。宜爾皇孫就而治焉。行矣。寶祚之隆當與天壤無窮者矣』と仰有つた如くに永遠であり、此の永遠なることは、之を眞賢木の常磐の色に表はして祝ひ奉りつつある。けれども表現單純人としての　天皇は常にお變りになり、矢張り人間としての御壽命だけしか保たれず、千年も萬年もお生きにならぬと申すことは、此の時に萠すと言傳へられて居ります。つまり岩の如く眞黑になつて長く存らへるよりも櫻の花の如く美しく揃つて咲き又揃つて散り『滿山唯一つの花』といふ所に貴い所がある。故に『敷島の大和心を人問はば朝日に匂ふ山櫻花』と本居先生も歌はれて居る如く、昔から日本では櫻を珍重して居るのであります。これも古神道の精神であつて瓦となつて全からんよりは、玉となつて碎くるをよしとする精神を包含致して居る次第であります。

第二　火遠理命と海の神神及　神武天皇。

そこで　邇邇藝命は　山神と御共同になりましたが、其の御子の　火遠理命、亦の御名　日子穗穗手見命は、海神とお親しくなり、海神の女　豐玉毘賣を御娶りになつて　日子波限建鵜葺草葺不合尊をお生みになりまして此の御方が　神武天皇の父君て在らせられます。神武天皇は　神倭伊波禮毘古命と申し上げます。『伊波禮』とは即ち『集滿』と云ふ意味て、

今まで申上げた一切の神神、一切の世界を悉く集め結晶して、御自分の中に有つておゐでになる御方である。故に　神武天皇はどう云ふ御方かと申せば、今まで申上げた神神及其の御働を一切含んでゐらせられるのであつて　神武天皇は表現人である。さうして　天皇は此の圓滿なる一切を集藏統一せらるる御光に依つて我我臣民を照しお造り下されたのであるから、我我臣民を取つて見れば、今までお話した事が悉く一人一人の中にも結晶して居る譯である。故に眞面目に太郎なら太郎を取つて其の性質を分析して見ると(心理學や生理學の分析は上皮のことであるが、古事記や日本書紀の理想信仰に依つて分析して見ることに依つて)始めて我我の根柢が最も精密に分かる次第である。これは日本人に限らぬことで、古神道の精神は世界の精神であり　神武天皇は世界の　天皇であらせらる。我我は、それに依つて生れ、我我の人格は、それに依つて造られて居る。我我の人格を、斯の如きものとして分析して見て、始めて發揚せらるべき筋道も分かり、愈以て其の本性も實現せられ得るのでありますから、其の本をよく感得し、よく知らなければならぬことと思ひます。

第三　結論。

斯くの如くにして古神道は何より根本で極めて大切のものであるが、之と同時に佛教でも儒教でも基督教でも皆之を排斥せずして研究し、それに依つて愈益古神道の精神を鍛錬することが必要である。或は自然科學も必要であるし、色色の事實も必要でありまして、己れの分擔に依つて各其の方面に進んで行くが宜いのである。古神道は宇宙の公道で、宇宙の豐葦原の中つ國を眼中に置いて居り、所謂內國外國等の差別に拘泥せず、之を統一する現世に高天原の神國を實現することを主義として居る。從つて一切の物事を排斥しないのが古神道の大精神であるが、新しい事を考へると、共に根本の古い事を忘れてはならぬ。正系の本を發揚する爲めに傍系の末の事を學ぶのである。然るに現世の中心點たる日本に末家の儒教が入つて來た時にはまだ宜かつたが傍系の佛教が入つて來てから、此の外教が理窟の形式に於て長じて居つた爲に、日本に今まで在つた良いものは何でも

かんでも皆所謂中心より遠き外國から入り來つたもののやうに言ひ觸らし、それが爲に嘘から出た誠と云ふやうな譯で日本在來の事實は詰らぬといふやうに思ひ間違はしむることとなり、斯かる感じを前提として、所謂外國の事のみを貴ぶやうな學風をも起らしめたのである。今日でも西洋を世界の中心と心得、彼を原と誤想し、日本を極東等と呼んで怪まず、西洋語を原語原文と言ひ、西洋書を原書と號し、又羽織袴では神の參拜等も許されず、「プロックコート」等を着用せねばならぬと考へ(現に篤志の西洋人が　皇大神宮正式參拜の爲め態〻羽織袴を新調してお參り致したる所、「プロックコート」に非ざるは不可なりとの理由で參拜差し許されずして其の人を驚かしたこともある、と承つて居る)。日本は詰らぬ詰らぬといふことを前提して、古來の國風を現今の南洋野蠻人等の習俗と同樣に說明せんとする人人もある。これは古來支那印度の崇拜家などに言ひくるめられ、其の言觸らしたことに瞞まされつつ永年養はれ來つた弊想である。之に氣がつけば我我はどこまでも本を能く反省し、それに依つて末を用ひて往かなければならぬことと思ふ。殊に立派に表現組織人として行動すべき方方に於かれましては建國の根柢となつて居る大精神、從つて我我人格の根柢たることに能く御注意して下さることが必要であると思ひます。宮中に於かれましても　天皇を中心として世世の　皇靈を御祭り申し　天照大御神を奉祀し、又神殿に大切なる神神を御祭り申して居る次第でありますから、我我も　天皇が爲される御祭りの御趣意を辨へて　天皇の大御心を受け戴きて我我の心とし、信念を鍛へ、之に依つて卑近なる所の精神を用ひて往かなければならぬことと考へます。

（以上第七講）

注意　古典は深遠の義理を藏すれども、正面より理窟を書き列ねたるものに非ず。

此の前から、古典に依り、大和民族を中心として自覺されつつ在つた眞面目について、お話し申懸けて居りました。古典の中でも古事記日本書紀又は祝詞の如きは大切なものでありますが、是等のものは何れも理窟を申述べて居るもので無く、自ら深き心持に依つて昔からの出來事を精選して

言傳へて居る所が最も尊い所であらうと考へます。同じ歌などでも幾分か理窟道理などを言表さうと思うて詠みまする『道歌』などになりますると最早歌としては少し段の低いものになつて參る。少しもさう云ふ理窟がましいことが無くして、ただ在りの儘の事柄を述べて居る中に、どことなく貴い感じの籠つて居る歌が一番貴い歌である。それと同じく民族の眞面目を記載してありまするものも、殊更說教の目的で書いたり理窟を言つて居るものは値打の低いものである。理窟などを立ち越へ、ただ自ら事柄を記載してあり又信念を述べてある中に、どことなく健全の精神の充ち滿ちて居るものが最も貴いものであります。況や一人又は數人の者が其の人の道理心から考へ出した所の道理の如きものは、最も人の了解し易い所であり言易い所であるけれども、値打の方から云へば遙かに下になつて居る。然るに自然の通り何となしに事柄を記載し又は言傳へて居るものは、一寸捉へにくいので、幾ら捉へても捉へても其の奥があつて底まで突止めることが出來ないものである。そこで昔理窟などのまだ開けて居らぬ時に於いても、其の貴い感じを言表はして居るものを、總ての人が能く翫味し、それに依つて眞面目の生活をして來たことは、理窟などを言合つたよりも遙かに効能が有つたのであります。又昔のものには、他の理由も交り、感じを主にして譬のやうに謎のやうに取扱つたり言傳へたりしたものが澤山ありまするが、是等のものも以上の意味に於て輕蔑するどころでなく、其の中の眞理を能く能く吟味して見なければならぬものと思ひます。

第三　建御雷神。

さて前回には　建御雷神がお生れになつた所より　神武天皇までの間を極めて簡單に申上げましたが、今日よりは亦元に戻りまして、其の間の事を精しく申上げやうと思ひます。古神道の信念はただ短く約めてお話したのみでは十分に御了解下さることは困難であらうと思ふのであります。何となれば系統的に理窟を申して居るのでありませぬから、一方では信念として之を鍛へねばならぬと同時に、他方に於ては色色の言傳へ物語の間に籠つて居る言ふに言はれない味ひの存するものを、一經めにして見るときに、始めて動き出すことにな

るのであります。由て重複をも厭はず更に詳しく申上ぐる次第であります。

建御雷神は、火之迦具土神即　火產巢日神が御自分をも犧牲と爲され、尙ほ他人をも犧牲と爲された結果、お出來になつた所の神であり、而かも絕えず自分を犧牲に供する覺悟でいらせられ、又他人を犧牲に供することも要求して居らる神である。武は犧牲を離れて存在し得ないもので、自分の犧牲のみならず他人の犧牲を要件と致しませんければ存在し得ないものである。それは　建御雷神のお出來になつた成行からも知れ、又其の神の後後の御行動に著しく現はれて居るのであります。日本書紀に依ると　經津主神と申す神が見えて居りますが、之を古事記に書いてある事と合はせて考へて見ると　建御雷神の外に　經津主神が存在せらるるのでなくして　建御雷神(亦の御名は　建布都神)と離れずに其の御所持になつた御劍を經津之魂と謂ひ、此の經津之魂が即ち經津主神であるらしい。本居先生も然樣仰有つておいてになりますが、古事記に依るとさうらしく思はれます。從つて下總の香取神宮には　經津主神をお祀り申してあると申す說が日本書紀にある如く昔からありますけれども、實は建御雷神の御心である所の　伊波比主神をお祀り申して在ることと考へられます(本居先生說)。

建御雷神と劍とは離れられぬのであります。古神道に於ては劍は澤山ありますけれども、此の場合の劍なども自ら己れを捨てて懸かる意味があり、基督敎などで申すと丁度十字架の樣な徵しにもなつて居りまする。又武勇を以て有らゆる穢れたものを征服し一切を支配して行く點などは「マホメット」敎あたりの劍の意味などをも兼ね意味して居ることは確かであります。尤も「マホメット」敎にては基督敎で十字架を使ふ時にいつも劍を用ひ、劍を以て信念に反するものを打拂ひどこまでも此の信念に依つて支配することの徵しにして居ります。さうして之より推論して自分とても劍を負うて居るので、劍により自己の罪を薙ぎ拂ひ且自分を犧牲に供するのであると云ふ風に解釋せられて居る。古神道の劍が理想信仰を實現する爲に、自分をも犧牲にし、それを以て普ねく一切を支配する意味を有することは、單純なる解釋家の說でなく、建御雷神の御行動並に古事記の所所に現はれて居る劍の效用を見ただけでも確かであると

思ひます。

尙ほ總ての神神の御性質並に他の神神にお對して有せらるる地位の如きは、神代本紀に種種記載しありまする所を參酌して始めて明かになつて參るのであつて、理窟を以て極める譯には參らぬ。同時に朝廷が在來どう云ふ風にお取扱ひになつて居るかの事實を參酌して極めることも大切であると考へます。同じ劍でも、どう云ふ場合の劍であると云ふことに依つて、劍の格が違つて居る譯である。建御雷神の御劍と其の他の場合の御劍と又草薙の御劍の如きものとは亦それぞれ細かい性質が違つて居る次第であります。

第四款　冉神根之國に神避り玉ひ、諾神之を追ふ

第一　諾神の追はれし理由。

伊邪那美命は　火之迦具土神をお生みになつた結果根之國に往かれましたので　伊邪那岐命はこれを追うて往かれました。（ここに『神上り』と云はずして『神避り』と申すのは高天原に參られたのでなくして根之國に罷られて其の主宰者となられたのであるからであります）。其の追往かれました理由は度度お話した如くただ御自分の偶然なる御心からではなくして、これ迄共共表現者として世界を創造爲され懸けて未だ總攬者も御確定にならず宇宙の經營も完成せざる次第であるから再び還つて貰ひたいとて追ひ行かれたのであります。

第二　根の國に尙ほ法在り。

所が　伊邪那美命が仰有るには、吾が愛する　命が斯くまで仰有つて下さることなれば還りたきは勿論であるが、既に『黃泉竈食（よつへぐひ）』とて根之國の竈にて煮た物を食したから、根之國の規則に依りて直ちに還る譯には參らぬ。由つて其の事は根之國の眷族と相談した後に返事を致したいと申された。此の事は何でも無い事であるやうであるが、實に面白い事であると思ふ。と申すのは根之國と云ふ處は元來法則などを離れて居つて、何が何だか分らぬ處でありますけれども、尙ほ根之國と云ふものが在ると云ふことを申す以上は、そこに法と云ふものがちやんと存在して居る。其の事は後に　伊邪那美命が　黃泉大神と云

ふ地位をお有ちになつて永遠に存在せらるることについて見ても既に根之國に法が在り、『伊邪那美命が主宰者であると申す法』が在ることを意味して居ります。又　伊邪那美命の仰せられたお言葉に依りましても、根之國は一體どんな國であると申す法、其の内に特殊の法が存在して居ることを意味して居る。物あれば、ここに則があつて、法を離れては如何なる存在も在り得ない次第である。假令泥棒の如き者でも其の泥棒の間にはおのづから法が在つて存在し、絶對に法を無視して居る存在と云ふものは如何なるものに就きても一も無い次第であります。

第三　根の國と雖も專制的ならず。

伊邪那美命が、御自分御一己の了簡にてお還りになることをお答へにならずして、他の黄泉神と御相談を爲されたが、黄泉神と申すは　冉神の外に別にどこにも見えて居りませぬ。これは　伊邪那美命の御身にお出來になつた　八雷神より外には無い譯で、八雷神は　伊邪那美命の御子樣と直ちに申すことは出來ませぬが、御子樣に當る神であつて、つまり其の神と御相談にならねばならぬと申すことになります。自分から分かれませした子の意見を尊重することは、古神道に於ては高天原に於ても豐葦原中國にても見えて居りますが、此の事は亦根之國に於ても見えて居る次第であります。一體親と子とは双方相待つものであつて、子から申せば親が本であるから、どこまでも親を己れとして發揚しなければならぬけれども、親の方から申すと子は己れの延長己れの果實である。親子双方が相待つて居る所に妙味があるが、唯今親の方から申すと、子の爲に親はどれ程新しき生命を獲得して居るか分らぬ。子は親のお蔭で存在する譯であるが、親も亦子のお蔭で存在致して居るものである。子に依つて益々其の神聖なる生命を發揚しつつ在ることは子を持つたお方には直ぐにお分かりになることである。子の爲に苦勞するやうでありますけれども、實は子の爲に始終慰められて居り、又それが爲に活働力を生じて居る。否親と子とは一體たる生命の表現であります。それ故　大國主神が國土を御返還になる場合にも、或は　天照大御神が　天孫を降臨せしめらる場合にも、いつも御子の意見を聞いて定められて居ります。伊邪那美命が根

之國から他の國に還られやうとせらるる場合にも、尚ほ其の御子のお考を聞いて決しようとせられし所が如何にも大切な所であります。

第四　一暗中差別在り。

所が根之國は他の國と違つて隱すこともあり又それに對して疑ふこともありますので、伊邪那美命は　伊邪那岐命に向つて自分を御覽下さつては困るとお斷りになりました。所が　伊邪那岐命はどう云ふ譯であるかとお疑ひになつて、燈火を以て照らして御覽になつたことが古事記に記載してある。つまり暗黑を照らして始めて其の一端を窺はれた譯であります。斯の如き暗黑の國は　伊邪那岐命が根之國をお見舞ひ申すことに依つて他の世界にも現はれて來た。尚ほ　伊邪那岐命が燈火をつけて御覽になつたときには、暗い中に色色のものが見えたと記載してあります。之に依つて根之國は一暗在るのみであるが、實は其の中に於て色色の差別があると云ふことを示して居る。

第五　勇を以て情實界の潛勢力を退く。

又　伊邪那岐命が根之國から逃げて還るときに、根之國から追ひ掛けて來るものをお退けになる場合にも、一言にして云へば敵を愛すると云ふやうな色色の御行動が見えて居りまして、敵であるからとてただ之を窘めることを爲さらぬことも見えて居る。根之國の追つて來た軍勢を勇氣を以て退けられたことも見えて居り、又桃の子を三つお採りになつて根之國の軍勢をお打拂ひになり、根之國の軍勢が悉く逃げ歸つたと云ふこともある。根之國の軍勢がどう云ふものであると云ふことは別に研究する必要も無い、潛んで居る力と考へましたならば宜からうと思ふ。道敎でも桃子を魔除にして居りますけれども、古神道では其の桃の子を取つて積極的に擲つと云ふことになつて居ります。又桃の言傳へに『日本人の支那朝鮮沿岸侵略時代』(彼等は倭冠時代と稱す)の思想が結び付いて、桃太郎の鬼ヶ島征伐の話が出來て居る。桃太郎が桃の中から生れたと云ふことは、昔からの桃の言傳へと密接の關係があります。

第六　『ことど』及更に雄大なる共同。

そこで　伊邪那美命が自ら　伊邪那岐命の跡を追うて來られたときに、伊邪那岐命が千引石を黃泉比良坂にお据えになつて、伊邪那美命がそれより先

へは追うて往かるることが出來ぬやうになつたのであります。さうして其の石を中に置きて相對して『ことど』をお渡しになつたと古事記に書いてあります。『ことど』と云ふは『言跡』或は『事跡』であつて別れの言葉であるが、之を離緣と見る必要は無い。其の證據には旅行などで遠方に人が行くときの餞別の言葉などにも『ことど』と云ふことが見えて居ります。此の千引石より此方へは　伊邪那美命が來らるることが出來ぬやうになされ、そこでお別れの言葉を述べられたのである。是から後は根之國と根之國でない世界とが確然と區別さるるやうになつたのであります。此の前にも申した如くに、一旦根之國に行つて根之國の食物を喰つたものは、再び舊の儘の形にて此の世の中に還つて來ることが出來ぬことに定つた譯であるが、尙ほ根之國とさうでない世界とは世界の性質を異にして居るが、尙ほ積極的方面と消極的方面との分擔の違ひを以て、相互に大きな共同をして居るものと見ることが出來ます。伊邪那岐命と　伊邪那美命とは最早同じ世界に居つて御共同はなされないが　伊邪那美命は永遠に根之國に居られ、他の世界と共同して働かれ、伊邪那岐命は他の世界に居つて根之國と共同して働き、これにより世界の一切のものが出來て參る次第である。そこで『ことど』をお渡しになるときにも　伊邪那美命は『愛しき我が汝兄の命』と言ひ　伊邪那岐命は『愛しき我が汝妹の命』と仰有つて居る。

そこで　伊邪那美命は『愛しき我が汝兄の命』よ、斯く爲し給はば毎日汝兄の國の人草を千人づつ絞り殺すであらうと言はれ　伊邪那岐命は『愛しき我が汝妹の命』よ、汝が然樣爲すならば、吾は毎日千五百人の人草を生むやうにするぞと言はれたのである。之を觀ると　伊邪那美命は產靈の働きでなく破壞の働きをなさるやうに見えますけれども、それは卑近の所から見るからで、一體物が生れると申すことは死ぬことがあるからである。此の生命は絕えず出來て行き、同時に其の生命が活きて居ることは、一方には絕えず物が滅しつつあり絕えず廢れつつあることを意味して居る。ただ死ぬことを見ると、產靈に反對したものと見えますけれども、それが即ち生れる所以である。根之國の潛在的方面を以て、即ち消極的の方面を以て、產靈の働きを行ふことが分つて來る。又

それに反して更に大きな積極的方面から產靈の働きを宰られるのが　伊邪那岐命である。そこで人民の事を天益人と申して居る。人間は絶えず產靈の働きに依つて一方に消滅があつても反つて益々増して行くと申す所から斯く謂つて居る。さう云ふ譯であるから、言葉に拘泥せずして大體の上から見るときは、御二柱共に世界を有ち分け乍ら相待つて永遠に產靈の働きを行つていらせらるることになります。日本書紀を見ますると言跡の事は載つて居らず　伊邪那岐　伊邪那美の神が永遠に共同しておいてになる樣に認めてありますが、それは寧ろ矛盾ではないと考へます。何ぜなれば古事記には只今お話したやうに別の處に居つて更に雄大なる共同をしておいてになると言傳へて在るからであります。又神社にも御二柱を併せお祀り申して在ります。近江の官幣中社多賀神社には　伊邪那岐命及　伊邪那美命をお祀り申し、又加賀の國幣中社白山比咩神社中にも　伊邪那岐命　伊邪那美命の御二柱をお祀り申して在ります。ただ淡路島に在りまする　伊邪那岐神社のみには　伊邪那美命を合祀して在りませぬ。

兎に角斯の如くにして　伊邪那岐命　伊邪那美命の共同の產靈の働きは決して無くなつた次第でなく、否な益々行はれつつ在る。けれども根之國と他の國との幽明の別はここで確定したのである。固より歴史上の事實として此の時から幽明の事實が確定したと云ふ譯ではないが(何となれば、諸冉二尊は歴史上の人物でないからである神世七代の神神は實は　天照大御神の御本質の信念上の分析に外ならぬからである)。信念の上から云へば此の時から幽明の別が出來て此の幽明相待つて始めて產靈の働きが出來る次第である。

第七　根之國及餘の世界との交通。

斯樣にして根之國と其の他の世界とが分れましたけれども併し根之國の要素がいつも優勢なることを得ずして　伊邪那岐命の方がいつも優勢で勝を制しておいでになる。即ち　伊邪那岐命がどこまでも積極的の支配者であらせらるる所が特に氣を付くべき點であつて、古事記を見ると其の事がよく現はれて居る。又　伊邪那岐命が　伊邪那美命の追うて來らるるのをお防ぎになる爲に千引石をお据えになつたが、其の石を道反の大神と謂ひ、又黄泉戸大神とも

申して、ここが關所となつて黄泉の世界から入り來ることが出來ず、根の軍は根の軍の儘で他の世界に入ることが出來ぬことに確定したのである。けれども根之國と其の他の世界との交通は絶えずに有つたのであります。其の交通の端緒は　伊邪那岐命がお開きになつた譯で　伊邪那岐命が根之國の穢れを持來つて、其の中から　禍津日神をお生みになり、少くも其の　禍津日神を透して根之國の要素が此の世界に擴がりつつ在る次第である。禍津日神は實は各人の心の中に活きて居る神樣でありまして、各人の心の中の　禍津日神に依つて、各人の心を透して、根之國の要素が此の世の中に現はれて來るのである。故に各人の其の心を捨てて置いて、ただ根之國の要素が漠然と此の世界に來ることは無い譯である。それについては禊の事をお話しなければならぬ、禊は極めて大切なる事柄であります。

第五款　禊及之により成りませる神神

先づ禊の説明を申上げ、次てそれに依つてお出來になつた神神事を申上げのて見たいと思ひます。

第一項　禊の性質

第一　祓は穢を轉ずる行動なり。

『禊』とは『身滌』と云ふ意味である。或は『潔身』と謂ひ、或は『祓』と謂ふことである。『祓』と云ふのは『洗』とも通じ、穢れたものを取去ることに依つて、其の中から眞面目を取出すことを申すのであります。故に穢れたものと關係が無い譯ではない。穢れを祓ふことに依つて其の中から眞面目を現出するのである。祝などと云ふことも矢張り此の祓に關係有る言葉であります。祓は最も大切になつて居りまして、日本人は絶えず心身を潔めることを重んじて居る。地勢などより申しても、山があり海がある處の人民は概して清潔を好むやうであります。之に反し山も海も無い平地ばかり續いて居る處の人民は穢い事に慣れて平氣で居るやうな風がありますが、多少さう云ふ關係もありませう。日本人は極めて清潔を重んじて、身體のみならず、精神の汚れを除去する

朝起き顏を洗ひ鏡を見る者は古神道の信者なり。

神社に參詣するに當りては必ず口を滌き手を洗ふ習ひなり。

ことを努め、特に信念として之を養ひ來つて居るのであります。朝夜の世界から起き出づれば晝の世界の入口にて、必ず顏や手や身體を滌き洗ひ清め、然して御鏡に對して眞面目を反省し、日の御光を拜する。又日本人は不淨の所に行けば必ず手洗ふ、旅行しても宿屋に行けば必ず風呂があるとか家に居つても身分の如何に拘らず必ず風呂に入ることになつて居ります。これは外國に於て例を見ない事柄である。

さて此の禊と申しますのは　伊邪那岐命が根之國にお出でになりまして、根之國で恐しい穢いものを御覽になつたり、或は根之國で疑の心を起されたり、又は御約束に違はれ密かに　伊邪那美命の御姿を御覽になつたり致されましたから、總てそれ等を滌ぎ拂はれたことである。(一)之を客觀的に見ると云ふと根之國から附纏ふて來た所の事實は產靈の要件である。產靈を妨ぐるものでなくして、此の要件に依つて產靈が行はれるのであつて、之を離れて產靈と申すことがただ存在するのではない。斯の如き要素を轉ずる所に妙味が在るのであります。今日の世の中の事を見ても其の如くで、色色の事柄が發達の要素となります。(二)主觀的に申せば根之國より附着し來りたる事實は穢れであります。(三)物事は單に客觀的の觀察をしただけでは正當でありませぬ、けれども亦主觀的に見ただけでは不十分であつて、客觀主觀兩方面から觀察せねばならぬ。そこで之を客觀的に見れば根之國の要素は缺くべからざるものであつて、產靈の要件であるけれども、之を主觀的に見れば穢れであるから之を洗ひ淨めて、それを滌ぎ其の中から清く立派なものを出さなければならぬことになつて參るのであります。そこで　伊邪那岐命は『否醜目醜き穢き國に到りて在りけり故吾は大御身の禊せな』と仰せられて居る。此の禊に依つて、御自分が爲された穢れと、他より爲された穢れとを問はず、之を轉じて原狀回復否な原狀よりも更に善い狀態を生ぜしめやうとするのが禊である。伊邪那岐命がお疑ひになつたり、こつそり覗いて見られたのは、御自分の爲された穢れであり、又御自分が豫想せられざりし　伊邪那美命の穢れを御覽になつたのは他より爲された穢れでありまして、此の兩方の穢れを祓ひ其の中から更に立派な狀態を生ぜしめやうとするのが禊であります。

第二　祓は產靈を性質となし、努力を要件となす。

今之を少し分けてお話致しますと、此の祓と云ひ禊と云ふことは、穢れたものを取拂ふことであります、從極的に聞えますけれども、實はそれに依つて物を創設する行爲であるから產靈の手段である。故にどこまでも祓と努力と離れないので樂樂と祓を行はうと思つたら間違ひであります。努力奮鬪と祓とは離れられぬ關係を有して居ります。餘所事ではありますが、近頃西洋人が南洋の土人の間に存する Tabu (Taboo) 卽ち神禁のことを調べて居ります(之に故らに支那や日本の文字を當嵌めてどう云ふ意味であると申すときは、文字に依つて反つて誤解を生ずる恐れがあるから、矢張り神禁と云ふ新しい言葉を用ゐた方が宜いと考へる)。是等南洋人は今日に至つても發達することが出來ずして野蠻狀態に止まつて居る劣等の民族である。又人間一個人として劣等であるかどうか分りませぬと致しても、社會上の關係からして其等の民族は今日まで劣等である。從つて其の迷信する神禁と云ふことも單に神の禁制で極めて消極的の性質を有し、物を造ると云ふ性質を有つて居らず、ただ或行動をすると罰が當るとか神の祟りがあるとか云つて或行動をせず、或ものに觸れず或人間に近づかぬことにして居る。さう云ふやうな事に、日本に在る信仰や風俗や支那に存在せし習慣等を、出來る丈け多く引き付けて說明しようと苦心して居る計畫をも見受けます。けれどもそれは注意せぬと大間違の原因になると考へる。何となれば日本に在りまする祓てあるとか忌てあると申すやうな根本的の實修は神禁とは同じてなく、極めて積極的の性質を有つて居るものである故であります。神禁については茲に精しい事を申上げる必要はありませぬが、ただ一言其の事を御注意申上げて置くだけてあります。

古神道に於きましては、祓と云へば消極的に聞えますけれども、實は積極的のもので、其の積極的の上に運用せらるる所の消極的の行動に過ぎぬのであります。どこまでも祓と云ふ眞面目なる行動に依つて善美を生ぜしむるのである。から、そこには勇氣が無ければならぬ。そこで禊と勇氣とは離れられない事柄になつて居る。現に根の國の方と大分接觸して居られまする出雲系の神樣である　須佐之男命　大國主神などの御支配になつた處に、愈〻高天原の理想を實

現する場合にも武勇に依る努力を要した譯で、古神道にては武勇と云ふことを極めて大切にして居る。

元來一つの誠の心持を以て、穢れを拂はんとする其の念慮其の心持から、有ゆる勇氣が涌出して來る。其の禊をせんとする努力が、即ち生命の存續を現はして居るので、之を失つたならば生命が無いのも同じであります。所謂　天皇に於かれましても、亦所謂聖人だの君子だのと申した所で、耶蘇であらうが釋迦であらうが孔子であらうが、苟も生命の有る以上は努力が永遠に存續して居り、それが無ければ聖人君子たる資格も無くなる次第である。又普遍的なる祓の表現者であつた和氣清麿が、神託を受け、それに依つて惡い行動に打勝ち善を生ぜしめましたのには、どれ程の武勇を要せられたか分らない。勿論武器を持つて勇氣を振ふとは異るが、斯の如き行動を成し遂ぐるについての努力は餘程大なるものであつたことは言ふまでもないことであります。

第三　刑罰は祓を其の本質となす。

併し、此の結局は產靈を主眼として居る祓は、尙ほ第二段の所を申せば消極的の性質をも有つて居る。之を一言で申すときには物事を淨め、廓清する意味を有つて居る。此の廓清と云ふ事柄は色色の方面に色色の形に於て現れて參りますけれども、古神道の祓の精神に依りて、刑罰が存在して居ります。刑罰は祓の中で、全部の普遍力を以て其の部分に對して祓を行ふものが刑罰である。或人の爲した行動並に行動の結果を除去し、それに依つて其の中から善事を生ぜしむる働きである。故に刑罰には色色の品物を差出させたり或は勞力を出させたりするが、決して報復の意味を有するものではありませぬ。之を法理學などで調べて見ると結局開けない幼稚の時代には報復主義が專ら行はれて居り、殊に猶太教の罰などに至ると他人の眼をつぶした者は其の者の眼をつぶし、他人の指を傷けた者は其の者の指を傷けると云ふ風にして報復主義を取つて居りましたが、古神道には報復主義は一つも見えて居りませぬ。祝詞を御覽になつても分る如くに、罰として物を出させるのは報復的に物を出さぜるのではありませぬ。或惡い行動を爲したから祓ひ捨てなければならぬ、其の祓ひ捨つる身代りとして物を出させ、其の身代りとして勞力を出たさしむるのである。穢

を物に附けて捨て穢れを勞力に附けて捨てでしまふのである。今日でも皇國にては通俗に物を失つたときに厄落しをしたなどと申しますが、それと同じ樣な意味で品物や勞力に穢れを附けて捨てるのであります。祝詞を御覽下さると其の精神が明確であると思ひます。

第四　大祓即ち普遍祓。

尙ほ此の祓は斯の如き刑罰として存在するばかりでなく、宗教的の儀式を成立せしめて居ります。之を祓と申します。祓には大祓と申すものと、各人の爲す小さな祓とがあります。各人の致しまするものは、自分の行動に依つて自分自ら生ぜしめた穢れ、又は他人の爲した行動より生じた穢れを自分が引受けて、其を消滅せしむることであります。日本武尊の妃　橘媛が海に御身を捨てられたことも、實は　日本武尊の厄をそれにて祓はれた譯で、御自分が　日本武尊の惡い所をすつかり御引受けになつて、其の御身を捨てられて惡い所を祓はれたのである。

一　祓は自己の行爲のみに對してなすものに非ず。

祓は自分の爲した事のみならず、他人の爲した事についても、之により生じたる穢れを除去することである。一體自分の行動についてのみ責任を負ふことは小さい了簡である、自分は實は他人の力を引き受けて行動して居るのである。或人間が惡い事をして罰を受ける場合であつても、實は其の人間のみが惡いのではありませぬ、其背後の社會が惡いのである、(他人の惡い事を自分に引受けて之を淨めてやる程の人間であつたら、初より惡い事をする氣遣は勿論ありませぬ。從つて罪惡を爲すは爲す者自身にも缺點のあるは勿論であるが)。各自の所に集まつて來る社會一切の穢れとても、人格を透ると淸らかなものに化せられて出て參ることが人格者の價値である。己れが一切を引受けてそれを祓つて淸くして表に出すことの出來るのは大きな人間である。我我は本來皆さう云ふ人間である譯であります。けれども社會に於てはどうかすると其の本來を發揚し得ず、遂に外部の情實に引張られてしまう者もある。或人間が穢れた行動を致しましても、實は其の人間のみが惡いからでない、更に大きな穢れが四圍より集まつて來る爲に、つひ之を轉じ之を淸らかにして改めて表に出だすと

との出來ぬ場合が多いのてあります。今監獄に入つた有らゆる人間を調べて見ると、決して元から惡いのてはない、社會の色色の行懸かりに依つて然樣なつたのであります。或は自分の幼い時に親がどう云ふ境遇に在つたとか、自分の師匠が惡かつたとか、友達が惡かつたとか、或は自分の接する人間か惡かつたとか、色色の誘惑に出遇つて惡くなるのてありますから、其の人間だけを取つて見ると別段惡人とも見えぬ、社會の壓迫社會の穢れが丁度さう云ふ所に當つた薄弱なる人間を透して現はれて來る譯てある。恰も全體の壓力が强ければ不充分なる部分を破つて爆發せしむる樣なものてあります。して見れば皆他人の責任を負うて居る譯になるから、監獄に居る人間ても氣の毒のものてある、皆他人の尻拭ひをして居るのてあるとも申し得る。

さう云ふ次第てありますから出來るだけ氣を付けて刑罰を加ふることになつて居り、又宗教上の儀式に於ても次に申すやうな大祓を大切のものとして昔から行ひ來つた次第である。又現時の法律制度の上ては、國務大臣は一個一個で責を負はずに、內閣を組織して或程度に於て連帶責任を負ふことになつて居ります。或は內閣各大臣は自己の行動について責を負うて連帶の責を負はぬと申す人もありますが、それは間違ひであつて、現に內閣の官制を見れば明らかに各大臣は步調を揃へて連帶の責を負ふことになつて居る。高い地位に在る表現人であります、から、自分の行動のみならず各、他の大臣の行動についても責を負ふことは勿論のことであります。

二　大祓及其の祝詞。

次に大祓の事てありますが、祓とは斯の如く、自分一人の行動又は他人の行動から生じた穢れを轉じて其の中から善い事を生ぜしむるのでありますが、自分だの他人だのと云つてそれに拘泥して居るのは小仕掛の祓てあります。大祓は自他を含みつつ尙ほそれに超越して居る『普遍的の祓』であります、少くも國民一體として、尙ほ大きく云へば世界全體として共に行ふ祓てあります。

我國ては每年六月三十日と十二月三十一日とに大祓を行ひます。其の時の祝詞は、大昔から存在して居るものを、延喜時代に極く僅かどうでも宜い所を改めたものて、延喜式にも載つて居るものてあります。大正三年三月二十七日の內

務省訓令にも大祓の祝詞が定められて居りますが、それも大昔のものと要領は少しも違はぬやうに出來て居りますのです。

之に依りますると、先づ　天孫が御降臨になつて此の國をお建てになつた次第がちやんと書いてある。　祝詞はいつも建國の精神を最初に述べて、それから他の事に及んで居りますが、大祓の祝詞も其通りであります。　神武天皇がただ偶然に此の國をお建てになつた譯ではなく、立派な表現者とせられて、高天原の理想を此の世の中に實現せられた事を書き、而も其の產靈が如何にも雄大に出來たこと、それに依つて出來た國の中心が此の日本國であることが見えて居ります。　少くもそこに於て存在して居る所の天益人即ち日本人民は、天の人間であり、高天原の理想の實現を旨として居るものである。　其の天益人が自分で知つて行つた事から、又は自分が少しも知らずして他から穢れを受くることが澤山あるが、さう云ふ穢れをどうかして普遍的に祓ひたいと人間の表現人として熱心に御願ひ申すことを、　天津神も　國津神もお聞きになり　天津神は天磐門を押し披き八重雲を別けてお聞きになり、又　國津神は諸々の山の上から谷の底までお集まりになつて、此の願をお聞き下さること必定である。　そこで神神は恰も風が雲を拂ふ如くに罪穢れを凝結せしめ、それを谷や溝に集め、それから躊躇無く之を川に注ぎ、海に流し　水戸神たる　速秋津毘賣神速開都比咩神が其の穢れを呑んで下され、又　氣吹戸主神(天之吹男神と同神ならん)が其の罪や穢れを根之國まで瀧の如く吹き落し、根之國にいます　速佐須良比咩神が之を悉くどこかへ消滅せしめて下さる。　そこで一切人の穢れは共共に普ねく洗ひ淨めらる。　此の爲に自分等が一般人の表現人として身代り物を出し、それを神主共が川や海に持つて行つて捨てる、と申すのが此の祝詞の御趣意である。

三　各人の行爲は皆神の爲さしむる所なり。

斯く申し上げたのでは不充分でありますけれども、靜かに此の祝詞を味つて見ると何とも云へぬ感じが勃勃として起つて來て、穢れを轉じて更に立派なものを生ずるやうに、どこまでも努力したい心持となる。　自分は善い事をしたと思つても穢れた事をして居ることが澤山あり、殊に善行は自分が爲したと思つ

ても實は神樣が爲させて下さつたのである。故に一善を爲して善行を自分が爲したと思ふときは、最早其の時に穢れてしまふ。何となれば自分が爲したのでなく神が爲させて下されたのだからである。さらばと云つて惡い事をしてもそれが爲に再び世の中に浮いて出ることが出來ぬやうなものではない。實は惡い事も矢張り　禍津日神がおさせになつた事である。自分の穢れた罪の爲に自分の善行が成立せぬのでありますから、どこまでも努力してそれを轉じなければならぬ、けれどもそれはただ自分ばかりでなくして神が助けて下さるのであつて、善にしても惡にしても自分一人で出來るものでない。そこで我我が罪穢を除かんと祈るときは、あらゆる神樣がそれをお聞き下さつて、それを消滅させるやうに、と進んでお助け下されるのでありますから、我我は特に祓の儀式に依つて、自分の知り又知らずして爲した罪科、自分の意思に依り又は他より來つた穢れを祓ふ爲に、年年大祓の式を行つて居る次第であり、今年よりは特に大祓の祝詞なども正式になつたのであります。

四　古神道は熱烈なることに於て他に讓らず。

西洋人などはよく口癖の樣に、「神道でも佛敎でも基督敎のやうな熱烈の精神が無い。基督敎に依れば、「パウルス」の感じたる如く我我の心持次第で、天國に行くか又は地獄に行くかである。他の宗敎にはさう云ふ熱烈の所が無い」とと言つて居るが、それは大きな誤りである。古神道は此の點に於て極めて熱烈であつて、消極的に於ては祓を爲し、又積極的に於ては我我は「神の產靈の行爲」を行つて居る。積極の方でも消極の方でも、努力奮鬪に依つて、明く淸き處を目當としつつ、產靈の働きを表現することになつて居る次第であります。

（以上第八講）

第五　禊は總攬者を始め一切の眞面目なる存在の源なり。

前回には　伊邪那岐命が根之國から持つて來られた穢れをお祓ひ遊ばすと、古神道に於ては總ての事が禊から始まつて來ることを申懸けて居りました。

伊邪那岐命は後に高天原の日之少宮（ひのわかみや）に永遠に鎭まつておいでになると言傳へて居る神でありますが、其の御方が根之國の要素と接觸せられた所から世界の建設が出來上ることになつたのである。世界の建設は　諾冉二尊が御共同

になつて遊ばして居つたのでありますけれども、其の最も大切である總攬者たる神が無ければ、此の世界は本統に出來上つた譯でない。非常に骨折りになつてお造りになつた世界が本統に出來上つて、それに魂が入るには、總攬者が出來なければならず、又其の總攬者と離るべからずに貴い神神が御存在にならなければならぬ。それ等の神神が御存在になることが出來、又それ等の神神の御分擔が永遠に確定したことは　伊邪那

伊邪那岐

た後　伊邪那美命が御共同の働きを爲される。禊は『それぞれ筋道が立つて居り乍ら而かも其の筋道が一向分らず各〻の間の分などがあつても更にそれ等のものが分からぬ狀態に在る所の根之國の要素』を取つて理想に依つて之を實現し曲らうとするものを直くして行く所の努力であり、其の努力に依りてこれに一切の貴いものが絶えず確定して行くのて禊は永遠に如何なる眞面目なる事についても其の根柢に活躍して居る所の行動であります。まして總攬者が確定するには禊の大切なることは申すまでもなきことである。

伊邪那美命が御共同の働きを爲されたる。禊は『それぞれ筋道が立つて居り乍ら而かも其の筋道が一向分らず各〻の間の分などがあつても更にそれ等のものが分からぬ狀態に在る所の根之國の要素』を取つて理想に依つて之を實現し曲らうとするものを直くして行く所の努力であり、其の努力に依りてこれに一切の貴いものが絶えず確定して行くのて禊は永遠に如何なる眞面目なる事についても其の根柢に活躍して居る所の行動であります。まして總攬者が確定するには禊の大切なることは申すまでもなきことである。

第六　禊と祓。

此の『みそぎ』は支那の文字に當てて『禊』と書いて居りますが。『禊』は又『はらひ』(祓)とも讀ませて居ります。其の例は古事記にも『吾は否醜目醜めき穢き國にいたりて在りけり。故吾は大御身の禊せな』と謂つて『禊』を『はらひ』と讀ませて居る。或は之を他の文字に當てて滌身と讀み、又身祓と讀んで居りまして萬葉集などには多く身祓を『みそぎ』と讀んで居ります。之を廣く申せば祓も禊も一つのものでありますけれども、其の場合を分けて申すときは(一)自分の穢を物品に附けて捨ててしまうやうな『みそぎ』は祓と云ふことに當るのてある。又『祓』は『洗』と同じやうなものてあるが、自分の身を水で洗つて淨めるのが禊てある。(二)所が又それが斯う云ふ風にも用ひられて居る、即ち祓は水邊に依つて水を用ひずして致す場合、水を少しも用ひずして致すときは如何なる場合に身を淨くするのでも之を祓と謂ひ、水邊に依つて水を以て淨めるときは之を禊と謂ふと說いてあります。(三)又後になつては　天皇、皇后が身を淨めらるる場合は禊てあるし、下下の者が身を淨める場合には

祓であると云ふやうに區別して居る人もあります。けれども結局其の本に於ては禊も祓も同じでありまして、何れにしても絶えず向上して行かうとする努力を其の精神と致して居ります。此の向上の努力に依つて總てのものが出來上り、之に依つて古神道の生命が輝いて居る次第である。

第二項　禊により成りませる神神

第一目　物上に成りませる神神

祓は斯く大切なものでありますが、次に　伊邪那岐命が爲された祓は如何樣に言傳へられて居るかを申上げます。諸神は根之國から退かれ、筑紫の日向の橘の小門の阿波岐原にて祓を爲されて先づ御自分の穢れを物品に附けてお棄てになると夫より色色の神樣がお出來になつたのである。これは日本書紀と古事記とは異つて居りますけれども、古事記に依ると十二神がお出來になつて居ります。此の神の中六柱の神は本居先生の御說に從ふと陸路の神であり他の六柱の神は海路の神である、一體神神には色色本末がありまして、是等の神は、どちらかと申せば中心より遠かつて居る神であります、神社にもお祀りをしてありませぬ、又建國の根柢としては端の方においてになる神神であります。故に一一お話を致しませぬ。

衝立船戸神は　伊邪那岐命が穢を轉じて淨きを生ぜしめんと杖を投げ棄てられた時に、其の杖からお出來になつた神であります。衝立とは杖がそこに衝立つて留まつて居る所から謂ふのであり、船戸は『くなど』であつて、此の處よりこちらへ根之國の要素は入つてならぬ、後へ退けと云ふ精神を有つておいてになる神である。其の事は本居先生が考證して居られます、日本書紀にもさう云ふ精神が見えて居る。即ち此の處を越して根之國の要素は其の儘の形で入つて來ることはならぬと云ふ見張りに立つて居る神が　衝立船戸神である。又帶を取つて投げ棄てられると、それからして　道之長乳齒神がお出來になつたのである。『道之長乳』は『道之長道』と云ふことであり『齒』は『磐』と云ふ意味であらうと云ふことであります。帶は長いものでありますからそれに結びつけて申したのであつ

まり道の長い處に落付いてどつしりと坐つて居られて根之國の要素が其の儘の形で入つて來ることを喰止めていらせらるる神であります。其の他　諸神の御身に着いて居る穢れたもの、即ち裳、褌、冠等から色色の神がお出來になり、中には　和豆良比能宇斯能神と云ふやうな病氣に罹かり穢れの着く神があり、それに觸れると穢れを生じ易い神もあれば、穢れの侵入を防ぐ神が陸路の方に於てもお出來になり、又海路の方に於ても色色の神がお出來になつた。併し是等の十二柱の神神は主に　伊邪那岐命が根之國に御持參になつた物品に着いた穢れからお出來になつたのである。精しく云へば穢れ自身が神樣になつたのでない。其の穢れを被つて之を淨くしようとする努力に依つて、努力と結びついて斯う云ふ神がお出來になつた譯である。

第二目　心身上に成りませる神神

斯の如く穢れを着けて物品をお棄になつた後に、今度は上つ瀨と下つ瀨との間の中つ瀨の海水にてお身を滌き給ふときに成りませる神神は何れも大切である。之より後世まで永く汚れを祓ふ爲めには鹽を用ゐ、左右中と三方を清めるのであります。惡い神は惡い方について最も顯著なる神であり、善い方の神は亦善い方について最も顯著なる神であり、善い方の神し給ふ神樣が其の中からお出來になつた次第である。

第一　八十禍津日神　大禍津日神。

一　此の神の性質。

先づ一番始めに成りませる神は　八十禍津日神　大禍津日神でありますが、これはまだ御身に穢れが着いて居つて、其の穢れをお洗ひになる時にお出來になつた神である。從つて根之國の穢れを此の豐葦原中國にお振りまきになる所の神である。未だ十分に穢れを轉じて淸淨を生じ得なかつた時にお出來になつた神である。つまり根之國の要素が、豐葦原中國(豐葦原中國と申してもまだ高天原との區別がしつかりと付かぬ時であるが)に於て人格的の努力に依つて禍津日神を生ぜしめたので　禍津日神はそれ以來人格者の心の中に宿つ

て、人格者を透して、根之國の要素を絶えず此の世界に振りまきつつある神である。根之國では　伊邪那岐　伊邪那美命の御談判に依つてちやんと界が極まつて、根之國の要素が其の儘漫りに豐葦原の中國に顔を出すことは出來ませぬけれども、如何にして根之國の要素が此の世界に働きを爲すかと申せば、此の禍津日神が在つて　禍津日神の働きを透して此の豐葦原の中國に色色の禍となつて現はれて來るのである。根之國では眞暗で分りませぬが、假令或形をして居るとしても其の儘の形で豐葦原の中國に現はれて來ることは出來ぬ。禍津日神を透して、此の世の中に現はれて出るのである。其の　禍津日神は我我の心の中に在らるる神である。否な人間ばかりでなく萬我萬物の生命の中に存在して居る神である。言葉を換へて申せば我我の心の中に　禍津日神を宿して居るから　禍津日神の命令を受けて迂濶に仕事をすると、根之國に在る色色の要素が穢い形に於て現はれて來て、樣樣の荒び事をする。

二　禍津日神も結局は產靈を離れ給ふこと能はず。

併し此の　禍津日神をも『日』と申して尊んで居る。『び』とは微妙の働きを以て創設する意味があるので　禍津日神は禍を生ぜしむることに依つて、此の世の中に有らゆる事柄を創設しておいでになる神である。破壞の神でありながら破壞することに依つて創設し給ふのでありまして、打崩すと云ふことがなければ創設と云ふことはありませぬ。創設は他の方面から見れば、いつも打崩すと云ふことが伴つて居る。例へば綱を渡ると云ふことも、ただ綱を渡るのでない、うつかりすると落ちると云ふことがあるが、それを落ちないやうに綱を渡つて行くから綱渡りである。又善を行ふと申しても、ただ善は無い、少し間違ふとそれが惡となる、其の惡を生ぜしめず努力し遂げた所が善である。生活も常に打崩されやうとする所を轉じ、それを統一し、それを向上の理想に依つて絶えず纏めて行く所に存する譯である。禍津日神は世界に於て消極的の方を分擔して、而かも結局は他の神の統括により積極的の存在を生ぜしむる神であります。

第二　神直毘神　大直毘神。

一　此の神の御性質。

所が　伊邪那岐命はそれを御覽になりまして（八十禍津日神　大禍津日神をお生みになつたことを御覽になつて）、之を轉じて善を生ぜしめなければならぬとの御心から、更に禊して　神直毘神　大直毘神をお生みになりました。『直』とは『なほす』と申すことで、病氣を直すとか、間違つた事を直すとか、或は曲つたものを直くするとか云ふ意味の言葉である。直くしたもの、眞直は一つしかない。同じ點の間を結び付ける線に致しても直線であるならば、何本引いても一つである。そこで古神道に於ては、何でも努力に依つて曲れるを直くし、一つにして行く。されば言と言をも二つの違つたものにせずして、直ほく一つのものにして、行くこととともなり又言と行（即ち事實）を別別にせしめず、言行を一致せしめ或は知行の合一を完ふせしむることも古神道の精神である。

古神道に於ては此の意味にて『直す』ことを最も貴い事に致して居り、直毘神は　禍津日神の爲された事を端の方から直して行かれるので、之を直すには努力が大切であります。我我が絶えず向上を念として奮發して行くのは即ち直毘神が我我の心の中に於て働いて居らるるからである。否な人間のみならず、萬我萬物の中に於ても直毘神が絶えず　禍津日神を支配して其の行動を轉じて善を生ぜしめて居られます。斯かる事は祝詞に於ても見ることが出來ますし、又本居先生のお書きになつた古事記傳の卷の初にも直毘の靈と云ふ章がありまして、それ等に關聯して色色お書きになつて居られます。例へば祝詞の中の御門祭の祝詞を讀んで見ますと次の樣な事が書いてあります。

二　御門祭の祝詞を例示す。

櫛磐牖豐磐牖命登御名乎申事波。四方內外御門爾。如湯津磐村久塞坐氐。四方四角與利疎備荒備來武。天能麻我都比登云神乃言武惡事爾。相麻自許利。相口會賜事無久。自上往波上護利。自下往波下護利。待防掃却。言排坐氐。朝波開門。夕波閉門氐。參入罷出人名乎問所知志。咎遇在乎波。神直備大直備爾。見直聞直坐氐。平良氣安良氣久令奉仕賜故爾。豐磐牖命。櫛磐牖命登。御

名乎稱辭竟奉久登白。

櫛磐牖命　豐磐牖命と神の御名を申上げて仕へまつる所以は、此の神は四方內外に在る門門に湯津石群の澤山の大きな石がどつしりと坐わつて居るやうな鹽梅に、そこに動かずに坐わつて四方の門を守り、輕蔑心を以てうとびあらびて入つて來る　天之禍津日神を防止する。（祝詞に　天之禍津日神の『いはむ』惡事とあるは、言行一致、言即行なるが故に言行の一切を含む）。禍津日神が門門より惡事を內に入れやうとする。それに相交つて互に口を交へて贊成などすることなく、上から入らうとすれば上を守り、下から入らうとすれば下を守り、待防ぎ拂ひやつて、斯の如き言葉や行ひは遠く斥けて、さうして朝夕に門を守つて門を出入する者をよく調べ、惡い者は此の內に入れない樣にする。又罪過あればそれは　神直毘神や　大直毘神が祝直し聽直してそれを直して下さるやうにして、平らけく安らけく　御門の神が　天皇に御仕へ申すが爲に　櫛磐牖神豐磐牖神と申し御名を稱へて御祭りをする譯である。どうか此趣意をどこまでも貫徹せられて　天皇を御守り下さるやうにと申すのであります。（天皇は天照大御神の御延長たることを、其の御本質となさるが、尙ほ假に御自身を低くせられ　天照大御神は勿論　御門の神に至るまで御祭り遊ばす次第である。）此の　御門の神はどこまでも惡い者の入らぬやうに御門を守り、其の御門の內に在らせらるる　天皇の御稜威を益々發揚し、又　天皇に御仕へ申す人人に曲つた惡い心が起らぬやうに守つておいてになる。それ等も尙ほ　神直毘神　大直毘神に依つて貫徹することが出來るので、是等の神がいつも惡い事を祝直し聽直して下さる心を以て總ての神に御附添下さつて居る。況や一切の人間萬物に　神直毘神　大直毘神が御附添下さらなければ、それ等の者に、罪過の無いやうにすることは覺束無い譯である。故にどこまでも　神直毘　大直毘神の御存在を反省し、それに歸一して行動しなければならぬことであります。又此の祝詞に關係有る大殿祭の祝詞にもさう云ふ事が見えて居ります。（大殿祭は新嘗祭及神今食と申して、一年三回神樣に穀物を供へる御祭を致しまするが、其の御祭を遊ばした翌日に　天皇の御住ひなさるる大殿のお祭をするのであり

其の大殿祭に附けて御門祭をするのでありました)。

三　茲に至り淨穢、曲直、禍福の別明らかなり。

斯の如くに　直毘神の御力に依りまして明(赤淨清)正、直と申すことが始めて存在するに至つたのであつて、清いとか明いとか申すことは　禍津日神や　直毘神のお出來になる以前には無かつたものであります。伊邪那岐命が根之國においでなさつたときに穢の本が在りますが、禊を爲され　禍津日神がお生れになつたときから、此の世の中に穢が現實に存在することとなつた。それを轉ずる　直毘神がお生れになつて明き清き事を生ぜしむることになり、世の中に淨穢と云ふことが分れて來たのである。

そこで古神道に於ては色に於ても白い色と赤い色とを貴び、殊に白い色は清潔の色として貴んで居る。されば　天皇の御召物も白い色を貴び用ひられて居る。又神社も、後になつては、權現造りなどと云ふ風に、佛教の建築法や何かを採用して造つた日光の廟のやうなものが出來て來ましたけれども、昔は神社は神明造りと云ふ風に、伊勢の大廟などの如く白木造りでありました。又今日でも佛壇は塗つてあるが、神棚は皆白木造りてある。或は經典などは紺地に金文字などで書いたものがありますが(神道の方では昔は佛教の語、其儘、穢れと思つて居つたから、經典と謂はずして染紙と謂つて居り、染紙と申せば神前でお經の話をしても失禮に當らないと申すことになつて居りました)神道では眞白の紙を用ひて、わざわざ紙を染めたり何かして用ひない。或は祭典の時神馬などを曳くにも白木の鞍を用ふると云ふやうなこともあつて、總て白く清いものを貴んで居るのであります。又祭の具合なども一は建築の具合にも依りませうが、佛教の方ではわざと暗い處に入つて、其の内に灯を點じ、さうして其の光を佛様の光明などと云つて有難がつて居りますが、神道に於ては晴晴とした青天井又はそれの見ゆる處に居つて、白き清淨の着物を着て、總て明き淨き心を以て神に仕へることになつて居る。西洋の中世の寺院などは如何にも暗く陰氣に出來て居り如何にも此の世の中は暗い處であるから、どうかして明るい天國へ行きたいと云ふ心を起させる樣になつて居る。けれども神道では此の世の中は神のいらせらるる處であるから、明るい處であると見て居る、而かもそれは　直

毘神の心に依つて暗きを轉じて明るくなしつつあるのである。

第三　伊豆能賣神。

斯の如くにして　直毘神をお生みになつた後、更に禊を爲された時に　伊豆能賣神がお生れになつた。『伊豆』は『清明』の意味で、曲れるを直くした時にお生れになつた神であるから　伊豆能賣神である。けれども、尙ほ根之國の穢をお祓ひになつた時にお生れになつたのであるから、穢と緣故がある。即ち伊邪那岐命が御一柱でお生みになつたのでなく　伊邪那美命の穢に依つて伊邪那岐命がお生みになつたのである。天皇の御德を御稜威と申して居るがこれは『いつ』と『いづ』と云ふやうに濁つて讀むと讀まぬとで違ふと本居先生は申されて居る。けれども亦『嚴』を『いつ』とも『いづ』とも讀みどちらにも當て用ひて居る所が澤山ある。さう云ふ所から考へて見ると、御稜威と申すことも、伊豆に近い關係がある。伊豆(清明)とは背後に於て大なる勇猛心を有する所の清明であり、又御稜威も實に立派な勇猛の御心の現はれてあり清明の現はれてある所の御威嚴であると考へるが宜いと存じます。ただ支那流に考へて　天皇は御威嚴を有せられる恐しい御方であると申すやうにのみ、御稜威の文字を當て用ひては誤りであると思ふ。また同時に清く明いと申すことも、ただ清く明いのではなくして、勇氣と通ふ所の清明であると見なければならぬ。つまり己れを清くしてどこまでも神樣に清い所を現はすことを『伊都久』と申して居ります。伊都久は己れを清くして神樣に清き所を現はすことであるが、矢張りそれを『いづ』と濁つて讀む場合もある。さう云ふ所から申しても御稜威の『いつ』は恐しい御威光のみではなくして、言ふに言はれない清らかな御威光であると見て宜からうと存じます。尙ほ本居先生は祝又は齋はいづれも『いづ』から轉訛して居るものであると申して居られます。

第四　綿津見神　筒之男神。

尙ほ　伊邪那岐命が進んで禊を爲された結果　綿津見神及　筒之男命(いづれも上中底三柱づつあり合せて六柱の神)をお生みになつたのである。此の綿津見神はずつと前に申上げた善惡共に更に關係の無い中性の神なる　綿津見神とは異りまして、我我の向上と云ふことと特に密接の關係を有せらるる神樣

てある。此の神は總て穢を引受けて淨めて下さるので、濁流滾滾として流込んでも大海に入れば清くなつてしまふ。又海は荒くして生活に妨害をするものであるが、併し之を利用し善用すれば魚も捕へられれば交通を容易ならしむることも出來る。筒之男命も海に關係ある神なれども、古事記などに記載してある所に依り、どう云ふ時に如何なる御行動を爲されたかを考へて見ると、此の神は水先案内の神で海路を宰つて居る神である。綿津見神　筒之男命は海軍軍人に取りては極めて大切の神神であられます。神功皇后の三韓征伐の時には筒之男命が往復共海路をお護りになつたのである。そこで　綿津見神は兵庫縣明石郡垂水村の官幣中社海神社にお祀り申してあります。又　筒之男命は攝津國東成郡住吉村に在る官幣大社住吉神社、山口縣豐浦郡勝山村に在る官幣中社住吉神社、長崎縣壹岐郡那賀村に在る國幣中社住吉神社等にお祀り申してあります。墨江大神と申し上ぐるのは此の　筒之男命のことであります。

第五　中瀨に重きを置く。

斯の如く　伊邪那岐命は上瀨でも又下瀨でも禊を遊ばしましたけれども、最後に中瀨をお選びになつて、禊を爲されたので、古神道では中と云ふことを大切にして居る。此の中瀨にて禊を爲されたときに以上の大切なる神神がお生れになつて、それが爲に豐葦原中國に於て、現に善惡淨穢など云ふことが存するのである。それ故に古神道では無限だの有限だのと云ふ極端を重く見ずして中程を大切に見て居る。人生で申すと有限の個人であるとか或は細胞であるとかに重きを置かず、或は無限である所の絶對の宇宙を專とせず、人間であるとか國家であるとか民族であるとか或は家であるとか中程に近いものを中心にして居る。又家と民族と人間とを取つて見れば、民族は中程に在る。此の民族と云ふやうな中程の所を取つて。兩端を活かさうとするのは餘程面白いことである。之を理窟でやかましく言つて居るのは天台の『三諦圓融』(假諦、空諦、中諦)であります。これは理窟の方であるが、之を信念として昔から事實の上に活かして居る所が古神道の優れて居る所である。曾てお話した如く『中』は『あか』と音が相通じ從つて意味も通じて居ると本居先生は言つて居られます。さう云ふことの愈〻確定するには、禊と申す向上の努力に依つてそこに一路が開

我は毎朝眼身を濯ぎて清めばなる日の御光を見終日其の下に活働して居る

我は又滝身して終日波濤の中に飛び込み絶叫し奮闘しつつあり

かれて來て、さうしてこれからお話するやうな世界の總攬者も確定する譯である。

第六　天照大御神、月讀命、及　建速須佐之男命。（三柱の貴子）

一　眼鼻より三柱の神成ります。

さて最後に　伊邪那岐命が御身の中で最も大切な部分を滝がれ先づ左の御目をお洗ひになると　天照大御神がお生れになり、次に右の御目をお洗ひになると　月讀命がお生れになり、最後に御鼻をお洗ひになると　建速須佐之男命がお生れになつたのである。是等の點につきても似たる言傳が餘所の神話にありますから、其の外形の末を摘出して羅列品評することも面白からうが、併しそれは道樂仕事であつて實は其の精神信念を見るのが大切であります。いつたい我我の有つて居る信念を言表はすに、一知半解の理窟を以て言表はすのは宜い事ではありませぬ。それを詩的に又お伽噺の樣に、小供にも大人にも發達した人にも幼稚の人にも、誰にても分る樣に言傳へて居る所が實に面白い所である。天照大御神と　月讀命とは光つて居り、又光を認め得る所の目からお生れ

遊ばしたから特に光を放つ神であることが分り、又　須佐之男命は鼻からお生れになつたので鼻は絶えず呼吸をし活働をして居る所である、其の御性質も分かる、俗に鼻息が荒いなどと申しますが、須佐之男命は隨分荒い神であり、又鼻は穢の多い所であるから、此神は根之國に緣が深くいらせらるるのである。支那にも大昔は盤古氏があつて其の眼が日月となり血が水となり骨が木となつたとか、或は印度では「ブラーマー」の眼から日月が出來、其の排泄物より山や雨等を生じ其の息が風となつたとか云ふやうな事がありまして、其の言傳への一部宛はよく似て居るが其の全體の結果は大に違つて居る。古神道の言傳へは統一的の系統を爲して居りますから、一番終りになつて全體の神神を考へて見ると孰れもめきめきと活躍して來るのである。他の國に於てはさう云ふ事が、社會の事實として見事に實現せられて居る處はどこにもありませぬが、獨り御國に於てのみはさう云ふ信念が徹底して實に雄大に實現されて居ります。一つ一つの言表はし方を取つて見ると他の國にもありますけれども、それが全體に纏まつて活きて居るものは他の國にはありませぬ。而かも御國體の中に其の

儘活きて居り、天皇の性質も此の　天益人即ち日本人民の心の中に實際活きて居ることは他に見難い所であります。

二　左を尊重すること。

天照大御神は　伊邪那岐命の左の御目から生れられたのであるが、古神道では、左を貴びます。左は直右は曲でありまして、『ひた』とは直の意味である『直す』とは曲つたものを直ぐにすることであるが、『ひた』は曲つたものが直ぐになつたことである。又右とは曲と云ふことで曲つて居ることを謂ふ。從つて左が貴く右が劣つたものと見て居る。是等の事は天體崇拜などとも關係して居る、古神道は天體崇拜を骨子とせず、祖先崇拜を骨子として居るのでありますが、祖先の御德を言表はすに、天體崇拜とか死者崇拜とか色色なものを持ち來つて潤色して居る。そこで左が直であり右が曲であると申すことは言葉の說明でありますが、之を天體の運行などについて考へて見ると、北半球に於ては太陽が始終南を通つて居る。皇國では　天照大御神を太陽に模らへて申し上げて居りますが南に向つて居りますと、左から日がお出になつて、右の方に入つてしまはれ、右に入つて光を失はれたかと思ふと、又左から出て照らさるる。從つて左を貴び右を次のものと見て居る。さう云ふことを離れて考へて見ると、人間は大抵右の手で仕事をして、右を貴んで居りますが、それは自分の立場から見るからさうなるのであります。己れを空うして大きなものを本にして考へると左が貴くなつて來る。そこで南面して太陽の出る方を直(左)と見南面して太陽の入る方を曲(右)と見て居る譯である。(又左大臣右大臣と申すものがあり、支那あたりでは、皇帝の左の方が弱いから其の弱い方を助けて居る者が左大臣で、從つて右大臣より左大臣の方が格が上になつて居ると申す說もあります)。

三　此の三柱の神神は中軸たる貴神なり。

伊邪那岐命は此の三柱の神をお生みになつて大くお歡びになりました『吾は御子生み生みて、生みの終てに三柱の貴子得たり』と仰有つた。即ち今まで天地を經營して居つて未だ出來上らずに居つたが、ここに始めて其の總攬者たる立派な御子を得たからこれにて漸く仕上げが出來、所謂龍を畫いて睛を點ずることが出來たと歡喜せられたのである。ここで　伊邪那岐　伊邪那美命の天

地經營が一段落を告げ、是より更に新しい幕が開かれるのであります。

四　各神の權限。

そこで此の三柱の御子の中　天照大御神をして高天原を知ろしめさしめ須佐之男命をして豐葦原中國を知ろしめさしめ、又　月讀命をして　天照大御神を助けて高天原をお治めになる樣に御命じになつたのである。尤も古事記に依ると　月讀命は『汝命は夜の食國を知らせ』と仰せになつて居るから、黃泉の國でもお治めになるやうに御命じになつたかの如く見えますけれども、夜の食國は根之國たる夜の國を指すのではありませぬ。天照大御神の御光りは最も明るく　天照大御神がお現はれになる時にはいつも眞晝間であつて高天原のみならず豐葦原中國までも明るく、天照大御神が御休息になると稍〻暗になる。其の稍〻暗い時に　月讀命がお輝きになる樣に御命じになつたものと解釋しなければならぬと思ふ。日本書紀本文を見ると『月の神を生みまつります、其の光り彩しきこと日に亞げり、以て日に配びて治べしと、故れ亦天に送りまつる』と申すことがあり、又日本書紀「一書」にも『月夜見尊は日に配びて天上の事を知す可し』とある。然し同紀中他の一書を見れば『月讀尊は滄海の潮の八百重を治すべし』とある。之は天に在る月の行動に依つて潮の滿干があるから、月の神は高天原に在つて海原の潮の滿干を掌れと仰付けられた意味でありまして日に配びて天上の事を知らすべしと仰付けられたこととは矛盾するとは思はれませぬ。

須佐之男命については古事記には『汝命は海原を知らせ』とありますから、陸地には關係がない樣でありますが、曾てお話した如く海原と申すのは廣く申せば豐葦原中國全體を申すのである。其の證據には同じ古事記に、須佐之男命が國の治め難きを哭かれて『青山を枯山如す泣き枯らし、河海は悉に泣き乾しき』と云ふことがありますから陸も海も双方を治めしめたことは確かである。豐葦原中國は波風の荒い少しも油斷のならぬ處であるから、海原と仰せられたのであります。これは日本書紀を見れば一層明らかである。同一書には『素盞嗚尊は天下を治す可し』とあり、同紀本文には『故れ國內の人民を多に夭折しめ、復た青山を變枯になす、故れ　父母の二神、素盞嗚尊に勅して云はく、汝甚無

道、宇宙に君たる可らず、云云』とある。

さて茲に此の三柱の神の御性質を申上げてそれより神代本紀の活働の關係に移らうと存じます。

第三部　神代本紀

第一章　總　說

第一節　三貴神の主たる御性質

斯くしてお出來になり種種の世界を分けて支配せられた、此の三柱の神神の御性質を申述べますると、先づ　天照大御神は天體崇拜の思想を以て太陽の德に模らへて、其の御德を稱たへ奉りつつある御方であり、又　月讀命は之を月に模らへて其の御德を見奉り、又　須佐之男命は之を暴風に模らへて其の御德を申して居る次第である。何れも御祖先でありますけれども其の御德を信念の方から見奉り、之を天體に譬ふれば日月並に暴風に當ります。太陽の光は最も明るいものであり、月の光はそれに亞ぎ(月は日に『亞ぎ』て明かるいから『つき』といふと)又暴風は荒れる時には隨分恐しいけれども、吹歇めばどこへか收まつ

てしまつて影も形も無いやうな譯で、後に　須佐之男命が根之國に往つて潛在して居らせらるることになつたのは恰も暴風が吹いて後、跡形も無いのと同じやうなものであります。

第一　天照大御神の主たる御性質。

一　世界の光の表現者なり。

先づ太陽について申しますと、太陽の輝くことは、他に光を與ふることであつて、他に光を與へずして自分だけ光り輝くことは有り得ぬ。自ら輝くのは、それぞ他を照らす所以であり、從つて其の行動には自他の區別は無い、それが光の德てあり、ここにも表現の意味が見えて居る。故に　天照大御神が天隱れし給ふと高天原も豐葦原中國も眞暗になつて光が無くなつてしまふので、此の世界の光は　天照大御神に依つて表現せられて居る。天照大御神の御光は御自分の偶然の御光ではなくして、ここに表現の精神が見えて居ります。此の表現の精神が本で外國の德目等は第二段以下の末のものであります。孝悌忠信などと申す外國の文字は立派であるが、併し表現者たることが本で表現者として君に對すれば忠となり、表現者として下に對すれば仁慈となり、表現者として子に對すれば孝となり、表現者として親に對すれば慈愛となり、表現者として友に對するときは信義となるのである。故に孝悌忠信は貴い德であるが、併しさう云ふ言葉は第二段以下の假の言葉であつて、精神の根據は表現に存し、此の表現の精神を古神道では最も大切として居るのである。是を臣民につきて申せば即ち『萬德の根本たる忠又は忠良』の義であります。

二　愛は少くも犧牲的なり。

天照大御神は總てを依怙贔負無く照らして下さる御方であり、其の御光に依つて萬物が生成して行くので、愛の神であらせらるる。熱帶地方の太陽は男性的に見られて居り、太陽が照ると饑饉が起り物が枯れてしまふから、成るべく太陽が顏を隱して雨が降れば宜いと思はれて居る。溫帶地方にては太陽の顏が見たくてならぬので太陽さへ照らして呉れれば東北地方の饑饉のやうなことはない。夫故溫帶の民族は太陽は愛に依つて物を造つて下さると觀て居るのである。一體愛には利益などと申す考へは少しも無く愛は犧牲的のものであ

る。極く淺薄卑近の男女の愛に於てすらも、愛には利益の考へは無く從つて心得違ひとは申せ情死のやうなことさへ行はれる。愛によりては損得等は考へず身さへ殺す程の犧牲的のものである。

三　永遠に若若しき神なり。

さて　天照大御神は愛に依つて永遠に萬物をお造り下さる神樣であらせらるる。此の神を中心として榮えつつある大和民族の信念は生生として若若しいものである。多くの宗教の中には立派な宗教であつても老成を精神として居るものがあり、徒らに客觀的に傾き、痛くも痒くも何とも無い、皺涸れた樣な信念を養ひつつある者もありますが、古神道の信念はいつも若若しいもので偉い元氣を以て進んで行かうとするものである。然も元氣にはやり向見ずと云ふ譏を受くべき點は無く、雄大なる思想を以て仕事を爲し遂げやうとするものである。普遍的に美しき青年の理想が輝いて居るやうなものである。希臘の神の「ジュピテル」の像などは氣高い立派な顏をして居るが、併し老年の顏をして居るし、基督教の「ゴット」なども立派な畫工の描いた畫像が、老年の顏に現はれて居る。そこで基督教でも聖母「マリヤ」の崇拜が興ることとなつた。所が日本民族を中心として存在する古神道に於ては　天照大御神は永遠に若い神樣として而かも美しく氣高い女の樣な顏をして居られ、又女神として記憶されて居る。

勿論深く觀察すれば若い者であるから創設作用を行ひ得る、老人であるから創設作用を行ひ得ぬと申す次第ではありませぬ。年を取れば益精神上の創設作用を行ひ、若い中は身體的に創設作用を行ふと云ふやうな創設作用の分擔があります。若い者が幾ら立派な口をきいても、それを實現することはむづかしいが、年を取つて來ると一言一行それが天下の範となつて、ただ一言斯う云ふ事をしなければならぬと言ふと、忽ちそれが天下に行はれると申すやうに、創設作用が益大きくなつて來ることもある。併し之れを容貌繪畫彫刻等の形式的に表はす場合には、東西共に若い者程元氣が宜く、年老いた者の形を見ては創設作用の衰へたることを聯想する。さう云ふ譯で　天照大御神を永遠に若若しい神樣と信じ、此の神の前に立つと皆若い心持になつてしまふと云ふ形式的の表はし方は、如何にも古神道の

元氣の宜いことを示して居るものと信じます。

同じ佛敎などでも西藏邊りに入つた佛敎は、恐しい佛敎であつて、其の用ふる道具に人間の大腿骨などを使つたり、髑髏などを弄び、觀音樣の像なども恐しい怖い顏をして居る。所が日本に來て居る觀音菩薩は古神道の大精神の影響を受け柔和な慈愛に富みたる顏をして居り、觀音菩薩は女ではない男である。其の他佛敎中に存する慈心の方面が最も重きものとなつた。

四　奉祀せる神宮。

尙ほ　天照大御神の御德については時間の都合にて後にお話することと致しますが、此の　大御神は伊勢の皇大神宮に御祀り申して在り、又和歌山縣海草郡宮村に在る官幣大社日前神宮國懸神宮及び埼玉縣兒玉郡靑柳村に在る官幣中社金鑽神社等に御祀り申して在ります。

第二　月讀命。

次に　月讀命は　天照大御神に較べると荒魂の方が勝つておいでになる、溫味の少い冷かな神であります。勿論　日の神に較べて申すのであります。夫故、荒魂を振つて　食持神をお擊殺し遊ばされたことが日本書紀に見えて居る。食持神は己れを犧牲に供されたる結果、穀物や蠶の種となつて是等の種を永遠に我我に供給して下されつつある。身を殺してお上や下萬民の生活を助けて下さる神であります。朝廷に於ても特に宮中の神殿に御祀り申して在ります。天照大御神は　月讀命の御行動を御覽になつてお腹を立たれ、お前は始終は自分の側に置くべきものでないと仰有つたと申すことが矢張り日本書紀に出て居る。そこで太陽と月とは常には一緒に居らずして、太陽は晝出て月は夜出ると言傳へもある。此の神は伊勢の皇大神宮の內の別宮(月讀宮及月讀荒魂宮)に御祀り申して在り、又伊勢の豐受大神宮の別宮(月夜見宮)及び山形縣東田川郡官幣大社月山神社に御祀り申して在る。(建速須佐之男命については後に精しく申上げます。)

(以上第九講)

第二節　三貴子（みはしらのうづのみこ）が禊によりて成りませるは大に理由あり

第一　愈〻神たる所以を實現するには禊によらざるべからず。

萬我萬物は之を其の根柢より觀察致しますれば皆神に外ならぬ次第であります。又眞面目の心持を以て此の大宇宙に瀾蔓して居る現象を客觀的に觀るときは皆神聖なる働きをして居るものに外ならぬ。けれども、ただ根本とか本來とか申すものが、それだけにて働いて居るのではなく、實は末と云ふ處に眼を着けて始めて根本と云ふことが謂へるのであります。又客觀的と申しましても、ただ客觀と云ふことは無い譯である。假令眞面目を前提として觀る、『意味の有る客觀』であつてもただ客觀と云ふことは無く、主觀を前提として始めて認めらるる所のものであります。そこで哲學上でも神學上でも、其の極致は、本が無ければ末が無く、末に因つて本が有り、又主觀が無ければ客觀無く、客觀が無ければ主觀が無いので、主と客と相待ち相合して而かもそれに超越して居る處に尊い處があると、申して居る次第であります。そこで古神道の眼から見ましても、萬我萬物少くも我我は皆本來神に外ならぬのである。又我我のする事はどんな事をしようが客觀的に申せば、皆神聖なる大きな仕事を爲しつつ在る者に外ならぬのである。けれども斯の如き方面をどこまでも實現しようと思ふときには、茲に主觀的の方面が必要になつて來る、即ち日常の一つ一つの末の方に依つて之を活かすことが大切になつて來る。其の末を用ひて之を主觀的に實現して行く場合に、祓即禊と申すことが存在して居るのであります。禊に依つて我我の根本的の精神が始めて認められるので禊の根柢の上に我我が日常の行動を着着爲して參りますから、假令過ちが有らうがどんな事をしようが、結局はそれが神聖なる行動になるのであります。此の前にも申述べた如くに、綱渡りの技はよく熟練すれば必ず渡り得らるることに根本的には極まつて居る。けれども、ただ簡單の事で綱が渡れる譯でない。愈〻それを實行する段になると、左に落ちまいとすれば右に傾き、又右に落ちまいとすれば左に傾く、それをどちらへも落ちず傾かぬやうに絶えず直ほして行く努力を要するので此の直ほして行

く事が禊と同じであり其の一一の努力に依つて「根本的にいへば綱渡りが出來る」と云ふことが實現せらるる次第であります。

さう云ふ譯てありますからずつと前の處て、天之御中主神とか、皇產靈神とか、其の外の　別天神並に神世七代の神神についてお話し、又　伊邪那岐　伊邪那美命の產靈の働きについてお話致しましたけれども、それは客觀的に見たる根本てあります。されば是等の根本は實に最後にお話申したる禊に依つて始めて活きて參る次第てあります。

第二　禊には外部にも神神の存在せらるるを信ぜざるべからず。

尙ほ祓を致すにつき存在致して居りまする大精神は、我我の一人一人の心持の方からも穢れて居るものを祓ひ、其の中から明く清き所の心持を出さうと申すことてありますけれども、尙ほ我我に超越して居る神、即ち其の祓を助けて下さる神が無ければ出來ないことと古神道では見て居る。自分の偶然に祓はうと思つてもそれだけては祓へぬ。自分の偶然を超越して居り、即ち自分とか或は他人とか自他と云ふことを超越して居る普遍的の存在をしておいでになる神が我我の願ひをお聽き下されて、共共に祓つて下され、共共に禊を成さしめて下さることが前提になつて居る。伊邪那岐命が禊を爲さる時にも、伊邪那岐命御一方て無くして、其の祓を爲さる時の　命の御心持の平らかなものてあることを保障する爲に、別天神並に他の神世七代の神神が其の前に存在しておいでになる譯であります。それ等の神神の存在を前提と致して、始めて　伊邪那岐命の禊が意味を成すのてあります。我我について申しても其の通りてある。祓を致さうと思ふ時には、我我の偶然に超越して居る神が在り、其の神が祓の精神をよく聽いて下されて、一切の穢れた事を皆引受け、それを消滅せしめて下さるものと見るのが、古神道の信念てあります。是は特に注意しなければならぬ大切の信念てあると思ひます。（大祓の祝詞を御覽になると特に其の事が明かになります）。

第三　外部の神神は亦內部の眞心中に存在せらる

言葉を換へて申しますると、自分とか他人とかを超越して存在して居り此の祓をお引受け下さる神、それを助けて完成して下さる神は、實は自分の內にも存

在して居らるる。自他を超越して居らるるけれども、自分の根柢の眞心として、各自の內部に其の神が存在していらせらるるのである。勿論千萬人の中に千萬人の神が存在するのでなく、神は一つでありますけれども、而かも千萬人の何れの者の內部にも同じ眞面目として存在せらるる神であります。それ故に之れを心理學のやうな趣味を以て說明するときは、我我は自分の內部に普遍的に存在する其の眞心に依つて、一切の穢れを祓ひ、禍を轉じて淸き事善き事を生ぜしめなければならぬ。

第四　禊により內外の神は其の者に於て合一實現す。

これは單に自分の行動についてのみならず、他人の行動についてもさうてある。お互に他人に對して、他の者の爲した穢れ、他の者の受けた穢れを、各人の本心に在る神たる性質に依つて、それを引受けて、滅失せしめて行かなければならぬ。自分の眞心の中に現れつつある神に依つて、自分が爲した穢れを滅失するのみならず、お互に他人の爲した穢れをも引受けて、それを滅失せしめて行かなければならぬのである。曾て　皇產靈神の所に於て、古神道の大精神は、自分の行ひ、自分の人格を美化するのみならず、他人の行動を益〻美化し、他人の人格を益〻美化完成せしむるに在ること、之を終始一貫せる大趣旨として居ることを申しましたが。それと同じてあつて、祓を引受けて下さる神は、心理學的に云へば我我の內部に在つて、其の神が、自分の爲した穢れも、他人の爲した穢れも、皆それを引受けて吸收してしまはれますから、他人を見ると、他人の爲した行動他人の人格は皆美しくのみ見えて、惡い所や醜き所は見えぬことになり、從つて厭の善を長ずることになつて來るのである。故に古神道の祓には『善の祓』及『惡の祓』と云ふものがあります。惡の祓と申しますのは斯の如くにして自他の穢れを除き惡い事を取去つてしまふことを性質として居る、消極的の祓であり、又善の祓と申しますのは、之を訓て申しますときは『よし』の祓と云ひ、其の穢たものの中から善いものを生ぜしむることであるから、積極的の美化と云ふことになつて參ります。

第三節　三貴子の各は其の内に外部の悉皆の神神を包藏す

斯の如き被に依つて、最後に總てのものを完成する御方としてお生れになつた　三柱の貴子（うづのみこと）は、只今迄お話を申上げました澤山の神神の御性質や御存在を、御自分の内部に悉く結晶せしめて御存在になる御方で、前から續いてお話しつつ在つた神神の仕上げとしてお生れになつた御方である。而して此の　三柱の貴子は他の神とは表現對立の關係に立つておいでになる御方である。故に天之御中主神と　八百萬神との關係は表現歸一の關係であつて、何等の對立と申すことはありませぬけれども、三柱の貴子と今までお話した他の神神との關係は、表現對立關係になつて居りますから、大世界中に於て互に對立して存在せらるる方面がある。併しただ獨立の存在として相對立せらるるものでありませぬから、相互に他の神神を御自分の内にお含み合ひになつて居る。即ち　三柱の貴子の内に、他の神神の御性質をそつくり具へておいてになる譯であるが、それを具へらるるにつきて本末の關係が付いて居りますから、三柱の貴子の御性質を見ると皆違ふことになつて居る。

假に今までお話申上げた神神を「いろはにほへと」と致しますと、天照大御神の内にも「いろはにほへと」の神神をそつくり含まれて居られ、須佐之男命の内にも「いろはにほへと」の神神が悉く御存在になり、月讀命の内にも「いろはにほへと」の神神が一切包藏せられて居る。けれども是等の澤山の神が包藏せらるる順序が違つて居ます。例へば　天照大御神には「いろは」が表になつて「にほへと」が背後となり、須佐之男命には「にほへと」が表になつて「いろは」が裏になり、月讀命には「ろはに」が表に出て「いほへと」が内部に潜んで居ると申す樣に、其の存在の順序が違つて居ります。ここが大切の所で、古神道に於ては統括包容せらるる本末の關係を殊に大事に見て居り、本末の關係に依つて神の御性質が違つて來るのである。若し本末の關係を見ずして申すときは、世の中に在る存在は、表現對立とも謂ふべき時には皆同じになつてしまふので男女の區別も君臣の

別も親子の別も無く皆同じことである。例へば佛敎でさへも餘り本末を喧ましく申しませぬ。ただ一つのものの中に他の全體が含まれて居るものと見て、一中一切とは申しますけれども、それが本末の關係を以て含まれて居ることを古神道程嚴格に見ませぬ。夫故どうかすると惡平等になり易い。古神道では一中一切と云ふことを徹頭徹尾精神として居りますけれども、本末の關係を以て含まれて居る所に重きを置いて、一中一切を認めつつある次第である。

そこで(一)三柱の貴子も其の御性質に違ふ所があり、(二)是等の御方がどう云ふ樣な風に、此の大きな世界を御分擔になつたら宜からうか、(三)又代代の天皇を始め奉り、天皇の御光に依つて同じ色に輝いて居る天益人たる我我臣民も、神代の神樣を心の中に皆包容して居りますけれども、如何樣なる順序にそれ等の神樣を心の中に働かしたら宜いか、(四)どう云ふやうな本末の順序に是等の神樣を普遍的に外部にお見申したら宜からうか、と申すことが定まりて參ります。それは極めて大切の點でありまして、是が神代本紀に於て明らかにされて居る次第である。

第四節　日神の荒魂

さて此の三柱の貴子の中にて天照大御神につきては、尙ほ一言申上げて置きたいと思ひます。此の前には、天照大御神は和魂を其の御特質として居らせらるることを申上げました。和魂とは產靈を主觀的に我我の心の方から見て申すのである。天照大御神はどこ迄も和魂を主としておいてになりますけれども、亦其の背後の方を拜觀しますと、尙ほ荒魂の御存在も認められます。其の事は古事記や日本書紀には彼方此方に出て居る。最も著しい例は神功皇后の三韓征伐を爲された時である。此の三韓征伐の時には、天照大御神の和魂が神功皇后即ち息長帶日賣命(詳言せば息長帶日賣命並に應神天皇でありますが)の御身を守つておいてになり、又其の御船を導き御軍を導かる時には天照大御神の荒魂が眞先に立つておいてになられました。此の荒魂は撞賢木嚴御魂天疎向津姬命と申上げて居る。此の『撞』は『齋』の意にて、明き心が土臺になつて居り、明き清き心持である。又『賢木』は『榮木』

にて、木は產靈の働きに依つてどこまでも成長して行くものであるから、常磐木のことを賢木と申します。而して此の『撞賢木』と申すのは『嚴』の枕詞であり『嚴』は清明の意味であります。それで、尙ほ明き清き御心を土臺とせられ、乍ら、最も廣大なる和魂の御存在から、假に一歩收縮せられて、本來の和魂と相對立しておいでになる狀態を申し上げるのでありますから　天疎向津姫と申します。『疎』は『遠ざかる』などの『ざかる』の意味でありまして、本來の和魂は廣大無邊の天の中に存在するが、それと隔つて相對立して居らるると云ふ意味の御名であります。根柢に於てはどこまでも明く清き御心によりて產靈の働きをしておいでになりますけれども、假に一歩退いて其の和魂と相對立してお働きになる荒魂の御存在であつて、それを我我が斯の如き御名として記憶して居る次第であります。此の日神の荒魂は伊勢　皇大神宮第一別宮たる荒祭宮及攝津國武庫郡大社村の官幣大社廣田神社にお祀り申してある。

斯くの如く　天照大御神の和魂は　神功皇后並に　應神天皇の御身を守つておいでになつたのでありますから、三韓征伐についてお取りになつた御行動は、御寬大であつて、敵を征服しても決して敵を苦め屠ることをば目的と致されず、どこ迄も仁慈を旨とせられたのであり、それが昔からの日本の主義になつて居る。けれども安靜なる大厦を建つるには先づ荒荒しきどうづきを要し、樹木を安立せしむるには先づ地を掘らねばならぬ。之と同じく未だ開拓せられざる所の障碍物を取去る場合には、劍の刃尖の鋭き樣な荒魂がいつも嚮導者となつて、眞先に出て行動することになつて居りますから、三韓征伐の時にも　天照大御神の荒魂が眞先に立つて導かれたのであります。須佐之男命は荒魂を主として居る御方でありますから、國を開拓する場合にはいつも眞先にお出懸け遊ばす。是よりお話しようと思ふ神代本紀中にも其の事が十分現はれて居ります。そこで臺灣でも北海道でも樺太でも如何なる神樣を眞先にお祀り申すかと云ふと、須佐之男命の直接の御系統の　大國主神をお祀り申すことになつて居る次第で、何でも新たに開いて行く所には　須佐之男命の御系統の荒魂を眞先にお祀りすることになつて居ります。

第五節　日神尊崇の實修

第一　信念は實修と離れ得ず。

尙ほ實行のことについて申上げて置きます。度度申上げる如くに信念は理窟ではありません。一遍理窟を聞きて分かつても、それで信仰が得らるるもので無く、絕えず進んで分りきつた事を服膺し、其の服膺する事を形式的に現はして行かねばならぬ。之を淨土敎について申して見れば、例へば阿彌陀佛を崇拜する場合に、『南無阿彌陀佛』と念佛申しますけれども、一遍唱へたら最早夫だけで一生唱へないて宜いかと云ふに、決してさうでない。常に『南無阿彌陀佛』『南無阿彌陀佛』と唱へねばならぬことになつて居る。日蓮宗であればお題目の『南無妙法蓮華經』を一遍唱へたらそれで宜いと云ふ譯でなく、理窟が分りきつて居つても、否分りきつて居れば居る程愈以て繰返して唱へなければならぬ。或は基督敎に致しましても「ゴッド」を拜する時一遍「アーメン」と唱へたらそれで宜いと云ふ譯でなく、常にそれを繰返して唱へなければならぬのである。

之と同じく古神道に於きましても我我が神樣をお知り申しただけでは足りないのであつて、神樣をお知り申すことはどこ迄もそれを信じなければならぬことであり、信ずることには實行がなければならぬ。絕えず手を拍つなりお辭儀をするなり致さねばならぬ。神樣はただ各自の內部に偶然に御存在になる御方ではありませぬ。勿論各自の內部を透して之を感ずることが出來るのでありますけれども、而かも萬人に通じて普遍的の御存在をして居らせられるのである。そこで自分の偶然に陷らぬやうに、絕えず外部に御存在になることを前提しつつ、何等かの形式を以て、神に合一する修養をせねばならぬ。

第二　實修の形式

一　御札。

古神道に於ては御札を認めて居ります。此の御札は支那の老莊の敎を土臺にして成つた道敎の影響を受けて出來たものであると云ふ說もありますが、それはどうであつても宜いとして、此の御札を持つて居ると其の人の心持が確つかりして實行上に價値が現はれる。戰爭の場合などに軍人の方が御札を懷中

せられ、或は大砲の側に御札を貼付けて置かるると、理論ではなく、實際有難く平らかなる心持になつて雄大なる行動を爲し得られたと申すことは、實驗なされた方方より屢〻承る所であります。實にさもあらうと思はれます。

二　太陽の崇拜。

天照大御神については、皇大神宮樣の御札もありますけれども、我、我は、太陽を御札の如く思ふて居ります。否御札どころで無く、極く古い昔から　天照大御神の表現と思つて崇拜して居る。黒住敎は古神道とは違ひますけれども、太陽を拜む點は至極尤であると考へます。尋常の御札よりも更に動かないものであつて、我我がうつかりして居つても御日樣は毎朝必ず東からお出になる、其の時にお日樣を　天照大御神として拜することは單純なる理窟ではありませぬから、段段實行するに從つて有難いか有難くないか分つて來る次第である。或學者から聽きました所に依ると、獨逸國の「ヘッケル」と云ふ唯物論者は(これは醫學者社會では近頃神樣のやうに思つて居る獨逸人であります)、『有らゆる崇拜中にて太陽崇拜は最も合理的のものである。若し太陽が無かつたならば、此の太陽系全體の成立する筈も無く、地球が假に在つても斯う云ふ狀態で無く、又人間などが存在し得やう筈が無い。我我の立場から云へば日常又永遠に太陽のお蔭を蒙つて居るのであるから、太陽崇拜は一番意味の有るもので、これだけはをかしく無い』と言つて居るさうであります。成る程それに相違無いと思ひます。

三　天皇の尊崇及結論。

けれども　天照大御神とはただ太陽のことを申し上ぐるのでなく、それより遙かに廣大の御存在であつて、而かも活きていらせらるる御方である。太陽系の中に於ては太陽としてお現はれになつていらせらるる神樣であります。太陽系に現はるれば太陽となられ、又此の世界に於て人間として御存在になるときには　天皇としてお現はれになるのであります。天皇は人間として　天照大御神の御延長であらせられますから、人間たる者は皆其の總攬の下に立ち、天皇に歸し奉ることを實修せねばならぬ。社會萬般の制度も皆此の精神を中心として存在し、運用せられつつあるものであります。然も斯かる心持の涵養

は、太陽系中に在りては太陽を中心として存在し萬物が之により生育せられつつある所以を反省することと一致する。太陽に對し此の感じを養ひつつある者は、必ず此の社會に於ては　天皇の有り難きことを感ずる者である。太陽を透して　天照大御神を見つつあることの切なる者は、天照大御神の最も活き活きしたる表現であらせらるる　天皇を尊敬するの念に深きは知れ切つたことである。而してお札を懷中するが如きことは形式的の末のことではあるが、天照大御神及其の御延長たる　天皇を尊崇する絶えざる實修の爲には、亦然もありたきことであります。

第六節　神代本紀の性質

神代本紀は假に斯う云ふ名を付けたので、これが古神道の信念の中心であり、是に由て今迄申上げた幾分の仕上げが出來る所であるからであります。即ち神代本紀に至りますと、(一)高天原と豐葦原の中國と根之國との三つの世界が、其の總攬者と共に確定致したのである。(二)又ここに及んで總攬者と被總攬者との分も明確に立つて參り、(三)萬世一系の　天皇、(四)及び之と永遠に離るることの出來ない惟神道の根柢が確定致したのであります。

第二章　高天原に於ける　天孫御降臨の準備

先づ高天原に於ける天孫御降臨の準備よりお話致します。これは『理想界に於ける理想實現の準備』と申して宜しく、『建國の大本』であります。理窟は二の次として古事記の順序の通りに申上げるのであります。

第一節　治者の確定

伊耶那岐命は　三柱の貴子をお生みになりまして其の　三柱の貴子を如何樣に御配合なされ、又其の御配合の結果どう云ふやうにそれが落付いたかを見ますると、建國の大本はどこ迄も『和魂（にぎみたま）を中軸とすることに在つて荒魂（あらみたま）を主とするものでない』と申すことが分かります。

第一款　建速須佐之男神は中國の治者たるを得ず

第一　素神の荒魂と和魂。

古事記、日本書紀等の言傳に依りますと、伊邪那岐命は　須佐之男命をして豐葦原の中國を治めしめられました。豐葦原の中國は波風の荒い處であるから、荒魂が必要であつて、荒魂が無くては之を治め難いからである。須佐之男命（素盞嗚尊）も御自分の御神格中に一切の神を含み、又愛に依つて一心同體となつた　伊邪那岐　伊邪那美の神の御子樣である。伊邪那美命が根之國に往かれた後にお生れになつた神でありますけれども、伊邪那岐命が建國の經營を完成したいと云ふお考にて　伊邪那美命の御跡を追うて根之國においで遊ばされ、伊邪那美命を御覽になり、還つて禊を爲された時にお生みになつたのであるから、伊邪那岐　伊邪那美御二柱の神の御子で、須佐之男命も　伊邪那美命のことを御妣と呼んでゐらせらる。それ故に無論和魂も　須佐之男命の內部には有る筈でありますけれども、其の初めには和魂をば御發揚せられず、だ荒魂一點張りにて豐葦原の中國をお治めなされたのである。所が御自分の思ふやうに治まらなかつたものでありますから不平を起され、書紀には啼泣恚恨とあります。これは頰を膨らませた不平の御容貌を申したのである。其の泣き給ふ有樣は、青山を枯山に泣き枯らし河海は悉く泣き乾してしまふ激しい泣き方であつたから、皆それに倣つて豐葦原中國は、悉くの神がお荒びになつて、散散な狀態となり、惡い事や妖ひが起つて來たのである。そこで　伊邪那岐命が御立腹になつて神逐ひに逐ひ給うて根之國に往けと申されて御追放になつたのである。是により和魂の根柢を缺く荒魂は、現實界の主宰者たることも出來ぬことが永遠に確定した譯であります。所が此の前にもお話した如くに、須佐之男命は尙ほ和魂を心の底に有つて居らせられますから、根之國に參る前に高天原においでになつて、御姉神の　天照大御神にお目に懸かつて、お暇乞をなされて往かれやうと云ふ考から、高天原に參上られたのである。

尙ほ御注意を申上げ置きますが、斯の如く色色歷史上の事實のやうに又物語

風に書いてありますけれども、それを信念の眼を以て見るとなかなか雄大の信念であります。假にそれを言ひ表はすのに、理窟で無くして、古事記に書いてあるやうな色色の言傳への如くお話して參る次第である。

第二　參上、及罷下。

古神道では『參上』と云ふことと『罷下』と申すことと二つあります。『參上』は禪宗などで申す向上に當りまして、何でも貴い方に向つて行くことを申すのである。豐葦原中國から高天原へ行くのはお上りになるのであつて、之を參上と申して居る。（故に神社に參詣するといひ、お宮參りするといふ）。又豐葦原中國から根之國に行く時、（身罷といふ）又高天原から豐葦原中國に行く時には、罷下と申して居るのであつて、これは向下である。『罷』は『禍在』に通じて居る、故に貴い人の所へ參るときには參と申すべきで罷と云つてはならぬのである。

第二欵　天安河邊の誓ひにより萬世一系の治者定まる

第一項　御誓の前提

第一　素神高天原に參上らる。

さて高天原に於きましてはここに　須佐之男命がおいでになりましたについて、『天の安の河邊の誓』と申すことが行はれました。須佐之男命が高天原にお上りになる時には實に恐しい勢であつたさうで、須佐之男と申上ぐる御名は『すさぶ』から來て居り、『すさぶ』とは非常の勢を以て『荒れて進んで行くこと』を謂ふと本居先生は仰有つて居られます。さう云ふ譯で、此の神が高天原に參上る途中に在つた木石の如きものは悉く折れたり吹飛ばされたりして散散の有樣であつた。それ故荒神としての　須佐之男命を暴風に結び付け其の思想を以てお現はし申して居る次第である（荒魂及現實の勢）。高天原においてになる　天照大御神が之を御覽になりまして、此の神は和魂の神で在らせら

れますけれども、其の根柢に有つて居らるる荒魂を御取り出しになる御準備をなされ、男裝武裝して(併し盾の事は少しも書いてない)足蹈を爲された時の勢は實に偉いものであつた。其の勢を形容して申せばそれがため磐などか恰も氷の沫雪の如くに散つて此の世界にまで雪や霰の降る樣な有樣であつた(現實と理想は尙ほ表面に於ては矛盾することあり)。そこで　須佐之男命が暴風の如き偉い勢いで天に吹き上つて行かるると、天からは堅い磐が壞はれて雪の如く降つて來たのであるが、高天原の磐でありますから淸い眞白の破片となつて落ちて來たのでありませう。

第二　素神すら分を亂さるる御心なし。

天照大御神は　須佐之男命が非常な勢にて上つて來られるのを御覽になつて、『汝兄の命の上り來ますは分を亂る御心が有つてではないか』(即ち現實を以て理想を支配し、一切を現實力の下に置くことを許さぬとの大御心なり)とお尋ねになると、須佐之男命が申さるるには『決して然樣の邪心は無く、どこ迄も　御姉神樣が高天原の主宰者であらせられ、從つて此の大きな世界の主宰者であらせらるることは申すまでもない。自分はただ姙の居らるる根之國に罷からうと思つて、お暇乞に參つた譯である』と申上げ(即ち現實により理想を支配する心無きは勿論、荒魂を以て和魂を制御し、荒魂を以て理想とする意思も無く將に現實力をさへ離れて潛在的世界たる根の國に赴かんとするのである、との義なり)、そこで『お互に平らかな心持を以て誓をして御子を生まう』と仰有つたのである。

第二項　御誓の性質

第一目　此の御誓には深き意義在り

第一　表現の域に入つて行動することなり。

誓をなさると申すのは、天照大御神も　須佐之男命も、お互に御自分の偶然に執着せられずして、どこまでも平らかな御心持になられて、別天神並に神世七代の神神を表現せられつつ行動せらるることであります。　後世に至り下民の間に於きましては、此の『うけひ』から轉じて禁厭とか其の他種種類似の事柄

（盟神探湯あり、又禁厭呪詛、麻自許利、蟲物等あり）が起つて參りましたけれども、『うけひ』の本統の意味は、互に平らかなる心持に依つて神人合一の域に於て行動することを申すのであります。天照大御神を始めとして御自分に御執着なさる神様であらせられぬ所が古神道の最も尊い所である。天照大御神さへも神を御祈りになり、神に奉る御衣を御織りになられ、或は大嘗を食し召さるることが古事記等に見えて居る。然のみならず、天照大御神が卒先せられて、御自分の偶然を去つて誓ひにより表現的行動を爲さるが如きことは、古神道の特に尊い所であつて、他の宗教には見得ない所であります。

第二　高天原の理想と豐葦原の現實力との根本的結合を意味す。

斯の如くにして、天照大御神と、『將に豐葦原の現實を離れ根の國に赴かれんとする、然し未だ現實力より離れ終り給はざる　須佐之男命』とが、御共同なされて御子をお生みになることは、豐葦原中國即ち現國と高天原との結合である。此の二つの世界は相互に離れて對立して居る國で無く、相互に他のものを容れ合つて居り、高天原の中には豐葦原中國の元素を包容して居ることが必要であり、亦豐葦原中國は高天原の元素の現はれであることが必要である。曩に『根之國と根之國以外の間には密接の關係があり、互に離れて隔絶して居るものでなく、根之國の中にも他の世界の要素が來て潜んで居る、けれども亦混之國の要素が他の世界に來て現はれて居る』と申すことを、お話し致しました。それと同じ事に、高天原と申しても、實は豐葦原の中國に依つて存在し、且愈〻神聖になつて居る。又高天原の要素が豐葦原中國に現はるるに依つて、豐葦原中國が存在して居るのである。尤も　須佐之男命は未だ全く豐葦原の現實を離れ給はざれども、實は根之國に御追放の命令を受けておいてになるのであります から、假令　天照大御神と御共同にて御子をお生みになつた所で、須佐之男命の元素の方がいつも弱い劣つた地位に居らるること、是にては理想界現實界の結合並に關係が完了せざること、とは申す迄もありませぬ。又高天原と根之國と間接ながら多少關係の有ること、それに依つて想像せらるるのであります。

第三　高天原の和魂と豐葦原の荒魂との平らかなる結合を意味す。

此の　御二柱の神が御共同になつて御子をお生みになることは又和魂と荒

魂との結合てある。天照大御神の内部には和魂も荒魂も御存在になり、又須佐之男命の内部にも荒魂は勿論、其の根柢には和魂をも有せられて居る。けれども、それを内部にのみ潜在せしめずして、外部から之を保障し、外部から發揚することが必要であります。さうして外部から之を實行するには、高天原に於て此の　御二柱の神が共同して御子を生み給ふことに依つて實行せらるるのであります。天安河邊の誓ひは斯く深き意味の在ることでありまするが尚ほ此の御子を生み給ふ御働きが極めて面白いのであります。

第二目　御誓の實行

第一　情慾は元より性愛をも離れたる表現行爲なり。

(一)まだ高天原と豐葦原中國等とがはつきりと別れぬ時分に、伊邪那岐　伊邪那美命が御共同になつて國土並に神を生まれた御樣子が古事記に書いて在りますが其時には、此の　御二柱の神がお互に愛に依つて一心同體となられて『あな美哉可愛少男』『あな美哉可愛處女』即ち愛らしき男である愛らしき女であるとお互に仰有つておいてになる。(二)次に、主として豐葦原中國を御支配遊ばされ、後には根之國に往かれました　大國主神の御行動を見ると、如何にも人間らしい男女の間の關係を澤山に有せられて居ります。大國主神は高天原の神樣ては無くして、實に人間らしい神樣であつて、人間として男女の間の優美の關係を澤山生ぜしめ御子も數多くお生みになつた神樣であります。(三)けれども高天原に於ては、それと對照して見まするとと、少しも人間らしい所が無い。天照大御神と　須佐之男命が御子を生まるる所などは、如何にも雄大であつて、理想のみが獨り輝いて居る。誓に依つて御子を生まるることは此の外には決して無く、實にここだけてあります。大國主神等とは全く異り、誓に依つて表現者として、情慾などは少しも無く、所謂男女の性愛などを超越して、平らかな心持にて御子をお生みになつたのである。而かも天照大御神は女として御子をお生みになつたのでは無く、男の資格にてお生みになつたので、現に男の結ふ所の御角髮を結つて、男の姿にて武裝して居られたのである。男と男とにて御子を生まれた譯てあるから、男女の間の性愛とか情慾とか云ふことなどは毫も無

いのであつて、そこが面白い所であります。

第二　全く特殊の理想的方法なり。

愈御子を生むにつきましても、八百萬神が悉く御會合になり得る程であるから隨分廣い場處でありませうが、天安河原を眞中に挾みて、兩岸に嚴めしく對立せられて、御子をお生みになつたのである。　先づ　天照大御神が　須佐之男命の佩いて居らるる十拳劍をお受取りになつて、それを三段に折つて、天安河原の中の水の清い處で滌いで淨らかにせられそれを口に入れて蹙齧口をしかめて强く嚙むこと)に齧んで御吹きになると、其の吹出す氣吹の狹霧の中から三柱の比賣御子がお生れになつたのである。　又　須佐之男命が、　天照大御神の左の御角髮(男の結髮)に纏き給へる、八尺勾璁の五百津御統の珠を御受取りになり、天安河原で滌ぎ清めてそれを口中に入れられ、しつかり齧んで御吹出しになると、其の氣吹の狹霧の中からお生れになつた神が、　正勝吾勝勝速日天之忍穗耳命であります。『正勝吾勝』は『正しき哉吾勝ちぬ』と申す意味で、須佐之男命が邪心無き故に其の初にお誓ひになつた通りの御子がお生れになつたと申すので斯く御名を付けたのであります。

是等の御子をお生みになる有樣は、たださう云ふ言傳へで如何にもお伽噺の樣でありますけれども、其の裏に籠つて居る信念が大切である。少しも情慾とか性愛とか云ふことは無くして、唯理想に依つて表現的の行動をなされたものであることが分かります。　殊に　天照大御神の貴い左の御角髮からお生れになつたのが　天之忍穗耳命であり、其の次に　須佐之男命が　天照大御神の右の御角髮に纏いておいでになる珠をお受取りになつて、强く齧んで御吹きになると、其の氣吹の中から　天之菩卑命がお生れになつたのである。　次に　天照大御神の御鬘に纏かせる珠を受取つて、矢張り强く齧んで御吹きになると、其の氣吹の中から　天津日子根命がお生れ遊ばし。　又左の御手に纏かせる珠を受取つて、强く齧んで御吹きになると、其氣吹の中から　活津日子根命が生れられ。次に右の御手に纏かせる珠を受取つて、强く齧んで御吹きになると、其の氣吹の中から　熊野久須毘命が生れ給ふたのであります。つまり　天照大御神の御吹出しになつた　三柱の神と、　須佐之男命の御吹出しになつた　五柱の神と

合せて　八柱の神がお生れになつたのであります。兩部神道では之を八王子權現と申して居りました。

第三項　御誓の効果

第一　日神並に　素神の御子確定し、素神分を亂る御心なし。

ここに於て　天照大御神が仰せらるるには『前に生れた三柱の女子は　須佐之男命の劍に因つて生れた御子故、須佐之男命の御子であり、後に生れた五柱の神は、物實(ものざね)(物種の義)吾が珠に因つて生れた御子故、吾が御子なり』と仰せられたのである。(古事記、日本書紀本文による、日本書紀一書には異說を掲ぐ)そこで　須佐之男命が仰せらるるには『斯の如く自分の物實から女神が生れたのは、自分の心がやさしく荒ぶる心なき證據である、その分を亂る心持にて高天原に參上つて來たものでないことは明白である。此に因つて見れば自ら我勝ちぬ』と申されてお喜びになつたのであります。

第二　和魂を中軸として荒魂を具備せられ、現實界に理想を實現せらるべき御一系永遠に確定す。

八尺勾聰を物實として成りませる此の　正勝吾勝勝速日天之忍穗耳命は、天照大御神の和魂と　須佐之男命の荒魂の御結合を完成し、又高天原と現國の要素の結合を其の御一身中に成就せられたる神樣で、此の御方が將來愈〻完全に有らゆる要素を御持ちになつて、豐葦原中國に御自分を實現せらるべき神樣であらせられます。　天孫の降臨により高天原の理想を豐葦原中國に御實現になられんとする時に、中國の樣子を御覽になつたり談判を爲されたりする爲に中國においでになつた御方であります。けれども、此の神には善い事もあるが、又餘り態度の明かでないやうな事も見えて居る譯で、兎に角貴い系統を引いておいでになる神ではあるが、御兄神の　天之忍穗耳命よりも段の低い神であることは、此の時から見えて居る次第である。

第三　八尺勾聰は實に清明にして彌榮ゆる此の御一系を意味す。

尙ほここでお話して置きたい事は八尺勾聰の事であります。これは一つの

璁を申すのではなく、五百津御統の珠と申して、澤山の珠を聯ねてあるので其の本質から申しますれば實に清く明かきものが澤山聯ねられて一つになつて居ります所から、萬世一系の意義を有つて居るのであります。『やさか』と申すのは『彌榮』の意味で、愈榮える性質を有する清明なる珠を澤山に聯ねて一系になつて居るのである。　本居先生はどうも八尺と申すことはよく分からない。彌榮ゆるてふ意味でありさうにも見えるけれども、木などであれば斯く申すも宜いが、珠が榮えると云ふことはをかしいと仰有つて居らるる。併しそれは品物のみに拘泥爲さつた爲である、若し珠と其の主人とを離さずに見れば珠が榮えるものと見ても少しも差支無い。　珠は堅いもので別に永遠に增減するもので無いとしても、其の珠を何人が所持するか、如何なる珠として取扱はるるかと申すことに依り、珠にも彌榮えるものと榮えぬものとが在ると思ふ。　之を　天孫が絶えずお持ちになつて、其の　天孫の御系統が天壤と窮り無く彌榮えて行くことであつたなら、其の珠は彌榮の珠と申すことが出來る譯で、珠と、珠を持つて居る者とを、離して考へることは出來ぬ。　殊に此の場合の珠は、　天之忍穗耳命の成りませる物實でありまして、　天子　天孫と共に愈榮え行くべき性質のものでありますから、孤立せる物として考ふべきものではありませぬ。　木として、も亦其の如くで、一切の木又は一切の常磐木を皆榮木と申す譯ではなからうと思ふ。　如何なる神樣が愛用せられ如何なる行動と離るべからざる木であるかと申すことに依つて、始めて實木と申すことも定まるのではなからうか。　故に此の璁も三種の神器の珠も、孰も八尺勾璁と申し、萬世一系彌榮の意味を有することは疑も無いのであります。（斯う云ふ事は文字の上のみより解釋しようと致しますと解釋が出來ませぬ、是非共之を古神道の信念の大精神から見なければならぬと考へます。　又珠の事を解釋するに、佛敎の形式などに依つて彼れ此れ言つて居る者も在るやうであるが、それ等は勿論取るに足らぬのであります）。

斯の如くにして　天照大御神の左の御角髮に纏いていらせられた珠からも生れになつた　天之忍穗耳命は　天照大御神の正しい御系統の御子でありまして、今日では福岡縣の官幣中社英彥神社に御祀り申して在ります。

第二節　高天原の理想（治國の大精神）

高天原の理想の光を反省する爲に天石屋戸隱れの事について申上げます。ここで古神道の理想の中心が分かるのでありまして、此の中心に依つて總ての端が運轉して參るのであります。

第一款　天石屋戸隱の原因

第一　素神の亂行。

天照大御神の天石屋戸隱れの起りし原因は古事記を見ると色色の事がお伽噺のやうに書いてあります。天照大御神と　須佐之男命が御共同になつて御子を生まれた時に　須佐之男命が邪心無き所からやさしい女子神がお生れになつて、そこで御自分が勝つたと仰せられたのは宜いが、それより進んで大層お荒らびになつたのである。そこで大和民族が惡い事として認めて居つた有らゆる惡い事を爲されたのであります。（つまり、其の頃大和民族が惡いと思つて居つた事の精髓を、ここに書き集めたのでありますが、之を見ても大和民族は餘り惡い事をしなかつたやうに見えます、餘所に見るが如き非常なる慘酷の事は爲さなかつたものである。後になつて封建時代には磔刑のやうな慘酷の刑罰が行はれましたけれども、これは大抵西洋から入り來つたのであつて、西洋の本家本元を見ると、日本どころでなく、慘酷の刑罰や拷問などを行つた道具などか澤山あります、それには一寸想像の及ばぬやうな慘酷のものがあります。まだ西洋や支那の要素が入つて來ない太古の我國は無邪氣のものであつたことは　須佐之男命の爲された御亂行の記憶言ひ傳へ方を見ても分るのであります）。

其の御亂行を見ると　天照大御神の『大嘗（意富爾閇）食し召す殿に糞脫散し き』と申すことも書いてある。古事記には何でも飾らず隱さず書いて在りまし、そこが反つて尊い所であります。今此の處に大嘗につき說明致します、『大嘗』とは『新饗』と申すことで、『饗』は多くの者が集つて御馳走を食べることであり、『新饗』は新しく出來た穀物を大勢集まつて食べることである　そ

れが大和民族の昔からの心持であります。一同集まりつつ、一生懸命になり淨めて明き清き心持により一心同體となつて新しく獲た穀物を食べる神聖の式である。勿論神様の御力に依つて此の穀物が出來たのである、否な穀物それ自身が神様の現はれであり、其の神様の現はれを食べることに依つて各人が神様になつてしまふ。併し各人が澤山の神様になつて現はれて居つても、實は一つしか神様は無い。一つの神様が穀物になつて現はれて、大勢の人がそれを食べると一心同體になつて、自他の考などが無くなるから、其の平らかなる心持にて穀物を食べるのが新饗であります。所がこれは各地方で、あちら、こちら所所で食べるばかりでなく世界の全體の表現者として　天照大御神が眞先に食し召し、別天神並に神世七代の神様にも奉るから、之を大新饗と申すのである。それで豐葦原中國の表現者として日本に於ては　天皇が御卒先になつて日本國全體が擧つて普遍的に新饗を食べて神人合一し、上も下も一心同體になつて、一つの神の血が流れて居ると申す式を實行する爲に新嘗祭がある次第であります。故に新嘗祭は『大にへ祭』のことである。（然し今日の大嘗祭と新嘗祭とは多少違ふて居ります。一體『嘗』は支那の秋の祭に當る文字でありましたが、漢文字輸入後に古來の大新饗に當つるに嘗を以てし、やがて嘗を『なめ』と讀むこととなり、更に嘗に新の字を加へて新嘗祭と申すやうになつて來ました。所が　天皇が御一代に一度、御即位の後に行はるる新嘗祭を大嘗祭と申し、之をのみ『おほにへまつり』と唱ふる樣になり、『おほにへまつり』と新嘗祭とは異る樣になりました。是も支那の文字を用ひた爲め色色錯綜して參つた一例であります。大嘗祭は　天照大御神の頃から有る事でありまして　天照大御神さへ御自分御一己のみを絶對とせられずして別天神並に神世七代の神神と御一體となられ、其の表現者として御行動爲されたこれを示す一例であります。

新嘗祭は出來た穀物を、先づ神に差上げて後　天皇及人民が戴くことが大切でありまして、それが神嘗祭と違ふ所である。神嘗祭は神様に差上げることのみが主になつて居ります。

斯く　素神の種種の御亂行ありしも　日神は之を寛恕し詔り直し給ひしが、素神の惡しき態止まず轉た進むにより、遂に天の石屋戸に隱りましたので

惡しきことより善きことが生ず。

ある。

第二　矛盾が理想を發揚せしめ、理想の價値を自覺せしむ。

一　古神道の三つの世界の反省。

此の世界に高天原と豐葦原の中國と根之國との三つが在ることは、哲理上から申しても宗教學の方から申しても、動かすことの出來ない所であつて、極めて妙味の在る所であります。(一)假に一個人を取つて見ても小仕掛ながら能く分ります。一個の人格者たる太郎は如何なるものであるかと申すと(イ)勿論眼にも見え耳にも聞え、之に觸れることも出來るので、所謂五官(今日では或は七官とか八官とか云つて居りますけれども)による感覺に依つて之を識別することが出來ることは確かである。又それが無ければ太郎と云ふ人格の在ることも認められ得ない話である。苟も太郎と云ふ以上は、いつの時にか何れの處にか感覺の對象となる所のものが在ることを認めなければならぬのであります。(ロ)けれども此の感覺だけに觸れてそれを材料として分りまする太郎は實は太郎の一の部分に外ならぬ。ただ眼に見え耳に聞ゆるものだけにて太郎は在り得

(以上第十講)

ない。其の背後に於ける眼に見えず耳にも聞えない所の存在を確に有つて居る。過去の事實は過ぎ去つて今は眼に見え耳に聞ゆる事實ではありませぬけれども、其等の複雜なる事實が、現に眼に見え耳に聞ゆる太郎の背後に附隨して居るから、そこで太郎が特別の意味を有つて居るのである。(ハ)尙ほ其の外に、特殊の理想を描き信念を有しつつ行動する太郎と云ふ人格者が存在するのであつて、ただ眼に見え耳に聞ゆる所の存在が太郎の存在ではない。一方に於ては複雜なる無形的の事實がそれに伴つて居るから太郎であるけれども、亦他方に於ては動かぬ理想信念を有つて居ることを併せて見てそこで太郎である。今存在する太郎も、實は理想を骨子として、有らゆる事實を切り拔け有らゆる事情を活かして居るもので、而も斯かる存在が眼に見える太郎に依つて表現せられて居るに外ならぬのであります。

(二)ここに在る木について申しましても(イ)ただ眼に見え、物理、化學、或は生物學の研究の對象となるものだけに止まつて居りませぬ。(ロ)此の木は其の以外に尙ほ特殊の存在をして居る。此の木はいつ頃から此の大學の此の庭に生えて

居る木てありどう云ふ働きをして居つた(ハ)又之からも如何に發達し且つ如何なる働きをするか。其の他我我が其の木を見るとそれに依つて色色の事を思出し、ここに在つて、元、共共に心を同じうして研鑽した時の事を憶ふとか、或はそれに結び付けて種種の人生の事を考へるとか、色色の事がそれに關係して居り單純に或形として眼に見え或音により耳に聞ゆるだけのものてはありませぬ。

(三)其の點は人間に至つて愈〻明かてあつて、從つて其の人間が(イ)今迄どう云ふ經歷を有つて居つたと云ふ事、(ロ)加之其の內部に具備する活き活きとせる理想力、如何に人間は榮ふべき者てあると申す活生命が人格自身を定めて居るので(ハ)ただ秤に掛けたり、或は寫眞に撮つたりした所て、本統の人格がそこに寫つて參る次第てはない。宇宙全體を取つて見てもそれと同じてあつて、それはただ仕掛が大きいだけて、愈〻以て斯の如き所以が明確となる譯てあります。

(四)此の宇宙はただ我我の五官或は七官に依つてそれを材料として知られ得るものではありませぬ。たださう云ふ材料だけにて知らうとしたら、此の宇宙は實は何であるか到底分らない。これては我我の感覺を透して我我が造つて居る所の世界丈であつて、尙ほ其の背後に在る本統の世界即ち世界の本體世界の實體はこれでは分らない筈てある。「カント」なども我我の知識には實は制限があつて、我我の知識にて在ると思ふて居る世界は我我が描いて居る世界てある。其の背後に何か本物があるだらうが、其の外物それ自身外物自體は知識では分らないただ漸く實踐の方から知識よりも尙ほより多く其の實體に觸れることが出來るに止まると說いて居ります。成る程其の通りて、狹い知識だけては此の世界は到底分らないそれよりもつと貴いものを持つて行かねば此の世界は分らないのてある。我我が雄大なる眞面目を有つて出掛け、其の眞面目を或は知識として現はし、或は理想信仰として現はし、或は之を感情として現はし、種種の方面に公平に其の眞面目を現はし、偏らずに兼ね用ひて行きまするときには、此の世界夫自身に愈〻確かに觸るることが出來るのてある。尤も其の觸れて居る世界は我我が誤解して居る世界ではない、實はそれに由つて世界が表現せられて居るものてあります。唯一の世界であるが、色色の方面から唯一の眞面目を以て此の世界に觸れることが出來る。さうして見ると(イ)五官に依つて我我

が認め得る所の世界も間違は無いけれども(ロ)我我の理想に依つて認め得る高天原と申す存在も確かなる存在であると同時に、亦(ハ)我我が種種の心の働きに依りまして(現在眼にも見えず耳にも聞えませぬけれども)存在を認め得る所の根之國の事實を知ることが出來るのであつて、これも確かに特殊の實有實在に相違無い次第であります。

そこで古神道の三界の信仰は極めて意味の深いものであります。種種の宗教に於ても此の三つの世界を色色の形に於て言ひ表はして居り(基督教の天國、教會、地國、佛教の過去現在未來、又は地獄、娑婆、極樂等)中には古神道の高天原と豐葦原の中國と根之國の形式に極めて近い言ひ表はしかたもありますけれども、欲界、色界、無色界の如し)其の內容をよく調べて見ると色色の所に相違もあり缺點も在る。所が極めて簡單にして要領を得て居るのは古神道の三界の立方である。其の三世界中、高天原に於ては和魂が本になつて居り、然も其の和魂が、現國に於ける大切の要素である荒魂と立派に結合致しまして、其の結果お生れになつた神樣が　天之忍穗耳命で在らせられ、其の御系統の御方が高天原の理想を此の豐葦原の中國に實現なさる所に古事記日本書紀等の大切なる筋道が存在致して居るのであります。

二　矛盾によりて反つて高天原の本質を發揚す。

そこで(一)高天原に於ける　天照大御神は、常に和魂に依つて荒魂に依る行動をどこ迄も調節し、之を直し給ふことを主にしていらせらるるのである。和魂により荒魂が直されて益美しいものとなつて參ります。須佐之男命が荒魂の有らゆる濫用を爲されたときにも、『それは惡い心持て爲したのではなからう』と詔り直し給ふと古事記に出て居るのを見ても、それが分かる次第である。(二)所が此の高天原の和魂と、又現國に於て缺くべからざる荒魂とは一方に於ては相互に平らかな結合をなす、而かも和魂が本であり荒魂が末であると云ふ關係を以て結合する。(三)けれども尙ほ他方に於ては、荒魂と和魂とが矛盾反對する方面があることを古典に傳へて居ります。須佐之男命が高天原にお上りになつて、色色亂暴を爲された爲に　天照大御神が試に天石屋戸にお隱れになつたのは『荒魂と和魂との矛盾』であります。併し其の矛盾に依つて、和魂の性質、

即ち高天原の性質が愈〻以て明らかになつて參つたのであります。一體世の中の事は總て矛盾であり、理想すらもただ平靜に高天原に立て籠つて輝いて居るものではなく、現實界の力との矛盾に打勝つ努力を主にして居ります。其の矛盾に打勝つ努力に依つて平靜不動なる高天原の理想が愈〻明らかになる。天石屋戸隱れは貴き二神の和魂と荒魂との矛盾に依つて生じたものであるけれども、而かもこれを解決せんとする努力と共に、是に由つて建國の大本が明確に定まつた次第である。

第二款　天照大御神の高天原に於ける地位並に之に對する關係

第一　總說。

天照大御神が天石屋戸にお隱れになりますと(一)高天原が眞暗になつてしまひました。乃ち高天原が今まで明るかつたのは　天照大御神がおいでなされたからで、高天原は漠然と明るいのでなく明るいのはこれを表現する神の存在に依つて認められ得るものであると申すことがここで分つた次第である。國家は即ち普遍我であつて、普遍我は不滅の生命を有して益〻向上し發展すると申しても、ただ空しくさう云ふ事はなく、之を表現する御方があつて、有らゆる表現者を率ゐていらせられねば斯樣なる事は有り得ないのであります。皇國が立派であることも　天皇の御光りの御立派であることを意味して居るので、其の事は天石屋戸隱れに依つて分る次第である。(二)而かも高天原が暗くなつたらを豐葦原中國迄も暗くなつたので　天照大御神は高天原のみならず豐葦原中國を統べ括つておいでになる御方であり『高天原を統べ括らるる御方は、即ち全世界を統べ括らるる御方である』ことが分つたのであります(三)又　天照大御神が天石屋戸にお隱れになつたに依つて豐葦原中國に於ては有らゆる禍が起つて來たのである。古事記に『狹蠅(さばへ)如す云云』とある。『狹蠅』は五月頃の蠅の如く澤山と云ふ意味であります、『さ』は五月のこと又『さつき』とも申し、田植は五月に致しますから稻の苗のことを『早稻(さなへ)』と謂つて居り、或は早苗を田に植うる者のことを『さをとめ』などと謂ふと本居先生は詳しく說明し

て居られます)。恰も五月の蠅が澤山に涌くが如く萬の妖が簇り起つたと云ふことが書いてある。要するに『豐葦原中國も　天照大御神の御光に依つて輝いて居るので、如何なる人が、豐葦原中國を治めるにも　天照大御神の御光を離れては之を治むることが出來ぬ』と申す意味であります。併し高天原はさすが高天原でありますから萬の妖が起るなどと云ふ氣遣がなく、高天原に於ては八百萬神が美しく會合せらるることになつた次第である。

そこで今其の高天原の神神の集會の事をお話する前に先づ高天原の一つ一つの事について分析してお話し申上げ、次いで神神の集會の事に及ばうと思ひます。

第二　高天原は　天照大御神を中心とする本來の一心同體の世界なり。

一　上と下、照ると照らさるるとは共に離るべからずに必要なり(本來相待つ)。

高天原は本來の一心同體を其の存在の性質と致して居る世界でありまして天照大御神は照り輝いていらせらるる御方である。所が(一)『照る』と申すことと、『照らさる』と云ふことは實は離ることの出來ぬものであり、照らさるるものが無ければただ照ると申すことはありませぬ。而して其の『照る』と申すことを取つて見ると、照ることは他に光を與ふることをいふ。然るに光を他に與へずして自分自身が輝くことは、輝くと申すこと夫自身に於て矛盾した話である。他を照らすことに依つて自分も照ると云ふ特殊の性質を有し得る次第である、照ると云ふ自性は他のものに光を與ふることに依つて始めて現はれて來る譯である。所が(二)『照らされる』方はどうであるかと申すと、照らされる方も照らさるるが故に各々の眞の特色が現はれるのであつて、若し照らさるることがなかつたならば、どう云ふ形を有つて居るものであらうか、如何なる色を有つて居るものであらうか、各自の特色は現はれ得ないのである。否な特色を現はし得ないと云つてはまだ語弊があるので、實は特色夫自身が無いことになる。光を受くることに依つて始めて自性が在る。又萬我萬物が自分の特殊の性質を有つて居りまするが故にそれを照らす光も益々美しいので、萬我萬物の自性が無かつたならば、假令之を照らしても殆ど意味の無いことになつてしまふ。照らすことに依つて萬我萬物の神聖なる色合が現はれ、又其の神聖

なる色合に依つて照らすことにも特殊の意味を有つて來る次第であります。これは(注意)物理學上の光線論などとは違ふのであつて、所謂光線について有し得る我我の感じを申すのであります。從つて此の深き感じにより見得る意味深き光線に模らへて　天照大御神の御德を申上げて居る次第である。

二　上下共に世界の表現者なり。

斯の如くにして高天原の明るいのは　天照大御神の御光に依つて明るいのであるが、其の御光は　天照大御神の御自分に萎縮して私有せらるる御光でなく、世界の光として表現せらるる御光である。表現神としての御光である。天之御中主命の如くに本體神としておいでになる御方ではなくして表現神であり、其の御子孫で在らせらるる　天皇も亦表現者におはします次第であり、又天照大御神に依り照らされて始めて特色を有して居る萬我萬物も、世界の萬我萬物であり、まして自分だけに執着して居つては特色はない。自分に拘泥せずに喜んで　天照大御神の御光に照らさるることに依つて銘銘の特色が現はれて來るのでありますから、自分を空しくして居る根據の上に特色がある。世界の萬我萬物は皆自分を互に差出し、それに超越して居り、表現的の存在をなしつつあることが高天原の精神である。

三　以上により始めて『本來の一心同體』を見得るなり。

天照大御神始め其の總攬の下に立つて居る有らゆる存在も、皆自分を超越して一心同體として存在して居ることが、高天原に於て理想的に現はれて居る次第である。即ち　天照大御神が天石屋戸にお隱れになつても、高天原には喧嘩も起らず、妖も生ぜずして、尙ほ立派な調和が存在し　八百萬神が快く神集ひをなされ、一心同體として　天照大御神を御呼出し申すやうに努められた次第であります。

第三　高天原は　天照大御神の總攬の下に產せらる。

高天原は　天照大御神の總攬の下に造られつつ在る所であり　天照大御神の御光があるが故に、高天原てふ特殊の理想界が存在するのである。此の事は詳しく申しますると複雜になりますから極めて簡單に申上げます。

一　世界は根本的信仰の所產なり。

一體度度申上げまするが如くに、此の世界は實に根本的信仰の所造所作に外ならぬ。(一)先づ淺い五官の感覺の世界について見るに此の世界は實は我我の感覺を材料として認められて居るが、綠のもの紅のもの、大きいもの小さいもの等色色のものが『世界それ自身』に於てさう在るかと申すと、そこは中中むづかしい。世界それ自身に於て、我我の感覺を離れて、さう云ふ綠のもの紅のもの、などは決してない。されば我我の感覺は宜い加減の嘘をついて居り、出鱈目に斯かる事を描いて居るかと云へば、決してさうでは無いのである。結論を云へば我我の感覺も尙ほ此の世界の實在夫自身を表現して居る。感覺は感覺の程度に於て此の世界の實在を表現して居るものである。故に感覺を離れて世界を說くことは出來ぬけれども、それは我我の勝手に造つて居るものでなくして世界の實在の表現であると云はねばならぬ。在來哲學上にてもこれは難問となつて居りますけれども表現を以て說けば、十分それにて、事が足りて居ると思ひます。(二)併し五官だけでは不十分であつて、五官と理想信念と其の間に在るものと悉く眞面目を以て出掛けなければならぬので、それ等に依つて表現せられて居るものが此の世界の實在であり、感覺に依つて表現せられて居る實在、それ等を統一して居る實在尙ほそれ等の根柢となつて居る理想信念に依つて居る實在と云ふやうになつて居り、是等は總て實在であります。故に此の實在は一つものでありながら然も皆それぞれ自分の方面に依つて唯一の實在を表現し皆實在其のものであります。(三)けれども此の間に根本と否との區別があります。理想信念に依つて表現して居る實在は動かない根本的の實在であり、統括的の實在であり、五官に依つて表現せられて居る實在は淺薄のものであり、卑近のものであり從つて被統括的のものである。勿論之はどちらも必要であつて、本に依つて末が活き末に依つて本が活き互に相待つて存在するものでありますけれども、其の間に本末の差がある。

二　根本的信仰とは和魂に歸一せる心持よりいふ、之を客觀的にいへば、即ち天照大御神なり。

斯樣な次第でありますから、此の世界は我我の立場から申しますと、眞面目の表現たる、我我の根本的の信仰を本として、其の統括の下に存する意識に依つて

之を存在せしめて居るのであつて、我我の根本的信仰を除いてしまつたならば世界の有無は分らないので、世界の有無などを談ずる資格が無いのであります。そこで我我の立場から申せば世界は我我の根本的信仰の所産であります。我我の根本的信仰は各人に依つて澤山あるものでなくして一つのものである。即ち　天之御中主神(眞面目)の最高の表現であらせられ、他の一切を統括せらる、る本たる　皇産霊神の産霊の働きに依つて世界が存在して居るのであります。そこで、それは哲學上としても到底動かすことが出來ぬ所であります。其の　皇産霊神と御同體であらせらる、る完全なる現はれは即ち　天照大御神である。此の　皇産霊神を高天原に於て我我現人の根源として見奉るときに、ここに　天照大御神をお見申すことが出來るので、此の　天照大御神に依つて高天原は存在して居る次第である。我我銘銘は、各〻根本的の信念に依つて此の世界を存在せしめて居りますけれども、其の根本的信念は一つである。根本的信念と申せば主觀的に見たものでありますけれども、之を外に置いて客觀的に見るときは、それが即ち　天照大御神と別のものではない次第である。斯の如き根本的の信念の土臺の上に、我我がそれを種種の眞面目として現はし働かせるのであり、此の世界の種種の知識或は感覺等に依る實在が認められ、それを我我が在りと信じて居る次第であります。

第三欵　被總攬神も各〻高天原の性質を定む

第一項　八意思兼神と理智

次に高天原に存在する諸神の高天原に於ける地位並に性質を述べまするが先づ　八意思兼神(やごころおもひかねのかみ)より始めます。

第一目　御性質

第一　八意思兼の義。

『八意思兼(やごころおもひかね)』と申すは、澤山の事を一時にお考へになるとの意味であつて、一つの事に偏つでお考へになるのでなく、四方八方の有らゆる事を皆統べ括つてお考へになることであります。一言て申せば即ち眞空中道を旨とする思惟であ

る。

第二　信仰と離れず、産靈を本質となす。

古神道に於ては此の神は　高皇産靈神の御子であらせらるることになつて居ります。勿論　高皇産靈神が生理的の關係にて此の神をお生みになつたのではないが、積極的なる産靈の直接の系統を引いておいでになる神であります。故に(一)　八意思兼神の有つて居らるる智慧は、物を破壞する智慧でなく、物を生ぜしむる所の智慧であります。(二)實は、知識は生活の一つの道具である。これには小さいものと大きなものとありますが、今日知識知識と云つて居るのは小智であつて、古神道で謂ふ知識は大智であり、之を佛教の語で申すと大般若深般若に當る(尤も佛教の大般若は空觀に重きを置き、古神道は産靈より出發するが故に消極と積極の差がある)。これは感覺知覺のみならず理想信念に基き、其の現はれとなつて居り、又理想信念を刺激する資格ある智慧と申すことであります。要するに知識は理想信念の根據と離れられぬ生活の道具である。其の道具を理想信念に依つて統べ括つて間違無く用ひて行くときには生活に缺くべからざるものであります、けれども、若も理想信念が薄弱であつたならば、知識と云ふ道具は往往反つて生活を害することになる。恰も大砲は敵を征服する爲の道具でありますけれども、敵味方の地位をも辨ぜずして用うるときは、往往反つて味方を打つやうになると同じであります。今日の知識は、どうかすると信仰と相離れ且必しも創設的のものでなく、知識がある爲に反つてふらふらする樣になつたり、物を害したり、創設や向上を妨げるものが多多あります。所が古神道では智慧は　皇産靈神の系統を引いて居り、どこまでも産靈に重きを置いて居るものであります。

一體智慧と申すものは客觀的の立場から物事を眺めるものである。人間は自分では大きいつもりて居つても、智慧を以て客觀的に人間を見ると如何にも小さなものに見える。併し恰も此の智慧は、之を用ひて小さい處に居りながら大きなものを征服する道具であり、不完全なる人間が智慧を使つて益々完全になり得るのである。故に智慧自身はむづかしいものではないが、其の用方がむづかしい。さう云ふ考で智慧を磨くことが大切でありまして、ただ智慧ばかりを

磨いても役には立ちませぬ。學校に入つて勉強するのは以上の意味で智慧を磨く爲でありますが、實は元より偶然なる自己を本位として、自分が出世をする爲とか、或はそれを以て他の者を自分の都合の宜しいやうに自分の下に置く爲のものでなく、益〻大生命の表現者として向上發展する爲に　皇產靈神の直接の現はれである。八意思兼神に合一する修養をなすのであります。

第三　知識により向上發展が生ずるに非ず、向上の具として知識が存するなり。

そこで一の例を採つて、知識の地位を辨へずして之に偏るときは、人間は寧ろ知識の無い方がましてあることをお話し申し上げます。例へば(一)一寸天文の講釋などを聽き『太陽は物質の集まりてあつて絶えず「エネルギー」を發散しつつ在る。故に太陽は段段減つて小さくなつて行き、遂には今日の作用も出來ぬことになるに相違ない。其の元素の「へりうむ」の電子は絶えず發散して有らゆる方面に飛んで行きつつある。又地球は規則正しく回轉して居るが、何時他の星と衝突して元の星雲(はぐゆも)に還つてしまふか分らない』と云ふやうな事を考へ、夫が爲に『我我が仕事などを一生懸命にするのは馬鹿らしい、幾ら向上發展と云つた所で、地球夫自身が壞滅していしまつたら人間等は勿論滅していしまふに相違無い結局自分の勝手の事をする方が宜い、眞面目に向上發展などを思ふのは迷想である』と考へ込むが如きは知識の性質を辨ぜずして、知識に誤られたものであります。何故なれば、一體然樣な事を考へる知識は如何なる性質のものであるかと申せば、これは向上發展の爲の知識である。然るに其の向上發展の爲の知識に依つて、反つて向上發展を斷念することは知識の性質を誤り、其の用方が惡いからであります。又例へば(二)醫學生なども初めて醫學を學び始めたときには、人間の身體の組立が實に複雜にして危險なものであることを知り、うつかり大きな聲を出すと肺の臟が破れはせぬかと恐懼する、或は外には恐しい黴菌が到る處に散在することを心得て、うつかり外出も出來ぬ心持がするのと同じである。

若し知識の職分性質を明らかにするならば、太陽に對して有する知識を利用し、又明朝も太陽が出ることを信じて、仕事を熱心にやるやうになることは必定

てある。其の他太陽の種種の働きを辨へて居るときは、それを前提として日夜其の知識の下に仕事をして已まぬことも確てある。今日我我が太陽に對して有つて居る科學上の知識などは實に些少のものであります。それ故に第一二年生の醫學書生の如く何事も怖く思ひますけれども、もつと進んでそれを健全完全にすることが出來能く之を利用するに到るならば、人間などは全く今日とは違つて能力を有する者となり、今日思ひも寄らぬ立派なる働きが出來るに相違ありませぬ。

第四　結論。

要するに我我は向上の爲に知識を利用する者であり、又生活に利用する爲の知識であつて、それに征服せられてしまふ爲の知識ではない。『產靈の働きを行ふ爲の道具となるべき知識である』ことをどこ迄も念頭に置いて、其の知識に依つて益世界を立派に造つて行きつつあるのである。又斯くして造つたものは世界の本統の實在を表現して居るもので、矢張り世界自身が本統に造られて居り、世界實體に變化を及ぼして居るので、空しい創設ではなく出鱈目に造つて居るのでなく、ことを辨へて居らなければならぬ次第である。

一體我我が物を造るなどと言つて造つたのは、卑近の創造に過ぎずして根本的に造つたのではありませぬ。『平らかな心持にて、自分は造つたかどうか知らぬけれども、眞面目に依つて宇宙に變化を與へて居るものが、それが本統の產靈であると考へます。我我の動かない理想信念に依つて、自分が造つたか造らぬか知らずして、而かも宇宙を造つて居る働きが、本統の根本的の產靈の働きである。人に物を與へるにも、與へる積りて與へたならば最早神聖のものでなくなつてしまひますが、特に與へると云ふ蟠つた心持が無くして、平らかな心持にて與へるときには、それが始めて活きて來る。從つて世間の風習でも皆さうであつて、人に物を贈るにも進上、進呈、拜呈などと申し、敬つて贈つて居り、商賣人なども物を賣るときに、此の品物を賣つてやつたら買ふ人に都合が宜からう、有難く思へと言つて賣つたら、商賣は出來ぬ『どうも有難うございます』と云つて賣ることこそ眞の商買であり又買ふ方も『有難う』と云つて買ふのが本統であります。夫と同じことで、自分が產靈の働きを行つたなどと思つたら、もう產靈では

ありませぬ。神聖なる信念の現はれであつて、それが自ら産靈になつて居るものが最も貴いのである。我我が　天照大御神の御光を心の中に有つて居つて、絶えず知らず識らずの間に大きな産靈の働きを信念に依つて行つて往くのが、根本的の産靈の働きであると思ひまするし、知識はどこ迄も之に役立つ爲の第二段以下の存在であると考へます。

第二目　古神道の見たる眞面目と理智

尙ほ古神道に認めて居りまする眞面目と　八意思兼の理智の關係の事を申上げて置きたいと思ひます。

第一　眞面目は理智と離るべからず、理智を包容するを要す。

一體眞面目は理智と離ることが出來ぬものであり、眞面目は思ふ存分に理智を含んで居らねばならぬ。そこで眞面目を分析するときは之をどこ迄も理智に並べ立つることが出來る譯であります。故に其の理智を包容して居らぬ信念は迷信となるか、或は淺い信仰となつてしまふ。我我がこゝで古典の精神を言葉に依つて研究して見ましたり、哲理に依つて分析したりすることも、矢張り其の必要からであります。理智の方から之を鍛へて置きませぬときは、信念がどうかすると不健全の方面に走たり或はどつしりと落付かない虞がある。

第二　眞面目は理智以上のものなり。

併し眞面目は理智以上のものでありまして、理智はただ眞面目を深からしむる方便であり、理智は眞面目を證明するものに外ならぬ。されば世間でも不都合の事をしたと責められると辯解をするが、辯解をするには色色と理窟を言ふ。何ぜ理窟を言ふかと申せば眞面目の在つたことを證明するのである。勿論理窟が眞面目ではありませぬけれども、理窟が相當に立てば『成る程それでは眞面目であつたら』と云ふ證明となる譯である。併し理窟に分析することが出來るから、理窟が眞面目であると考へては間違である。ただ理窟は眞面目を表現し、又理窟は眞面目を證明する場合があると云ふに過ぎぬのであります。故に理窟に依つて眞面目が出來る譯でなく『眞面目と云ふ事實』が何を措いても貴いものである。

第三　眞面目は必ず貫徹せらる、理智は節節其の形を變ぜねばならぬこととなる。

それ故に理智の方は場合に依つてそれが貫徹せられずして、節節其の形を變ぜねばならぬ事があります。古事記に依つて見ると　八意思兼神の御考に依つて　天照大御神が御行動さされてもそれが貫徹しないで、或は右からやつて見たり或は左からやつて見たりせられた事があり、理智から生じた事は色色に變へてやつて見ることを必要と致します。けれども眞面目は必ず其の儘貫徹せらるるものである。有らゆる矛盾反對に出遇つて、どこ迄も夫を貫徹して本來自分が描いて居つた通りに實現することの出來るものが眞面目である。高天原の理想を、有らゆる矛盾失敗を轉じて、豐葦原中國に實現するものが眞面目であります。けれども理智でありますると、それを一度行つて見ても、うまく行はれないで、更に改めて行ふといふこともありますから、それに由て考へても理智が眞面目より段階の低いものたることが分る次第である。

第四　理智は尙ほ客觀的の形式なり、眞面目は一切なり。

又もう一つ他の方面から申しますると、本統の眞面目の域に於ては客觀的形式のみならず一切を含み、理智より緣が遠くなつて來る。例へば　神前に於て或は　天皇陛下の前に於て、有難いと思つて居るときには『ありがたさにぞ涙こぼるる』と申すだけである。理窟は腹の中から一切を統一して涌いて來るものであるけれども、一歩退いて心持を冷かにして考へるときには、幾らでも理窟が出て來るものである。故に理窟は一段下つた處に出て來るもので、そこでは色色の批評の心持などが起つて來る。神樣にお辭儀をして居るときには、だ有難いと申す心持だけであるが、一段下つて冷かに考へるときには、神主が何をして居るか、神前に何を御供へ申して在るかが分る譯であり、それも必要ではあるが、一番大切なものは眞面目である。人間がひどく腹を立てたときでさへも理窟はあつても何とも言へなくなつて默つてしまふやうなもので、まだ理窟を言ふときには心が一段冷かなる所に下つて居ることを示して居る譯である。一段も二段も三段も下り得る餘裕の存することは、眞面目には必要であるが、眞面目夫自身の立場は、下つた冷かの理智でなく、最上段の言ふに言はれぬ一切を

一切として活かして居る所にある。古事記には少しも理窟が書いてありませぬが、そこが眞面目たる所以である。理窟を書いたものであると、一遍か二遍見た所では如何にも面白い樣に思ふけれども、毎日毎日讀んで居ると理窟には飽きてしまふ。例へば此の理窟は差障りがあるとか、これでは狹いとか云ふ感じが起つて來る。けれども古事記等は本統に有難い眞面目だけを傳へて居るが故に、殆ど其の大さが分らない次第である。

第五　結論。

斯かる古事記等の所傳の中にて理智を主にしておいてになる神は　八意思兼神と申して、これは貴い神てありますけれども　天照大御神の御家來である。古神道の和魂の本源であらせらるる　天照大御神は獨斷などは爲されず、從つて理智を排斥せられずして、大切の事の有つたときは、いつも　八意思兼神に思はしめて然る後に御行動になりました。八百萬神も亦其の通りで、大事の有る場合には、いつも　八意思兼神をして思はしめて、其の智慧に依つて御行動になつて居ります。そこで古神道では智慧をも尊んでは居るが、併しこれは和魂の

從屬的のものと見て居る所が大切の點であります。

第二項　其の他の主なる神神

第一　伊斯許理度賣命と鏡。

次に高天原に於きましては　伊斯許理度賣命と申す神が御存在になります。此の御方は如何なる神かと申しますと『度賣』とは『老女』と云ふ意味であると本居先生は仰せられて居られます、女の神樣であります。古神道にては、男の神も女の神も御同列にお置き申してありますが、他の宗教は古神道のやうに公平になつて居りませぬ。日本て男と女との區別をやかましく付けたのは、支那の思想が入つて來た結果であります。伊斯許理度賣命は鏡を御造りになつたので『伊斯許理』とは『鑄重』の義である。從つて此の神の御性質を明らかにするには鏡のことを申し上げねばならぬ。

さて鏡は『赫見』であつて日光を其の儘映すものであると申す說がありますが現に天石屋戸隱れの時にもさう云ふことがあつたのであります。併し言

葉のことは暫く之を措き、此の鏡は古神道に固有のものであります。劍や珠（珠數）は意義こそ異れ他の教にもあつて、佛教や「マホメット」教などにもありますが、古神道にては特に鏡を大切なものとして居る。其模範を八咫鏡と申して居ります。其の『ヤタ』につきては昔から色色說があり、本居先生は『ヤタ』とは『八頭』と云ふ意味であらう（或は『八咫』とか『八尺』とか申す大さの意味であると云ふ說もあるが）鏡に八の尖つた頭があるから八頭と申すのであらうと言はれて居ります。此の八頭につきても、或は佛教の八葉蓮臺などと申して、蓮華が八葉出て居る所に引きつけ、鏡の八つの頭は華瓣であつて中の處が蓮臺であるなどと說いて居る。然しそれは佛教者のこぢつけた說である。或は八頭は太陽の光り輝いて居る所の光線を現はして居ると云ふやうな說もあります。私の考では、『ヤタ』と申すのは、鏡に對する者と離しては解釋が付かぬ、一人にしても鏡に向つて色色に寫すときには同じ人間が同じ鏡に色色に（即ち八頭に）寫りまた同じ祖先から出た所の何人が寫してもただ八人の頭に限らず、彌多くの人が寫しても彌多くの頭が寫るのである。各々が寫しても色色に寫るが

而かも唯一人であり、澤山の人間が交々鏡に寫つても而かもそれは唯一の御先祖樣の現はれに外ならぬ。其の事は　天孫御降臨の時に、天照大御神が『此の鏡は我が御魂として齋き奉れ』と仰せられたことに依つて解釋すれば明かであると思ひます。後の御方が　天照大御神を拜さうと思ふときには、此の御鏡を拜すれば、其の中に　天照大御神がちやんと其の儘御存在になる。所が御鏡に寫つた者は何の御方であるかと申せば、實は御鏡に對立して居る所の子孫に外ならぬ。如何なる子孫が代るに其の御鏡に向つても、天照大御神がちやんとそこにおいでになるのである。所が御鏡に寫つた所の者が信念を以て對するときは、皆天照大御神になつてそこに顯はれて來るのである。して見ると、古神道の信念を以て、御鏡に對するときには、我我は皆一つの大なる人間であることになるので、千萬人在つても、それが唯一の信念を以て、御鏡に對するときには、皆唯一の　天照御大神の現はれ夫自身に外ならぬ。皇室に於かれましては固より其の通りでありますけれども、啻に　皇室のみに止まらず人民一般とでもさうであり、世界の人間が皆さうである。否な人間のみならず萬我萬物

皆さうであると思ひます。故に此の御鏡には深い感じが籠つて居るのであります。故に其の形などを彼是申すは末の論で、鏡夫自身の働きが有らゆる姿を其の上に現ぜしむるものであると云ふ風に見ねばならぬのであります。

第二　玉祖命と玉。

次に　玉祖命と申す神は八尺の勾璁を御造りになつた御方でありまして、『八尺』は彌榮にて彌榮えて行くことを表する所の璁である。而かも(一)天照大御神が御身を離し給はず左の御角髮(男女を超越して居る處)に纏いておいてになつた八尺の勾璁の實質よりしては萬世御一系の天皇の御祖先様なる天之忍穗耳命がお生れになつたのであり、(二)天石屋戸隱れの時の八尺の勾璁は萬世一系の天皇が常に御身邊を離し給はず、今日迄、否永遠に宮中に傳はつて居る所の神器であつて、玉祖命が御造りになつたのであります。

第三　天兒屋命と太祝詞。

又　天兒屋命と申す神が在ります。此の神は天照大御神が天石屋戸隱れの時にも、在來遊ばして居つた事に基いて、太祝詞事を請ぎ白した神様であられます。祝詞は又宣說言(詞)とも云ひ、『ノリ』とは話をし說明する言葉で、神様に申上げるのであるから、之を尊んで『太』と謂つて居るのであります。此の尊い祝詞を申上げたのが　天兒屋命で、此の神は　八百萬神に卒先して　別天神並に神世七代の神神及其の活きたる御一體たる　天照大御神をお祭りになることを權限とせらるる神となつて居ります。

第四　布刀玉命と太御幣帛。

次に　布刀玉命と申す神が在りまして、此の神は太御幣帛を奉つた神であります。太御幣帛とは太玉串と申すことから來て居り、玉串とは手向串と云ふことで、賢木(榊)を神に奉る手向から轉じて玉串となつたのであると云ふ說があります。此の玉串を差上ぐることを御受持になつて居つた神が　布刀玉命であります。

第五　天手力男神と手力。

又　天手力男神と申すのは、文字の示す如く手力を具へておいでになる神であります。高天原夫自身にも、固より　天照大御神の和魂に從屬し愈之を發揚

する手力（腕力）の神たる　天手力男神が居られ和魂を實現する爲に、手力を振はるる神でありました。これは信濃國上水内郡國幣小社戸隱神社にお祀り致してあります。

第六　天宇受賣命（あめのうづめのみこと）と調和。

尚ほ　天宇受賣命と申す神様がお在りになります。此の神は又　大宮賣神（おほみやめのかみ）とも申上げて調和に依つて總ての禍を轉じて幸となさる神であります。大殿祭の祝詞の終りにも、此の神の御德をおたたへ申してある。『天宇受賣命はしかじかの御神德を有つていらせらるる、我我は此の神の御德に依つて、過ち無く皇室に御仕へ申すやうに致したいと存ずるから、何卒それを助け成就せしめて下さるやうに御願ひ申す』と申すことが此の祝詞の主意であります。『宇受賣』とは『强女』であると云ふ說もありますが、私の考にては『珍女』と云ふ意味に解する方が宜いと思ふ。決してお轉婆の行ひを爲された神様ではなく、柔能く剛を制する調和の神であらせられずして、優美の女神でありますから『珍女』である。强い女の標本にはあらせられと申した方が穩當であると思ふ。今次に　大宮賣神に申し上げる祝詞を拜讀致します。

詞別白久。大宮賣命登御名乎申事波。皇孫命乃同殿能裏爾塞坐氐。參入罷出人能選比所知志。神等能。伊須呂許比阿禮比坐乎。言直志和志坐氐。皇孫命朝乃御膳。夕乃御膳供奉流。比禮懸伴緒。褌懸伴緒乎。手蹟足蹟不令爲氐。親王諸王諸臣。百官人等乎。己乖乖不令在。邪意穢心無久。宮進米爾進。宮勤爾勤氐之米。咎過在波乎見直志聞直坐氐。平良久氣安良久氣令仕奉坐爾依氐大宮賣命止御名乎稱辭竟奉久登白。

第三項　日神を中心とし主もなる神神を標準として互に自他を神化すること

第一　高天原の神神は皆現國に實現せらるべき御方なり。

是等の神神は　天照大御神の天石屋戸隱れの時にそれぞれお働きになつた神神でありますが、亦　天孫御降臨の時に　天照大御神の思召しにより豐葦原中國に天降られて　天孫の御建國を助けられた次第であります。故に古神道の是等の神神は現國に實現せらるべき根本的の神神である。

第二　祝詞は相互に自他を神化する心持を宣ぶるものなり。

一　高天原以來の祝詞。

高天原に於ても既に神を祭り、祝詞事を白し上げ、太御幣帛を奉る事がありました。祝詞事の中には二つの意味があると本居先生も言ふて居られます。即ち(一)一つは神德をたたへて、神樣は斯樣なる御方であると申し、そこに居る一同の者がそれを聽き、成る程神樣はさう云ふ御方であると反省する爲である。(二)又一つは神樣は斯かる御方であるから、愈々さう云ふ神樣におさせ申さねばならぬと申すやうに、我我の心持に依つて有難い神樣を愈々有難くして行き、益々お助け申すことを心の內部に於て反省する爲である。

古神道は產靈を主義として居ますから、何ものに對しても、其の者の惡い所を見て責むるのが主義ではない。砂糖は甘いものであるから甘くなければならぬと申す具合にどこ迄も砂糖の甘い所を發揚せしめ、其の中の惡い雜り物は取除けて行く。人間はどこ迄も人間として尊び、神樣はどこ迄も神樣として崇めて行く。實に自分でなく、對手を美化するが爲に、我我が心の內に、砂糖は甘いものである、人間は斯う云ふものである、神樣は如何なる御方であると反省するのであつて、自己の利害の爲に神樣にお願ひ申すことよりも此の方が大切である。己のみでなく、己に對するものをどこ迄も美化して行くのが古神道の精神である。

二　自他を神化せしむる現國の美風。

現に今日に於ても其の通りである。先づ　天皇は如何なる御本質を有せらるるかを反省することが、天皇を見奉る要件であると同時に、斯かる心持にて眞面目に　天皇をお輔け申すが故に、天皇が固より有せらるる御光を愈々御發揚遊ばし、雪に明君たらるるに止まらず神皇たる隨神の本質を實現せらるる譯

である。例へばお日様は如何なる働きを爲すものであるかを知つて、其の働きが完全に働くやうに、我我からも心懸けて行かなければならぬ。然らざれば其の有難いお日様も反つて饑饉の本ともなる譯である。御光りを受けつつある我我の眞心に依つて神様を愈々お活かし申し益々其の御德を發揚せしむることが必要である。

第三　高天原の神神は理想信念の骨子たる御方なり。

而して高天原の以上の神様は殊に理想信念に極めて深い關係の有る御方で皆理想信念の骨子中心として存在せらるる神神である。八百萬神がありますけれども、其の中で特に主要なるものは、是等の神様であります。さうして(一)是等の神は　別天神並に神世七代の神神の御性質を皆分擔して發揮しつつあらせらるるので(二)亦他方から見ると　天照大御神の和魂の分析が是等の神様であります。恰も日光が分析せられて七色となり、七色は綜合せられて唯一日光あるのみと同じである。是等の神神が　天照大御神をお助け申すと同時に、是等の神神の御性質は　天照大御神の中に存在して居るのであります。されば天照大御神を分析すると是等の神神となり、從つて又是等の神は別天神並に神世七代の神の御性質の現はれである次第であります。

第四款　事柄の解決と一心同體

さて天石屋戸隱れの事は、古事記にどう云ふ風に書いてあるかと申すとそれは曾て一寸お話致しましたけれども、其の時においてにならなかつた御方の爲に極めて簡單に申し上げたいと思ひます。

古事記に依ると　天照大御神が天石屋戸にお隱れになつた爲に高天原も豐葦原中國も眞暗になつた。そこで　八百萬神が天安河原に御集まりになつて、第八意思兼神に思はしめて、常夜の長鳴鳥を集へて鳴かしめ、今に太陽が出づる如くに　天照大御神がお現れになるであらうと積極的に期して居つたのである。古神道には失望落膽などと云ふことは少しもない。天照大御神が天石屋戸にお隱れ遊ばしても落膽することなく、常夜の長鳴鳥を集めて鳴かせて御出御になることを期して仕事をして居り。又大きな眞賢木(眞榮木)を根拔じにし

て、其の上の枝に　玉祖命をして作らしめた八尺の勾璁の五百津の御統の珠を取り著け、中の枝には八咫鏡を繫け下の枝には白和幣、青和幣を垂れました。此璁は　天照大御神　天孫以下の萬世一系を現はし、鏡は　天照大御神及び此の大神と代代の　天皇の御同體を現はすものであり、白和幣、青和幣は『清い心持を以て愈、青く榮えて行く青人草(萬民、蒼生)即被總攬者』の心身を供物として献上することを現はしたものであるが(今日幣帛を奉り又お賽錢を上げる等も、尙ほ奉る人が自己を犧牲にし己を奉る意味をも有す)是等の種種の物を取り著けて之を天石屋戸の前に供へ、布刀玉命が太御幣帛を取りて奉り、天兒屋命が太祝詞事を白し、天手力男神が御戸の側に隱れ立ち、天宇受賣命が天蘿(『ヒカゲ』は『日靈』にして、『お日樣の御靈』である、即ち　天照大御神の御心の働きを表現して　天宇受賣命が行動せらるる表徵である)と申す、天照大御神の心の働きに摸らへた蘿を襷に繫け、天眞拆葛を鬘とし、內の空なる桶を伏せて空筒の中から音を生ぜしむるやうに蹈み動かし(心を空ふす、虛より音を生ぜしむ、太鼓の始まりといふ)平らかなる心持になつて御神樂を爲され、而かも神人合一の域に立つて、一切の秘密無く、天眞(隨神)を現はして面白く舞ひを爲されたものであるから、八百萬神が一心となつて一と咲ひに咲はれて、それが爲に高天原自身が動搖するやうであつた(高天原夫自身も亦咲ふたか)。そこで　天照大御神が『さぞ眞暗で困つて居るであらうと心配したのに何を樂んで咲つて居るか』と仰せられて、天石屋戸を細目に開けて御覽になると、天宇受賣命が『汝が命に益りて貴き神坐すが故に皆樂んで居ります』と申上げた。さうすると、天照大御神がこれは愈、奇しいと思し召されて顏をお出しになると、天兒屋命と　布刀玉命とが鏡を指し出してお見せ申したのである。ここが大切の所であると考へます。即ち外部に在つた　八百萬神も　天照大御神の在來の御光に依つて斯の如き調和を得て働いて居るのであり、而かもそこにおいでになる神神は本來皆　天照大御神の寫しに外ならぬのであるから、是等の八百萬神は實に　天照大御神の映つて居る活きたる『八頭鏡』に外ならぬ。『天照大御神に益さりて貴き神坐す』と申されたのは、つまり　天照大御神の活き寫しが、存在しておいでになることを意味するので、其の寫しを形に現はす爲に鏡を

『天つ晴れ。あな面白。あな手伸し。あな明け。』

享樂主義に非ず手足身體も伸び伸びとして居ることなり、之を古神道の手伸へたのしとなす

指出したのであります。そこで其の鏡には　天照大御神が其の儘現はれられた譯で、內外合一と云ふことが面白くここに表はされて居る次第である。天照大御神が愈〻奇しと思ぼして、やや戸より外にお出になつた時に、そこに隱れ立つて居られた　天手力男神が御手を取つて引出し申し、布刀玉命が其の後方に注連繩を引渡してもう此より內に還り入り給ふなと申上げた。そこで　天照大御神の御光が輝いて其の後は、再び天石屋戸にお隱れになることとなく、我我は祖先以來永遠に『天つ晴れ。あな面白。あな手伸し。あな明け』と一心同體となり歌ひつつある。是ぞ我我の心持の言ひ表はしであり、是ぞ神代より傳はりし心持であり、是ぞ高天原より傳來せるものであります。（此の箇所は古語拾遺を見られよ）故に我我は今日でも新年を迎ふる毎に榊を立て注連繩を張つて、天照大御神及び萬世一系の　天皇の御榮えになること、又我我も益〻向上發展して決して和魂の退轉せぬことを期し且つ之を反省する次第であります。

（以上第十一講）

第五款　理想は事物中に活躍しつつあり

此の前には第二節として高天原の理想即ち理想界の事をお話致しましたが今尙ほ理想は一切の事物中に活躍しつつあることを反省して置きたうございます。例へば(一)種子一粒と雖も、凡そ目に見え耳に聞ゆる樣な物は、現身の感官を透して感性知覺として其の存在を見ることが出來るものである。けれども其の種子と云ふものはただ目や耳に見たり聞いたりするだけのものではない其の中に活きて居る理想力を有つて居るものが種子である。松の實であるならば、それが溫度や濕氣や肥料を利用し(是等は根の國の材料なり)年を經るときには所謂松と云ふ大木が出來るのであつて、『特殊の葉を有し、枝を有し、幹を有し、而かも常磐に存在する松』（理想を含むものが松の實である。活きて居る理想(理想とは理窟のことではなく、活きたる力である)を其の中に含んで居るのでありまして、米粒であるならば其の中から、『米』が生えて來る譯であります。勿論現に米などは生えては居りませぬけれども、目で見、耳で聞き得る物質の中

に、活きて居る所の理想が籠つて居る。それと離れずに見て始めて米粒と云ふものが意味を成し、其の松の木と離れずに見て始めて松の實と云ふものが特殊の意味の有る存在となる次第である。併しそれには、色色の不明なる事實が伴つて居るが、今日は夫については申上げませぬ。(二)更に大きな世界を取つて見ると、目や耳の感官などに依つて識別せらるるものの外に、尙『活きて居る理想界』の存することは確かであります。それを大和民族は心持に於て深く感じて居つたのでありますが、之を理窟の形式でなく、特殊の歴史的事實と結付けて物語にして記憶して居つた譯であります。(三)歴史的の事實などは之を卑近に見るときには、特殊の行動即ち辷つて轉んだと云ふやうな事ばかりのやうでありますけれども、其の背後に在る理想を見ると、一寸とした事柄の中にも、なかなか大きな理想が存在して居る。それ故に物事を洞察する眼や感じの發達した者は、一寸人が辷つて轉んだのを見ても、大なる發明をするとか、其の中に在る原理に氣が付くとかいふやうなものである。(四)そこで戰爭と云ふ事も、だだ感官に現はれた所だけを以て其の事實を見ると、實に馬鹿馬鹿しいものである。功利を爭ひ、貴重の生命をお互に傷つけ合つて、無用の殺傷騷ぎをして居ると言はねばならず、何程無事に苦しむにせよ、美しきこととは思はれぬ。けれども心を深くして、其の戰爭と離れて居らぬ理想を洞察して見ると、他の事柄よりもより以上、より多く、より強く、又最も美しく、理想が其の中に其の背後に輝いて居るやうな次第のものであります。

第三章　豐葦原に於ける　天孫御降臨の準備

次に豐葦原中國に於ける　天孫御降臨の事を申上げたいと思ひます。是は『現國即ち現實界に於ける理想實現の準備』と申して宜しい、眞に神聖なる現實界を確定せしむべき準備が現實界を中心としても行はれつつあつたのである。それを申上げるにつきまして中にて　建速須佐之男命については、先づ豐葦原中國に於ける大切なる神樣の